

# 太子カントリー倶楽部建設に伴う 植田遺跡ほか発掘調査報告書

- 尺 堂 遺 跡 —
- 向 山 遺 跡 —
- 植 田 遺 跡 —
- 松 山 山 城 遺 跡 —
- 蜂 ヶ 尾 遺 跡 —
- 一須賀古墳群N支群 —
- そ の 他 の 遺 跡 —

1996年 3月

一須賀古墳群発掘調査委員会

## は し が き

大阪府の東南部、太子町と河南町にまたがって分布する一須賀古墳群は、府域でも八尾市の高安千塚、柏原市の平尾山千塚と並ぶ一大群集墳として知られています。このような群集墳は、村落を構成する有力家族層によって築造されたと考えられており、径10m前後の小規模な古墳が密集して築造されるものです。二百基余りによって構成されている一須賀古墳群は、古墳時代後期から終末期にかけて築造され、これまでの発掘調査において金銅製の耳飾りや冠、ミニチュア炊飯具などが出土していることなどから、高度な技術を持った渡来系の人々の墳墓と考えられています。

また一須賀古墳群の北部の磯長谷は「王陵の谷」とも形容され、総称して梅鉢御陵と呼ばれる敏達・用明・推古・孝徳天皇陵と聖徳太子墓をはじめ、国史跡の二子塚古墳、府史跡の御嶺山古墳、仏陀寺古墳、松井塚古墳などの7世紀の著名な古墳が数多く分布しています。この地域の遺跡調査で得られる成果は、大陸の文化や技術を積極的に摂取し、国家としての体制を整えつつあった飛鳥時代の我が国の歴史を知るうえで、極めて重要な位置を占めると言えるでしょう。

高度経済成長に伴う開発の波が日本全土に押し寄せた昭和40年代前半、一須賀古墳群もその一部が宅地造成工事に伴って調査後に消滅したものの、昭和45～48年には102基の古墳を含む29haを大阪府が取得、昭和61年に至って府立近つ飛鳥風土記の丘として公開されました。平成6年には隣接地を合わせ52haが国史跡に指定され、また風土記の丘に接して府立近つ飛鳥博物館もオープンし、貴重な文化遺産を広く公開するための基盤が整いつつあります。

ところが、この風土記の丘に続く東の丘陵一帯でゴルフ場開発計画が昭和61年頃から狙い上し、大阪府、地元町等との長期間にわたる協議の結果、遺跡の取り扱いについては西側の古墳密集部分を自然緑地として保存すること、造成地については発掘調査を実施することで合意に達したため、平成5年から大阪府教育委員会、太子町教育委員会、河南町教育委員会による調査委員会を設置し調査を実施することになりました。調査の結果、群集墳に関しては造成地部分へはほとんど墓域を拡大していないことが判明すると共に、古代から中世に及ぶ集落跡や中世山城に関する成果が数多く得られました。これらの内容は本書で報告するところです。

最後になりましたが、今回の発掘調査の実施に当たり、多大なる御協力を賜った関係諸機関、諸氏に深く感謝の意を表すると共に、今後とも文化財保護行政に対して一層の御理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年3月

一須賀古墳群発掘調査委員会

## 例 言

1. 本書は、太子カントリー倶楽部建設工事に伴って実施した遺跡発掘調査報告書である。
2. 現地調査および報告書作成は、大阪府教育委員会、河南町教育委員会、太子町教育委員会で組織した一須賀古墳群発掘調査委員会を主体として実施した。調査期間は下記のとおりである。  
 試掘調査 平成5年6月～平成5年10月                      発掘調査 平成5年11月～平成6年11月  
 内業調査 平成6年11月～平成8年3月
3. 一須賀古墳群発掘調査委員会の組織は下記のとおりである。

平成5年度	大阪府教育委員会	文化財保護課		課長	亀岡勝敏
	"	"		参事	井藤 徹
	"	"		主幹	堀江門也
	"	"	記念物係	主査	広瀬和雄
	"	"	"	技師	岩崎二郎
	太子町教育委員会			教育長	多吾 巧
	"	指導課		課長	勝良憲治
	"	"		技師	池田貴則
	河南町教育委員会			教育長	中井義治
	"	社会教育課		課長	福田正穂
	"	"		主事	赤井毅彦
平成6年度	大阪府教育委員会	文化財保護課		課長	田中 宏
	"	"		参事	井藤 徹
	"	"	記念物係	係長	瀬川 健
	"	"	"	主査	山本 彰
	"	"	"	技師	岩崎二郎
	太子町教育委員会			教育長	多吾 巧
	"	社会教育課		課長	水本好洋
	"	"	社会教育係	技師	池田貴則
	"	"	"	主事	鍋島隆宏
	河南町教育委員会			教育長	中井義治
	"	社会教育課		参事兼課長	葛田隆夫
	"	"		主事	赤井毅彦
平成7年度	大阪府教育委員会	文化財保護課		課長	田中 宏
	"	"		主幹	石神 怡
	"	"	記念物係	係長	瀬川 健

	”	”	”	主 査	山本 彰
	”	”	”	技 師	上林史郎
太子町教育委員会				教育長	多吾 巧
	”	社会教育課		課 長	水本好洋
	”	”	社会教育係	主 査	池田貴則
	”	”	”	主 事	鍋島隆宏
河南町教育委員会				教育長	福田惇一
	”	社会教育課		参事兼課長	葛田隆夫
	”	”		主 査	赤井毅彦

4. 現地の試掘及び発掘調査は、広瀬、岩崎、赤井、池田が担当した。
5. 調査に要した費用は、太子ゴルフ観光株式会社が負担した。
6. 調査の実施にあたっては、次の諸氏の参加があった。
- |       |        |       |        |       |       |
|-------|--------|-------|--------|-------|-------|
| 秋山 敦子 | 神前 由紀子 | 坂上 豊  | 田中 壽壽子 | 仲林 絹代 | 仲堅 洋一 |
| 西岡 千嘉 | 春口 広知  | 牧野 英史 | 松葉 竜司  | 村元 健一 |       |
7. 本書で使用した遺物写真については、阿南写真工房に委託した。
8. 本書の執筆は山本、岩崎、上林、赤井、池田が行い、編集については上林、池田が担当した。文責は本文目次及び文末に記すとおりである。
9. 本書の遺構実測図に表示する方位は国土座標第VI系に基づく座標北、標高はT.P.で表示した。
10. 調査の実施および本書の作成に当たっては、下記の関係諸機関、諸氏に協力を受けた。記して謝意を表する。
- |                     |                         |
|---------------------|-------------------------|
| 太子ゴルフ観光株式会社         | 大日本土木株式会社               |
| 一瀬和夫（大阪府立近つ飛鳥博物館）   | 上田睦（藤井寺市教育委員会）          |
| 上野勝巳（太子町立竹内街道歴史資料館） | 千田嘉博（国立歴史民俗博物館）         |
| 西山昌孝（千早赤阪村教育委員会）    | 松井忠春（助京都府埋蔵文化財調査研究センター） |
| 宮野淳一（大阪府立弥生文化博物館）   |                         |
11. 本調査における遺物、写真、カラースライド、実測図等は、太子町教育委員会において保管している。

# 目 次

はしがき

例言

第I章 調査に至る契機と経過	(山本 彰)	1
第II章 地理的・歴史的環境	(赤井毅彦)	3
第III章 調査の成果		7
第1節 試掘調査	(池田貴則)	7
第2節 尺堂遺跡(第I区・第II区)の調査	( 〃 )	11
第1項 はじめに		11
第2項 尺堂遺跡第I区		11
第3項 尺堂遺跡第II区		15
第4項 尺堂遺跡の出土遺物		20
第5項 小結		24
第3節 向山遺跡の調査	(池田)	27
第1項 はじめに		27
第2項 遺跡の立地		27
第3項 基本層序		27
第4項 遺構と出土遺物		30
第5項 小結		30
第4節 植田遺跡の調査	(岩崎二郎・上林史郎・池田)	31
第1項 遺跡の立地	(岩崎)	31
第2項 検出された遺構		34
第3項 出土遺物	(上林・池田)	47
第4項 小結	(岩崎・上林)	75
第5節 松山山城遺跡の調査	(池田)	87
第1項 はじめに		87
第2項 遺跡の立地		87
第3項 基本層序		88
第4項 遺構		91
第5項 遺物		98
第6項 小結		101
第6節 蜂ヶ尾遺跡の調査	(赤井)	105
第1項 はじめに		105
第2項 遺跡の立地		106
第3項 I区		106
第4項 II区		110
第5節 小結		110

第7節 一須賀古墳群N支群の調査……………	(赤井)	111
第1項 はじめに……………		111
第2項 N-8号墳……………		112
第3項 N-9号墳……………		114
第4項 N-10号墳……………		116
第5項 N-11号墳……………		119
第6項 小結……………		119
第8節 その他の遺跡の調査……………	(池田・赤井)	121
第1項 東丘陵の火葬墓……………	(池田)	121
第2項 焼土坑群A・B・C地区……………	(赤井)	123
第IV章 まとめ……………	(岩崎)	127

## 挿 図 目 次

第1図 一須賀古墳群周辺遺跡分布図(1/50,000)	第2図 試掘トレンチ配置図(1/5,000)
第3図 尺堂遺跡調査区位置図(1/5,000)	第4図 第I区南北土層断面図(1/50)
第5図 第I区東半部遺構配置図(1/400)	第6図 SK-1実測図(1/20)
第7図 第II区遺構配置図(1/400)	第8図 SK-2実測図(1/40)
第9図 SK-3実測図(1/20)	第10図 第II区東西土層断面図(1/40)
第11図 焼土坑SK-4(1/20)	第12図 焼土坑SK-5(1/20)
第13図 SX-6榧実測図(1/40)	第14図 出土遺物実測図①(1/4)
第15図 出土遺物実測図②(1/4)	第16図 出土遺物実測図③(1/4)
第17図 出土遺物実測図④(1/4)	第18図 出土遺物実測図⑤(1/4)
第19図 向山遺跡調査区位置図(1/5,000)	第20図 向山遺跡調査区南壁断面図(1/50)
第21図 向山遺跡遺構配置図(1/300)	第22図 向山遺跡出土遺物実測図(1/4)
第23図 植田遺跡周辺地形図(1/2,000)	第24図 植田遺跡土層断面図①
第25図 植田遺跡土層断面図②	第26図 植田遺跡遺構配置図(約1/600)
第27図 建物1実測図(1/80)	第28図 建物2実測図(1/80)
第29図 建物3・4実測図(1/80)	第30図 建物5実測図(1/80)
第31図 建物6実測図(1/80)	第32図 井戸2実測図(1/40)
第33図 井戸3、井戸5、土坑7実測図(1/40)	第34図 集石遺構2実測図(1/40)
第35図 集石遺構1実測図(1/40)	第36図 土坑1実測図(1/40)
第37図 土坑2実測図(1/40)	第38図 土坑3・4・5・8実測図(1/40)
第39図 土坑6実測図(1/60)	第40図 河川跡断面図(1/60)
第41図 ビット出土遺物(1/4)	第42図 井戸1～3、5出土遺物(1/4)
第43図 井戸4出土遺物(1/4)	第44図 集石遺構3出土遺物(1/4)
第45図 土坑1出土遺物(1/4)	第46図 土坑2出土遺物(1/4)
第47図 土坑3、8出土遺物(1/4)	第48図 土坑4出土遺物(1/4)

- 第49図 土坑5出土遺物(1/4)  
 第51図 土坑7出土遺物(1/4)  
 第53図 その他の土坑出土遺物(1/4)  
 第55図 河川跡下層出土遺物①(1/4)  
 第57図 植田遺跡包含層地区割図(1/800)  
 第59図 包含層出土遺物①(1/4)  
 第61図 凝灰岩切石実測図①(1/4)  
 第63図 凝灰岩切石実測図③(1/4)  
 第65図 凝灰岩切石実測図⑤(1/4)  
 第67図 松山山城遺跡調査区位置図(1/5,000)  
 第69図 松山山城古墳墳丘実測図(1/80)  
 第71図 火葬墓SK-1位置図(1/200)  
 第73図 主尾根北端部堀割SD-3実測図(1/80)  
 第75図 支尾根B遺構配置図(1/150)  
 第77図 支尾根B/SB-6実測図(1/40)  
 第79図 カット面下部出土遺物(1/4)  
 第81図 平石城位置図(1/5,000)  
 第83図 竪穴建物SB-1(1/50)  
 第85図 蜂ヶ尾遺跡I区出土遺物②(1/2)  
 第87図 一須賀古墳群調査区全体図(1/200)  
 第89図 N-9号墳出土遺物実測図(1/2, 1/4)  
 第91図 N-10号墳墳丘図(1/80)  
 第93図 N-11号墳(1/40)  
 第95図 N支群出土銭貨拓本(1/1)  
 第97図 遺構配置図(1/100)  
 第99図 火葬墓出土土師器(1/4)  
 第101図 焼土坑群B地区(1/100)  
 第103図 焼土坑群C地区(1/100)  
 第50図 土坑6出土遺物(1/4)  
 第52図 溝1及び土坑16出土遺物(1/4)  
 第54図 河川跡上層出土遺物(1/4・1/2)  
 第56図 河川跡下層出土遺物②(1/4・1/2)  
 第58図 遺構面直上出土遺物(1/4・1/2)  
 第60図 包含層出土遺物②(1/4・1/1)  
 第62図 凝灰岩切石実測図②(1/4)  
 第64図 凝灰岩切石実測図④(1/4)  
 第66図 松山山城遺跡地区割図(約1/1,500)  
 第68図 松山山城遺跡試掘トレンチ断面図(1/100)  
 第70図 松山山城古墳主体部実測図(1/40)  
 第72図 火葬墓SK-1実測図(1/10)  
 第74図 カット遺構SX-4実測図(1/80)  
 第76図 支尾根B/SB-5実測図(1/40)  
 第78図 出土遺物(古墳、火葬墓)(1/4, 1/2)  
 第80図 出土遺物(その他)(1/4)  
 第82図 I区全体図(1/200)  
 第84図 蜂ヶ尾遺跡I区出土遺物①(1/4)  
 第86図 蜂ヶ尾遺跡II区遺構図(1/250, 1/50)  
 第88図 N-8号墳石室・床面出土遺物実測図  
 第90図 N-9号墳石室・床面出土遺物実測図  
 第92図 N-10号墳石室・床面出土遺物実測図  
 第94図 N-11号墳出土遺物実測図(1/2, 1/4)  
 第96図 調査区位置図(1/5,000)  
 第98図 火葬墓実測図(1/20)  
 第100図 焼土坑群A・B地区位置図(1/5,000)  
 第102図 焼土坑群A地区(1/100)

## 表 目 次

- 表1 尺堂遺跡遺物観察表(1)  
 表3 植田遺跡出土遺物量表①  
 表5 植田遺跡出土遺物量表③  
 表7 植田遺跡出土遺物量表⑤  
 表9 植田遺跡出土遺物量表⑦  
 表11 植田遺跡出土遺物量表⑨  
 表13 松山山城遺跡遺物観察表① 土器  
 表2 尺堂遺跡遺物観察表(2)  
 表4 植田遺跡出土遺物量表②  
 表6 植田遺跡出土遺物量表④  
 表8 植田遺跡出土遺物量表⑥  
 表10 植田遺跡出土遺物量表⑧  
 表12 植田遺跡出土遺物量表⑩  
 表14 松山山城遺跡遺物観察表② 土器

## 写真目次

写真1 昭和58年度の調査（O-6号墳）

写真2 植田遺跡現地説明会風景

写真3 松山山城遺跡の試掘トレンチ

写真4 N支群保存整備状況

## 図版目次

- 図版1 調査地全景航空写真 事業着手前（方位は上が北）
- 図版2 尺堂遺跡 調査区遠景（西から）、調査区遠景（北から）
- 図版3 尺堂遺跡第Ⅰ区 調査区全景（東から）、調査区全景（北から）
- 図版4 尺堂遺跡第Ⅰ区 東半部全景（北西から）、テラス面遺構（南から）
- 図版5 尺堂遺跡第Ⅰ区 東半部全景（西から）、西半部全景（北東から）
- 図版6 尺堂遺跡第Ⅰ区 最下段水田部、地滑り痕跡、調査区南北断面（1）、調査区南北断面（2）
- 図版7 尺堂遺跡第Ⅰ区 SK-1、SK-1 遺物出土状況
- 図版8 尺堂遺跡第Ⅱ区 調査区全景（北から）、調査区全景（南から）
- 図版9 尺堂遺跡第Ⅱ区 南端部遺構（南から）、SK-3
- 図版10 尺堂遺跡第Ⅱ区 SK-2、SK-2 東西断面西半、SK-2 南北断面
- 図版11 尺堂遺跡第Ⅱ区 焼土坑SK-4・5、焼土坑SK-4、焼土坑SK-5
- 図版12 尺堂遺跡第Ⅱ区 SX-6 全景（南から）、SX-6 全景（北から）、SX-6 東西断面
- 図版13 尺堂遺跡 遺物 第Ⅰ区包含層
- 図版14 尺堂遺跡 遺物 第Ⅰ区包含層
- 図版15 尺堂遺跡 遺物 第Ⅰ区包含層・SX-6・SK-3・SK-1
- 図版16 尺堂遺跡 遺物 第Ⅰ区包含層・SK-1、第Ⅰ区包含層
- 図版17 尺堂遺跡 遺物 第Ⅰ区包含層、第Ⅰ区包含層
- 図版18 尺堂遺跡 遺物 第Ⅰ区包含層、第Ⅰ区包含層
- 図版19 尺堂遺跡 遺物 第Ⅰ区包含層、第Ⅰ区包含層
- 図版20 向山遺跡 調査区全景（北から）、調査区全景（東から）
- 図版21 向山遺跡 東半部遺構（南から）、西半部遺構（南から）
- 図版22 向山遺跡 包含層出土遺物、遺物5出土状況（1）、遺物5出土状況（2）
- 図版23 植田遺跡 調査区遠景（南西から）、調査区遠景（西から）
- 図版24 植田遺跡 調査区遠景（南西から）、調査区遠景（北西から）
- 図版25 植田遺跡 河川跡、河川跡断面、河川跡東端断面
- 図版26 植田遺跡 調査区全景（南東から）、第Ⅴ区遺構全景（南から）
- 図版27 植田遺跡 土坑8、土坑8 遺物出土状況、土坑5
- 図版28 植田遺跡 土坑7、土坑7・井戸5、井戸5 底部
- 図版29 植田遺跡 土坑6、土坑6 底部溝、土坑6 石材出土状況

- 図版30 植田遺跡 V-SW区SP-53、V-NE区SP-84、V-NE区遺構面直上遺物出土状況
- 図版31 植田遺跡 III区遺構全景(南東から)、III区遺構全景(南から)
- 図版32 植田遺跡 III区北半部遺構全景、井戸4、集石遺構3
- 図版33 植田遺跡 III-SE区遺構面直上遺物出土状況、建物6、建物5
- 図版34 植田遺跡 土坑4、土坑3、土坑3 凝灰岩切石出土状況
- 図版35 植田遺跡 I区遺構全景(西から)、I区北半部遺構
- 図版36 植田遺跡 井戸3、井戸3 凝灰岩切石出土状況、井戸3、井戸3 底部
- 図版37 植田遺跡 井戸3 完掘状況、井戸1、井戸1
- 図版38 植田遺跡 集石遺構1・2、集石遺構1、集石遺構1北半部
- 図版39 植田遺跡 集石遺構1石材検出状況、集石遺構2、集石遺構1完掘状況
- 図版40 植田遺跡 II区遺構面直上遺物出土状況、土坑2、建物1
- 図版41 植田遺跡 遺物 井戸1、井戸3、井戸4、井戸5
- 図版42 植田遺跡 遺物 井戸4、土坑1、土坑2、土坑3
- 図版43 植田遺跡 遺物 土坑2、土坑8、土坑4、土坑6
- 図版44 植田遺跡 遺物 土坑7、溝1、土坑22、土坑21、土坑12、土坑9、土坑18
- 図版45 植田遺跡 遺物 土坑14
- 図版46 植田遺跡 遺物 土坑14、土坑13、河川跡上層、河川跡下層
- 図版47 植田遺跡 遺物 河川跡下層
- 図版48 植田遺跡 遺物 河川跡下層
- 図版49 植田遺跡 遺物 河川跡下層、遺構面直上
- 図版50 植田遺跡 遺物 遺構面直上、河川跡、包含層
- 図版51 植田遺跡 遺物 包含層
- 図版52 植田遺跡 遺物 青磁、白磁一括
- 図版53 植田遺跡 遺物 凝灰岩切石
- 図版54 植田遺跡 遺物 凝灰岩切石
- 図版55 松山山城遺跡 調査地遠景(南西から)、調査地遠景(北東から)
- 図版56 松山山城遺跡 調査地全景(西から)、調査区全景(南西から)
- 図版57 松山山城遺跡 松山山城古墳と火葬墓SK-1、火葬墓SK-1、火葬墓SK-1
- 図版58 松山山城遺跡 松山山城古墳主体部(1)、松山山城古墳主体部(2)
- 図版59 松山山城遺跡 松山山城古墳床面遺物出土状況(1)、松山山城古墳床面遺物出土状況(2)
- 図版60 松山山城遺跡 主尾根北半部全景(北西から)、主尾根北端部SD-3
- 図版61 松山山城遺跡 支尾根A平坦部全景(東から)、支尾根A平坦部とカット遺構SX-4
- 図版62 松山山城遺跡 支尾根A平坦部石材出土状況、火葬墓SK-2、火葬墓SK-2
- 図版63 松山山城遺跡 カット遺構SX-4、カット遺構SX-4、SX-4下部石材出土状況
- 図版64 松山山城遺跡 支尾根B遺構全景、SB-5、SB-6
- 図版65 松山山城遺跡 遺物 松山山城古墳・SK-2・SX-4下部平坦面
- 図版66 松山山城遺跡 遺物 SX-4出土遺物、支尾根A平坦部出土遺物
- 図版67 松山山城遺跡 遺物 SB-5・SP-7・SP-8・支尾根A平坦部・SX-4・SK-2

- 図版68 蜂ヶ尾遺跡 調査地遠景(北から)、調査地遠景(北西から)
- 図版69 蜂ヶ尾遺跡Ⅰ区 竪穴建物SB-1全景(南から)、竪穴建物SB-1全景(北から)
- 図版70 蜂ヶ尾遺跡Ⅰ区 SB-1遺物出土状況、排水溝、遺物出土状況(1)、遺物出土状況(2)
- 図版71 蜂ヶ尾遺跡Ⅱ区 調査区全景(北から)、調査区全景(北から)
- 図版72 蜂ヶ尾遺跡Ⅰ区 遺物 SB-1
- 図版73 蜂ヶ尾遺跡Ⅰ区 遺物 SB-1
- 図版74 一須賀古墳群N支群 調査地遠景(東から)、調査区全景(南から)
- 図版75 一須賀古墳群N支群 N-8号墳全景(南から)、同全景(南西から)
- 図版76 一須賀古墳群N支群 N-8号墳石室掘方検出状況、同石室、N-11号墳南側土器出土状況
- 図版77 一須賀古墳群N支群 N-8号墳石室床面断割り状況、同掘方断面(右側壁)、同(奥壁)
- 図版78 一須賀古墳群N支群 N-9号墳石室掘方検出状況、同石室全景(南から)
- 図版79 一須賀古墳群N支群 N-9号墳遺物出土状況(1)、同遺物出土状況(2)、同石材採取跡
- 図版80 一須賀古墳群N支群 N-9号墳石室全景(東から)、同石室、同石室掘方(奥側壁)
- 図版81 一須賀古墳群N支群 N-10号墳石室掘方検出状況、同石室
- 図版82 一須賀古墳群N支群 N-10号墳石室(南西から)、同石室(南から)、同石室(東から)
- 図版83 一須賀古墳群N支群 N-10号墳全景(南から)、同全景(南から)
- 図版84 一須賀古墳群N支群 N-10号墳石室内堆積土断面、同石室内堆積土断面、同周溝断面
- 図版85 一須賀古墳群N支群 N-11号墳全景(南から)、同掘方内堆積土断面、同遺物出土状況
- 図版86 一須賀古墳群N支群 遺物
- 図版87 東丘陵火葬墓 調査区全景(東から)、調査区全景(西から)
- 図版88 東丘陵火葬墓 火葬墓上層土器出土状況、土坑完掘状況、火葬墓出土土師器
- 図版89 焼土坑群 B地区遠景(北から)、A地区遠景(西から)
- 図版90 焼土坑群A地区 調査区全景(南から)、焼土坑群
- 図版91 焼土坑群A地区 SK-1、SK-3、SK-4
- 図版92 焼土坑群B地区 調査区全景(南から)、調査区全景(北西から)
- 図版93 焼土坑群B地区 北半部焼土坑群、南半部焼土坑群
- 図版94 焼土坑群C地区 調査地遠景(北から)、調査区全景(南から)

## 附 図 目 次

- 附図1 尺堂遺跡第Ⅰ区構図(1/200) 附図2 松山山城遺跡平面図1(1/200)
- 附図3 松山山城遺跡平面図2(1/200) 附図4 松山山城遺跡平面図3(1/200)

## 第I章 調査に至る契機と経過

一須賀古墳群において、最初の大規模な開発計画が持ち上がったのは、昭和42年から43年にかけてのことであり、大和団地株式会社の住宅開発計画に先立って約30基の古墳と弥生時代集落が調査されたことにさかのぼる。この際の開発の第1期計画については、阪南ネオポリスとして、最終的に宅地化されたが、古墳の最も集中する部分において計画された第2期計画については、住宅開発を中止することで古墳群を保存することとなり、大阪府によって昭和45年から48年にかけて29ha(古墳数102基)を対象に風土記の丘計画地として公有化された。

続く昭和57年には、公有化された北側の区域において、再び大きな住宅開発が丸紅商事株式会社と飛鳥建設株式会社により計画された。事業者との協議の結果、まず分布調査を行うことと、試掘調査を実施し古墳の保存状況を調べることで合意に達した。試掘調査は11基の古墳を対象とし昭和58年4月から同年10月まで実施し、予想以上に古墳の保存状況が良好なことが判明した。



写真1 昭和58年度の調査(〇-6号墳)

この際の実験計画は、昭和59年に至って断念されたが、新たに同地をゴルフ場として開発する計画がなされ、昭和61年以降、太子ゴルフ観光株式会社によって事前の協議がなされるに至った。その後の長期間に亘る協議の結果、開発区域のうち古墳が密集する地域については、ゴルフ場用地として含めるものの造成を行わない自然緑地として保存することで合意に達した。

最終的に都市計画法による開発許可は平成5年3月におりたため、所定の手続きの後、文化財調査を行なうこととなった。文化財調査は、開発計画地が太子町と河南町にまたがることから、平成5年6月14日に両町教育委員会と大阪府教育委員会による一須賀古墳群発掘調査委員会を組織して実施することとなった。

文化財調査は、まずその広がりや埋没深度、遺物の包含状況の把握の観点から、試掘調査を実施することで協議が整った。試掘調査の方法は、開発予定区域のうち、造成予定区域約51.6haのほとんどすべての丘陵尾根・谷・台地に幅1m前後のトレンチを設定し、遺構を精査しながら、地山面までの掘削を進めた結果、トレンチの総延長距離は約5kmの長さに及んだ。なお台地は機械と人力、それ以外の区域は人力で掘削し、調査期間は平成5年6月23日から同10月26日まで実施した。試掘調査の結果、当初の分布調査において古墳の可能性があると考えられていた約20基の古墳状隆起は、すべて自然地形であることが判明したが、新たに3ヶ所の集落遺跡等が発見されるとともに、2ヶ所の山城遺跡等の内容が把握されるに至った。なお発見されたそれぞれの遺跡については、それぞれ小字名をとって遺跡名とした。

試掘調査の結果を受けた本格的調査は、平成5年11月から順次着手し、平成6年3月に植田遺跡、5月に松山山城遺跡、8月に向山遺跡、尺堂遺跡と炉跡A、9月に炉跡B・C、10月に蜂ヶ尾遺跡、11月

に一須賀古墳群N支群の調査が終了し、現地での調査を終えた。

調査期間中には、調査によって得られた成果を一般に公開する目的で、下記のように現地説明会を実施した。

植田遺跡	平成6年3月19日
向山遺跡・尺堂遺跡	平成6年9月15日
蜂ヶ尾遺跡・一須賀古墳群N支群	平成6年10月29日



写真2 植田遺跡現地説明会風景

また調査によって検出された遺構のうち遺構密度が高く、保存状況が良好であった植田遺跡と一須賀古墳群N支群については、事業者に協力を求め保存協議を実施した。その結果、植田遺跡については調査面積約4,000㎡のうち掘立柱建物の存在する区域約3,350㎡について工法を変更し保存することとなり、海砂による埋戻しの後、盛土を施すこととなった。一方、一須賀古墳群N支群では、当初の地形を削平する計画を一部変

更し、保存状況の比較的良好な2基の横穴式石室について現地保存し、保存状況の良好でない横穴式石室1基については同一尾根上に移築保存することとなった。なお、それぞれの古墳については、盛土による墳丘の復元の後、芝生による養生を実施している。

(山本)

①堀江門也ほか 『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』 大阪府教育委員会 1969

堀江門也・菅原正明ほか 『東山遺跡』 大阪府教育委員会 1979

②山本彰 『一須賀・業室古墳群―業室地区の調査―』 大阪府教育委員会 1984

③その後、自然緑地については、更に保存の担保性を高めるために平成6年10月7日付で、近つ飛鳥風土記の丘とともに官報告示され、国の史跡として指定された。

## 第二章 地理的・歴史的環境

大阪府南河内郡太子町・河南町は大阪府の東南部に位置する。北は羽曳野市、西は富田林市、南は千早赤飯村、東は二上山、葛城山の頂をもって奈良県北葛城郡當麻町・新庄町、御所市と接している。二上山の南には大和の飛鳥に通ずる竹内峠があり、葛城山の南、金剛山との間には葛城の地へと通ずる水越峠がある。また、西側には石川が北流し、陸路・水路の交通の要衝といえる。

二上山、葛城山の西にはその前山である四つの山塊がある。北から二つ目、太子町・河南町の間にもたがる山塊の北斜面に一須賀古墳群が存在する。一須賀古墳群の北には幅の広い谷地形があり、磯長谷と呼ばれる。7世紀の王陵があることから王陵の谷とも呼ばれている。この谷の西には沖積地が広がっている。河南町側、葛城山の前山の西、梅川流域には河岸段丘がみられ、段丘上は河南町の中央にあたり通称河南台地と呼ばれている。台地の西側には千早川が北流し、石川に合流している。

地質的にみると葛城山は花崗岩類によって構成され、その前面には砂礫と粘土からなる大阪層群、段丘砂礫が、さらにその前面には軟弱な粘土と砂礫からなる沖積層がある。二上山は瀬戸内火山系に属する火山で、安山岩類で構成される二上層群からなる特殊地域である。その噴出物であるサヌカイトは石器の材料に、凝灰岩は石棺や建築用材に、ざくろ石安山岩の風化堆積物は金剛砂という研磨材として古くから利用されており有名である。

さて、一須賀古墳群周辺の歴史的環境について、石川中流域の石川谷と呼ばれる地域を中心に概観してみよう。この地域は調査が充分に及んでおらず、調査の手が及んでいない空白地帯も多いが、二上山北麓で旧石器時代の石材採掘坑や加工場が確認されており、この付近の歴史は旧石器時代に溯る。

縄文時代では、遺構は確認されていないが河南町神山遺跡・寛弘寺遺跡・山城廃寺、富田林市錦織遺跡・西板持遺跡などで縄文土器が出土している。神山遺跡では河道から縄文早期の押型文土器や中期末と考えられる加曾利B式系の文様を有する土器が、包含層から後期初頭の土器が出土している。河道出土の土器はローリングをあまり受けておらず、後期初頭の土器のみが出土する包含層があることから周辺の台地上に縄文集落の存在が考えられる。しかし、調査がすすんでいない地域があることを考慮しても、縄文時代の人々の足跡は希薄といえる。

弥生時代前期も同様で、羽曳野市東阪田遺跡で前期の土器が出土しているが、遺構は未確認である。前期の遺跡は石川と大和川が合流する付近の船橋遺跡、国府遺跡まで北上しなければならぬ。石川中流域に稲作のための本格的な開発が始まったのは中期になってからである。羽曳野市と富田林市にまたがる喜志遺跡、富田林市中野遺跡・甲田南遺跡で中期の集落が確認されている。喜志遺跡は石川西岸の中位段丘に位置し、東西200m、南北200mほどの範囲に集落が営まれている。集落の東、段丘の縁辺と南側で大きな溝が確認されており環濠集落の可能性が指摘されている。また、集落内では居住域と土器や石器の製作域が分かれている可能性が考えられ、集落周辺に墓域、水田域が想定でき集落構造を考える上で興味深い遺跡である。集落は中期前半に成立し、中期中頃から後半に盛行し、後期になると急激に衰退する。中野遺跡は喜志遺跡の1.5km南にある。集落の中心は石川を臨む段丘上にあり、喜志遺跡と同じく段丘縁辺で大溝が確認され、石器加工場を伴っていたようである。甲田南遺跡は、中野遺跡の南西3kmのところの位置する。やはり、石川西岸の下位段丘上に集落が営まれ、段丘縁辺には大溝が確認されている。集落の範囲は東西200m、南北150mで、北側に墓域が設けられる。遺跡の盛行時期は中期後葉である。この3遺跡はいずれも石川を臨む段丘上という立地条件、集落の規模、環濠かどうかは



第1図 一須賀古墳群周辺遺跡分布図(1/50,000)

1. 東阪田遺跡
2. 喜志遺跡
3. 喜志西遺跡
4. 喜志南遺跡
5. 平1号墳
6. 鍋塚古墳
7. 宮神社裏山古墳群
8. 宮前山古墳
9. 真名井古墳
10. 粟ヶ池古墳
11. 桜井遺跡
12. 中野北遺跡
13. 中野遺跡
14. 新堂庵寺
15. お龜石古墳
16. 新堂古墳群
17. 新堂南遺跡
18. 富田林寺内町遺跡
19. 毛人谷遺跡
20. 甲田遺跡
21. 飛鳥千塚古墳群
22. 鉢伏山南峰古墳
23. 観音塚上古墳
24. 観音塚古墳
25. ドンズルポー遺跡
26. 株山遺跡
27. 牡丹洞遺跡
28. 駒ヶ谷遺跡
29. 壺井丸山古墳
30. お旅山遺跡
31. お旅山古墳
32. 河内飛鳥寺跡
33. 通法寺遺跡
34. 遺法寺裏山古墳
35. 九流谷遺跡群
36. 九流谷古墳
37. 御嶺山遺跡
38. 御嶺山古墳
39. チンチの森遺跡
40. 叡福寺遺跡
41. 上城古墳(聖徳太子墓)
42. 叡福寺
43. 茶臼山古墳(紀古羅麻呂出土地)
44. 地獄谷遺跡(旧妙見寺)
45. 片原山遺跡(采女竹良室城碑出土地)
46. 上ノ山古墳(孝徳天皇陵)
47. 二上山
48. 熊谷寺跡
49. 岩屋峠西方石切場跡
50. 岩屋
51. 仙山遺跡
52. 仙山古墓
53. 上所遺跡
54. 葉室西峯遺跡
55. 奥城古墳(敏達天皇陵)
56. 東山遺跡
57. 向山古墳(用明天皇陵)
58. 山田西古墳
59. 松井塚古墳
60. 仏陀寺古墳
61. 塚穴古墳
62. モンド塚古墳
63. 釜戸塚古墳
64. 葉室塚古墳
65. 石塚古墳
66. 高松古墳(稚古天皇陵)
67. 二子塚古墳
68. 長野前遺跡
69. 万法蔵院跡
70. 佐小野妹子墓
71. 大ヶ塚寺内町遺跡
72. 大ヶ塚城跡
73. 山城高寺
74. 別井遺跡
75. 西大寺山古墳群・養山城跡
76. 寛弘寺遺跡・古墳群
77. 板持古墳群
78. 板持丸山古墳
79. 西板持遺跡
80. 波方遺跡
81. 波方丸山古墳
82. イタイゴ古墳群
83. 神山遺跡
84. 神山正神遺跡
85. 大森塚古墳
86. 森屋1号墳
87. 森屋2号墳
88. 御旅所遺跡
89. 御旅所北古墳
90. 御旅所古墳
91. 金山古墳
92. 加納遺跡
93. 加納古墳群
94. 平石古墳群
95. アカハグ古墳
96. 塚廻り古墳
97. 平石城跡
98. 高貴寺
99. 白木古墳群
100. 持尾城跡
101. 馬谷古墓
102. 弘川寺
103. 陣屋山城跡
104. 持尾古墳群

意見の分かれるところではあるが、段丘縁辺に大溝が存在することや、集落周辺の墓城のあり方など共通要素が多く、石川流域の弥生時代中期の集落を特色付けるものである。また、喜志・中野の両遺跡はサヌカイトの原石、石器の未製品、石屑やチップが多量に出土することから石器製作の集落と考えられている。これは喜志遺跡の北1.5kmにある羽曳野市城山遺跡も同様である。国府・船橋遺跡を拠点とし、南に1.5～3kmの間隔で集落が存在し、それぞれ有機的に結ばれていたことが想定される。そして、これら中期の集落は後期になるとなぜか突如として消滅する。

弥生時代後期になると代わって丘陵上に集落が形成されるようになる。いわゆる高地性集落である。羽曳野市駒ヶ谷遺跡・御嶺山遺跡、太子町チンチの森遺跡・葉室西峰遺跡、河南町東山遺跡・寛弘寺遺跡・神山遺跡などである。東山遺跡は一須賀古墳群の西部に重なっており、大宝住宅開発に伴う1968・69年の調査で3地区から重複も含めて30棟以上の竪穴式住居が検出され、寛弘寺遺跡でも農地造成に伴う1982年から14年に及ぶ調査で瘦せた尾根上に百数十棟を超える竪穴式住居が検出されている。これら後期の高地性集落は生業の場である水田とはかなりの比高を有するが、数度の建替えを行う住居がかなりあり、一時的な集落ではなく定住期間を考える必要があるだろう。その要因は戦亂的なものなのであろうか。

やがて時代は古墳時代へと移っていく。石川谷周辺では古墳時代前期前葉、いわゆる発生期の古墳は未だ確認されていない。1段階遅れて石川西岸に築かれた真名井古墳(前方後円墳60m)が初現である。真名井古墳の西には近接して前期後葉の鍋塚古墳(円墳25m)が築かれる。石川と千早川の中間の丘陵には前期中葉の板持丸山古墳(円墳35m)、次いで板持3号墳(前方後方墳40m)が築かれ、石川東岸の太子町から羽曳野市にかけての丘陵上に前期中葉の壺井丸山古墳(前方後円墳69m)、九流谷古墳(前方後方墳70m)、次いでお旅山古墳(前方後円墳46m)、通法寺裏山古墳(前方後円墳47m)が築かれる。こうした古墳の動向は小地域を基盤とした首長層の台頭を物語るものであろう。中期になるとこれら前方後円(方)墳は無くなり、首長墳の造営も止む。この地域の前方後円(方)墳は後期中葉の奥城古墳(前方後円墳113m)まで待たなければならない。中期初頭に造営が開始され、後期中葉に造営を終える古市古墳群との関係が考えられる。しかしその一方で、寛弘寺古墳群では前期中葉に始まった造墓活動は衰退することなく中期、後期、さらに終末期へと連続と続き、これまでに90基以上の古墳が確認されている。寛弘寺古墳群造営主体の在地性の強さを表わすものである。

後期になると一須賀古墳群、飛鳥千塚古墳群など横穴式石室を内部主体とする群集墳が形成され、この地の古墳は爆発的に増加する。一須賀古墳群は200余基からなる古墳群で、ほとんどが10～20mの円墳で、横穴式石室を内部主体とする。出土遺物や石室構造から造営主体には渡来系氏族が考えられている。

前方後円墳が終焉を迎えた後、この地の古墳は再度生彩を放つ。その一つが7世紀の王陵をはじめとする大型古墳である。前方後円墳の終焉直後、河南台地の最奥部に金山古墳が築かれる。大小二つの円丘を合わせた形の双円墳で全長85.8mを測り、周囲には濠が巡らされている。北丘は2段に、南丘は3段に築かれ、各段の間と墳頂部の平坦面には敷石が施されている。北丘には全長約10mの横穴式石室があり、内部には2個の刎抜き式家形石棺が納められている。南丘でも墓道が確認され横穴式石室を内部主体とすることがわかっており、この時期の大型古墳で内部構造がわかる貴重な例である。磯長谷にも向山古墳(方墳60m)、高松古墳(長方墳60m)、葉室塚(長方墳75m)、上城古墳(円墳52m)などがある。向山古墳、高松古墳、上城古墳はそれぞれ用明陵、推古陵、聖徳太子墓に比定されている。陵墓の比定に

は異論もあるが、磯長谷の大型古墳が王陵クラスの古墳であることは確実である。

もう一つ、7世紀の古墳を特色付けるものに横口式石櫛がある。石川西岸の丘陵上に築かれたお亀石古墳・宮前山古墳、羽曳野市東部の鉢伏山南峰古墳・観音塚古墳、磯長谷の松井塚古墳・仏陀寺古墳、一須賀古墳群の南にあるアカハゲ古墳・塚廻り古墳など枚挙に暇がない。石川谷周辺に限っても大和の横口式石櫛総数に迫るものがある。これら横口式石櫛構築には高度な技術が伴い、その被葬者には渡来系の官人層が考えられる。

地上に形が残る古墳については研究がすすんでいるが、古墳時代の集落については不明な点が多い。寛弘寺古墳群と千早川をはさんで対岸にある神山遺跡では中期の竪穴式住居が数棟密集してみつかり、寛弘寺古墳群との関係が注目される。太子町上所遺跡では古墳時代前・中期の住居が、伽山遺跡でも中期の住居が確認されているが、古墳に比べその検出数は圧倒的に少ない。今後の調査に期待されるところである。

前方後円墳が終焉するころはまた、これに代わる政治的モニュメントとして寺院が建立され始める時期でもある。石川谷周辺の古代寺院は、石川と大和川の合流付近である古市・志紀郡に比べ分布密度が低い。富田林市にある新堂庵寺は飛鳥時代の創建で、白鳳期の再建伽藍の一部が確認されている。その他は、瓦が採集されているだけで伽藍等が不明な寺院が多い。その中で異彩を放つものとして、奈良時代に造営された鹿谷寺跡と岩屋をあげることができる。両者は二上山麓の凝灰岩石切場跡を利用して造られたもので、日本では非常に珍しい石窟寺院である。鹿谷寺には分厚い凝灰岩の岩盤を削り出して造った十三重の石塔が現在も聳えている。遠くインドに起源をもつ石窟寺院がこの地に造られたのはいかなる理由によるものであろうか。

奈良・平安時代以降、中世にいたるまで、石川あるいは佐備川、千早川といったその支流周辺の段丘上に集落が営まれる。中野遺跡では弥生時代の集落に重なるように中世の集落が広がる。神山遺跡でも奈良時代から平安時代にかけての遺構が確認され、当該期の集落が段丘上に広がると予想される。この地はまた楠木正成ゆかりの地である千早赤阪村に近いこともあり、南北朝期の城跡も数多く残されている。陣屋山城跡、持尾城跡、平石城跡などである。城塞の遺構をよくとどめ縄張り図なども作成されているが、発掘調査は未だ行われていない。

戦乱により荒廃したこの地であるが、16世紀になって大ケ塚、富田林で寺院を中心に町場が興り、発展していく。そして、この発展は現在へと続く。

(赤井)

#### 参考文献 河南町役場 『河南町誌』 1968年

富田林市役所 『富田林市史』第1巻 1985年

羽曳野市役所 『羽曳野市史』第3巻 1994年

大阪府教育委員会 『甲田南遺跡発掘調査概要』 1994年

大阪府教育委員会 『寛弘寺遺跡・古墳群発掘調査概要』Ⅰ～Ⅳ 1983～1995年

天野末喜 「地域の古墳・近畿中部・大阪」 『古墳時代の研究』10 1990年

太子町立竹内街道歴史資料館 『二上山麓の古代寺院』 1995年

### 第三章 調査の成果

#### 第1節 試掘調査

都市計画法による太子カントリー倶楽部の開発許可を受け、大阪府教育委員会、河南町教育委員会、太子町教育委員会の三者では、当該地における埋蔵文化財の調査を実施するため、一須賀古墳群発掘調査委員会(以下、調査委員会と記す)を組織し、平成5年6月末から事業地内の造成区域約51.6haの試掘調査に着手することとなった。事業地内の造成区域においては、これまで大阪府教育委員会を主体としたものをはじめ、数次にわたる分布調査が実施されており、22ヶ所の古墳ないしは古墳状隆起と2ヶ所の中世山城の存在が指摘されていた。さらに試掘調査着手前の現地踏査では、北部地域の太井川氾濫原を望む低平な丘陵上には、未周知の集落跡の存在する可能性が考えられたほか、尾根上における古墳の分布や中世山城に伴う施設の広範な分布を勘案し、事業地全域にわたって密に調査トレンチを設定した。調査は概ね幅1mの試掘トレンチを基本として実施し、期間は平成5年10月末までの約4ヶ月間を要し、トレンチの総延長は約5kmに及んだ。

試掘調査の結果、まずこれまで古墳の可能性が指摘されていた22ヶ所のうち、21ヶ所(U-1・2・3・5・6・7・8・9、未確認、V-1・2・3・4・5・6・7・8・9、N-5・6、X-<sup>①</sup><sub>1</sub>)のマウンドは丘陵の傾斜変換点における自然地形の高まりであることが判明した。残る1ヶ所(U-4号墳)については、試掘調査段階ではマウンド頂部から墓壇状の掘方が検出されたことで古墳と判断していたが、後記する本調査において墓壇ではなく比較的新しい時期の攪乱坑であることが判明し、結果的に22ヶ所すべてが古墳ではないことが今回の調査を通じて明らかとなった。しかし新たな知見として、従来一須賀古墳群N支群(以下、N支群と記す)の存在するとされていた尾根の北側の尾根上から新たに1基の古墳が存在することを確認し、同一尾根上にこのほかにも古墳が存在する可能性が考えられたため、尾根上を全面調査することとした。なおこの支群については、N支群として古墳名を付している。

またゴルフ場事業地の南端部には、分布調査で2ヶ所の中世山城が確認されていたが、東側の地点から尾根先端をカットして造成した平坦面に、中世の山城に伴うと考えられる施設が存在することが確認された。試掘では全体を確認することは不可能であったが、溝状の落ち込みと思われた遺構から14世紀末頃の遺物が出土し、堀割状の遺構かと考えられた。さらに谷を挟んだ北側の調査地内では最高所となる山塊付近にも、尾根の鞍部を切断する堀割状の遺構や丘陵斜面のカットなどの



写真3 松山山城遺跡の試掘トレンチ

人工的造成施設が検出され、支尾根上の比較的広い平坦面に遺物の出土がみられたことから、山城に伴う施設が周辺部にまで広がることが判明した。よって従来知られていた谷の南側に位置する2ヶ所の山城を蜂ヶ尾遺跡として尾根上の全面調査を、北側の山塊から新たに発見された山城を松山山城遺跡として、主尾根上および支尾根部分に存在する平坦面を中心として調査を実施することとした。

事業地北端部の低平な丘陵周辺からは、3ヶ所の集落遺跡を新たに確認した。これらの集落は遺跡の存在する地点の小字を冠して、東から順に植田遺跡、向山遺跡、尺堂遺跡と命名している。植田遺跡は南から伸びてくる尾根の突端部に位置し、北側を太井川によって開削された深い谷に接している。試掘調査では多くのピット群、溝などを検出し、14世紀代の瓦器、須恵器、輸入陶磁が出土し、同期の集落跡であろうと推定された。向山遺跡からの遺物としては、6世紀の須恵器や10世紀頃と思われる黒色土器碗なども出土したが、主として中世の遺物が出土し、遺構は小規模なピットのみであった。このため試掘においては、遺物包含層の広がりなど遺跡の範囲について不確定な要素を残したため、再度本調査時に尾根上周辺部に試掘調査範囲を拡大し、調査範囲を確定することとした。尺堂遺跡は7～8世紀代に属する土器類が比較的少量に出土したが、遺構の残存状況や分布範囲を明確にし得なかったため、追調査も含めて本調査を実施することとした。なお試掘調査終了段階で古墳と判断していたU-4号墳については、本調査時に古墳でないことが明らかになったが、焼土坑や溜池遺構などの遺構が検出され、後記の本調査報告では尺堂遺跡の第Ⅱ区として報告する。

試掘調査ではこれらの遺跡のほかに、3ヶ所の地点で焼土坑と呼ぶ土坑の分布が確認されたほか、火葬墓を1基発見した地点がある。焼土坑は蜂ヶ尾遺跡のさらに西側の尾根上と、事業地を北に向かって伸びる尾根上の2ヶ所で数基が密集した状況で発見された。焼土坑はこの他、尺堂遺跡の第Ⅱ区からも2基検出され、総数で15基余りになるものと考えられた。また火葬墓は松山山城遺跡から東に向かって伸びる尾根が北に方向を変える屈曲点付近から検出された。この火葬墓については試掘調査と並行して調査を実施したが、単独の立地で付近に同様の遺構は発見されていない。

以上のように試掘調査では、当初想定された古墳時代後期から終末期にかかる群集墳については、予想されたほどの成果は得られなかったものの、新たに中世山城や北部域における集落跡についての知見が得られた。すなわち北部域における植田遺跡、向山遺跡、尺堂遺跡の3ヶ所の集落遺跡、南端部の中世山城である蜂ヶ尾遺跡と松山山城遺跡、N支群における古墳の新規発見、その他焼土坑群および火葬墓の発見である。これらの結果を受け、調査委員会では再度調査体制を整え直し、平成5年11月から順次本調査を実施した。

(池田)

①一須賀古墳群の主な分布調査報告としては、下記のものがある。

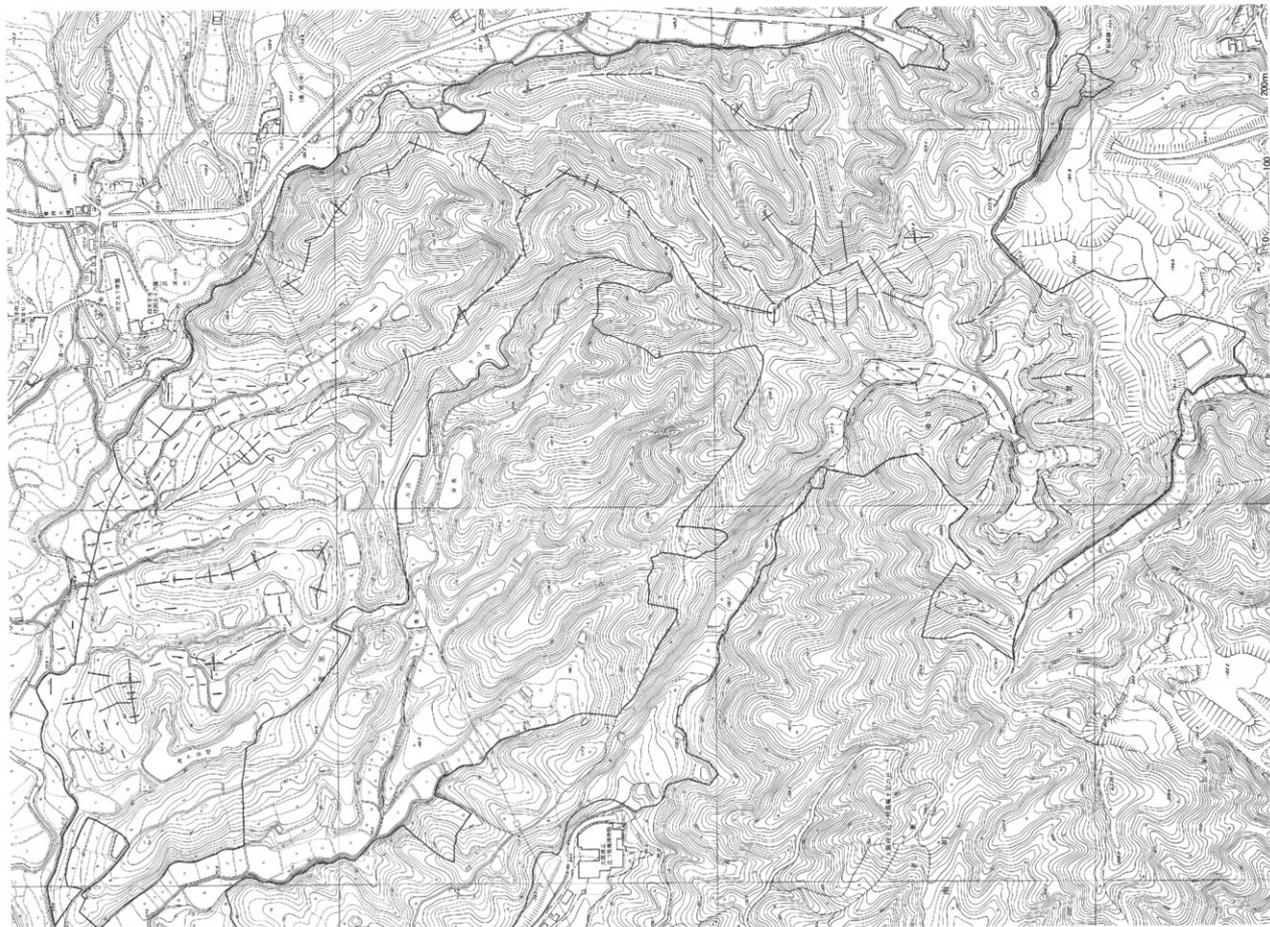
上野勝巳 『一須賀古墳群分布調査』 『古代学研究』 50 1966

野上丈助 『近飛鳥遺跡分布調査概要』 大阪府教育委員会 1971

山本彰 『一須賀古墳群分布調査概要』 大阪府教育委員会 1982

②各古墳の呼称については、下記の文献によった。

山本彰 『一須賀古墳群分布調査概要』 大阪府教育委員会 1982



第2図 試掘トレンチ配置図(1/5000)

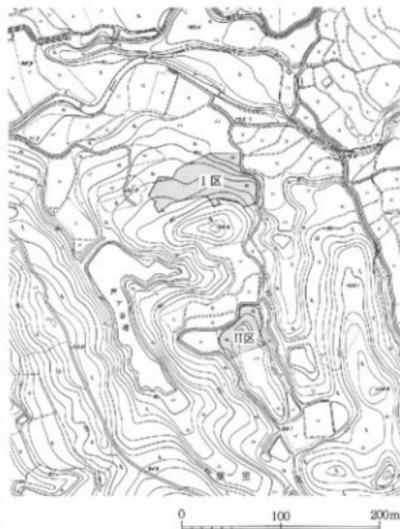
## 第2節 尺堂遺跡（第Ⅰ区・第Ⅱ区）の調査

### 第1項 はじめに

ゴルフ場事業地内の北部域における試掘調査においては、東から植田遺跡、向山遺跡とここで報告する尺堂遺跡の計3ヶ所の遺跡が新規発見された。尺堂遺跡第Ⅰ区からは、試掘調査で7～8世紀の遺物包含層の存在が確認されたが、遺構については遺構面の状況が判然とせず、試掘段階では遺跡の全体像を明らかにすることができなかった。本調査の実施に当たっては、まず遺構の残存状況の把握と包含層の広がりや再度確認の上、調査に臨むこととして試掘調査を終えている。そのため、まず試掘調査時に遺物包含層の確認されたエリアを中心にトレンチの設定範囲を広げ、包含層と遺構の広がりを確認して、調査範囲を確定させるとともに、覆土の堆積状況と遺構の把握に努めた。その結果、遺跡の東部エリアからピット群が検出され、西部から比較的多量の遺物の出土があったため、ゴルフ場事業地内の丘陵北斜面全域を第Ⅰ区の調査対象として全面調査に望むこととなった。

第Ⅱ区は試掘調査実施当初には、古墳と判断していたU-4号墳にあたる地点である。試掘調査では、尾根の突端に位置するマウンド状の高まりの頂部で幅1m、長さ2mほどの木棺直葬と考えられる墓壇状の掘方を確認し、さらにマウンド北西斜面の表土内から盾形、もしくは蓋形埴輪と考えられる形象埴輪片1点が出土したため、5世紀後半頃の一边15m程度の方墳と判断していた。ところが本調査段階で掘方が比較的新しい時期の攪乱坑であると判断され、周辺からも何ら古墳に伴う施設の検出や遺物の出土が確認できなかったため、この高まりが自然隆起であることが明らかとなった。しかし当該調査区には、その他にも焼土坑など若干の遺構が存在したためそのまま調査を継続し、遺構の所属時期や内容を異にしているが、本調査区も隣接する尺堂遺跡の範囲内に含め、尺堂遺跡第Ⅱ区としてまとめて報告することとした。

したがって以下本報告では、分布調査において一須賀古墳群U-1・2・3号墳が存在すると把握されていた尾根の北部斜面に設定した調査区を尺堂遺跡第Ⅰ区、U-4号墳とされていた地点の調査区を同第Ⅱ区として詳述するものとする。調査対象面積は、第Ⅰ区が約4,100㎡、第Ⅱ区が約1,550㎡である。



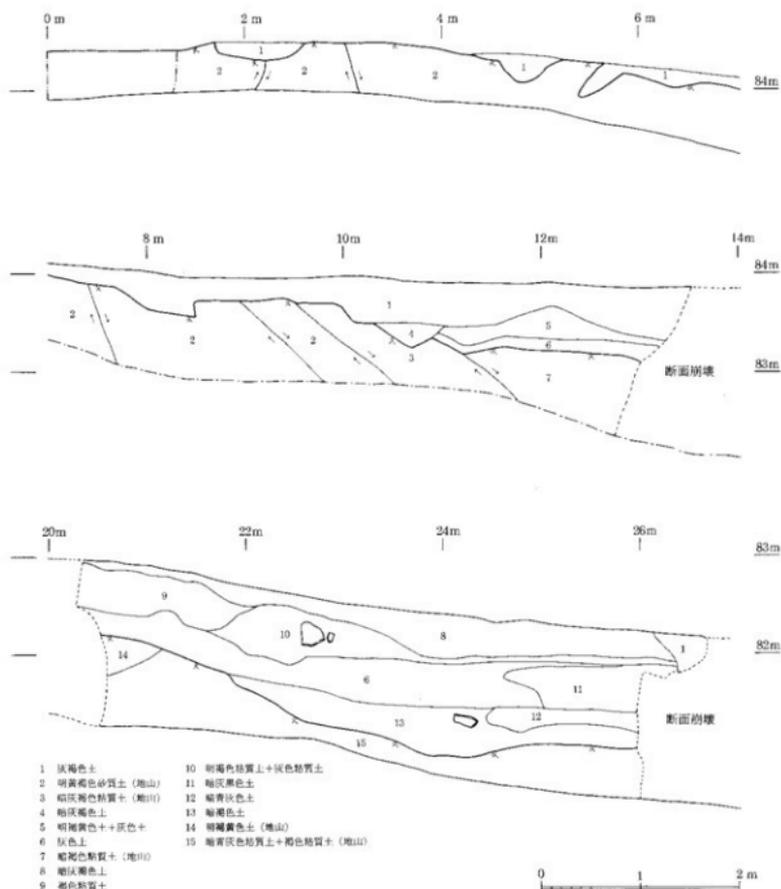
第3図 尺堂遺跡調査区位置図(1/5000)

### 第2項 尺堂遺跡第Ⅰ区

**遺跡の立地** 尺堂遺跡は、大阪府南河内郡太子町大字業室字尺堂に位置するもので、太子町と河内町の行政界となっている南側の山塊から伸びてくる丘陵の一支脈である低平な丘陵の北向き斜面に立地している。この丘陵の末端部分は東西両側に深い谷が入り込んで、背後にも西側の谷から浅い谷が回り込ん

であり、鳥状に張り出した地形を形成している。遺跡の立地する斜面は、北側一帯に広がる平坦な太井川の氾濫原に緩やかに下降していく。

太井川によって開削されたこの谷を挟んで北西の段丘上には、葉室塚古墳、葉室石塚古墳、釜戸塚古墳の3基の古墳で形成された7世紀前半代に属すると考えられる葉室古墳群が位置し、北東には推古天皇陵(高松古墳)と国指定史跡二子塚古墳が望まれる。また西側は一須賀古墳群Q支群の分布する丘陵に隣接しており、従来は尺堂遺跡の位置する尾根以東にも一須賀古墳群の分布エリアが広がるものと考えられていたが、今次の調査の結果、Q支群の尾根が北部域における古墳分布の東限である可能性が強く



第4図 第1区南北土層断面図(1/50)

なった。

**基本層序** 調査地の西部エリアの試掘を実施した際、尺堂遺跡の立地する丘陵斜面下方に灰色土あるいは灰黒色土の遺物包含層の堆積が認められ、7～8世紀の遺物の出土が確認されたことが本遺跡の発見につながったのである。しかし試掘調査時の所見では、この包含層の堆積はかなり乱れた状態で、遺構面も不安定な印象が強かった。本調査時の覆土の掘削においても包含層の堆積が一律ではなく、遺構面の把握がかなり困難な状況であり、調査を進めていく途上、地山土が2次的に移動を受けた如く軟弱な地盤で、所々に地割れ状に地山のズレが生じていることが次第に把握され、地滑りのような自然災害に



第5図 第1区東半部遺構配置図(1/400)

伴なう大規模な地形の改変を受けていることが予測された。全面の掘削終了段階における遺構面の精査で、地割れが調査区の西半部全体に広がることがわかり、調査区中央部に地滑りの境界が確認できた。

周辺の地権者によれば、明治時代頃にこの丘陵斜面部分で大規模な地滑りがあり、その先端は丘陵下方に広がる河川氾濫原まで達したと言われていることをその後知ることができ、地山土の不安定さや地山面に残る地滑り状のズレなどは、その際に生じたものであると判断された。

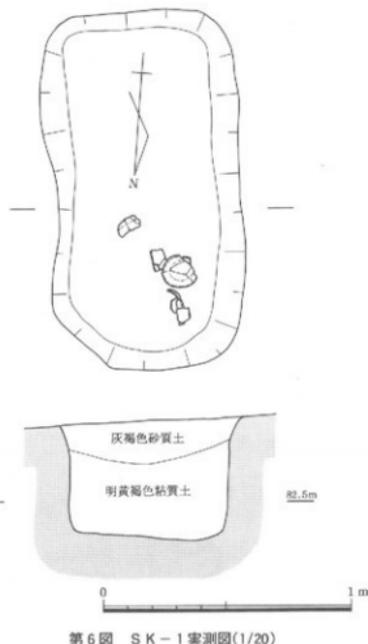
地滑り後、斜面一帯は再び耕作地として利用されていたようで、土砂止めのための施設や小規模な溜池などの遺構が検出されている。地滑りそのものや、その復旧の際に実施されたであろう大規模な造作によって、地滑りの境界から西半の部分については古い時期の遺構が全く遺存しておらず、辛うじて残された地山面直上の包含層から遺物が出土したにすぎない。

基本的に丘陵斜面上部では表土直下で地山が検出され、下部では表土下に地滑りによって流出した地山土を耕作地を造成する際に、2次的に移動させたと思われる厚い堆積が認められる。その下部の灰色土あるいは灰黒色土が遺物包含層である。

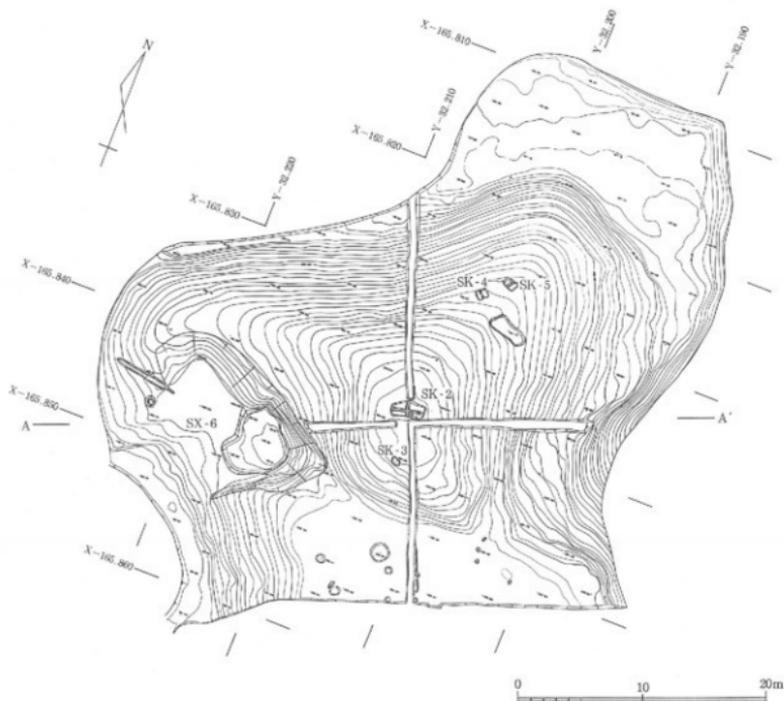
**遺構** 西半部は地滑りのため、近現代の水溜めや土止めのための木杭が散漫に検出されたのみで、遺構の大半は調査区東半部から検出されている。東半部の丘陵斜面中腹には、丘陵下部の水田面からの比高差約7m付近に幅15m程度のテラス状の平坦部があり、北側は氾濫原に向かって急激に落ち込んでいる。遺構はこのテラス上の西半部に集中して検出されている。東半部からは古い時期の遺構はほとんど検出されず、近現代の耕作に伴う土坑や溝が存在したに過ぎない。開墾などによって、すでに削平を受けて消失したものと思われる。

テラス西半部から検出された遺構も大半が小規模なピットで、特記すべき遺構はほとんどない。ピット群はテラス平坦面が東西方向に広がることと同様に、概ね東西方向に並ぶ傾向にあり、東西棟の掘立柱建物が存在したものと考えられるが、建物を復元し得るものはなかった。

テラス部西端に位置するSK-1は、長辺約3.0m、短辺約0.7m、深さ約0.4mを測る隅丸長方形の土坑である。土坑の形状や規模などから木棺墓の可能性が高いと考えられたが、平・断面の観察においては木棺痕跡が確認できず断定はしがたい。埋土は2層に分かれ、上層は灰褐色を呈する砂質土でその下部に明黄褐色粘質土がある。埋土内からは土坑の北半部分に偏在して、土師器杯、皿、短頸壺、須恵器杯(第18図 出土遺物実測図⑤ 79~82)が出土している。大半は下層の明黄褐色粘質土上面からの出土である。



第6図 SK-1実測図(1/20)



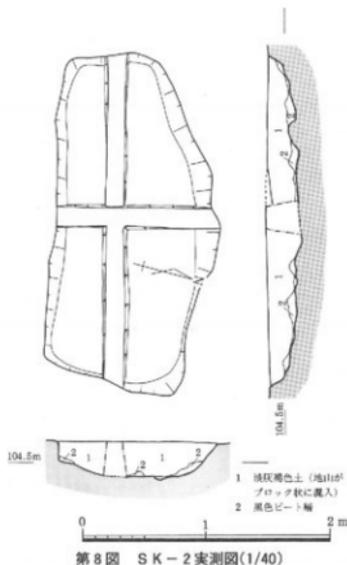
第7図 第Ⅱ区遺構配置図(1/400)

### 第3項 尺堂遺跡第Ⅱ区

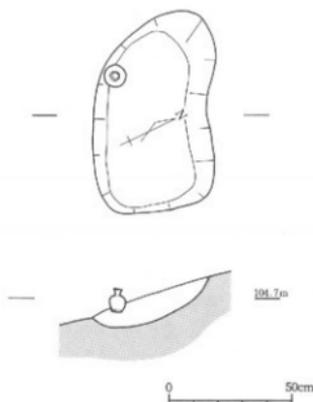
**遺跡の立地** 尺堂遺跡第Ⅱ区は、第Ⅰ区の同一尾根上の最高所に位置する。南方から伸びてきた狭い尾根の背部が広がり、平坦面が確保された付近で、北側には丘陵西側の谷から狭い支谷が入り込んで、第Ⅰ区的位置する尾根の先端部と隔てられている。調査区の北及び西側は一段低い部分に耕作地が開かれ、背後の尾根上部にも耕作地が連っており、ちょうどこの調査区の部分のみが島状に取り残されてマウンド状になっている。頂部の標高は約105mで、谷からの比高差は約20mを測る。

この地点は以前の分布調査において一須賀古墳群U-4号墳とされていたもので、伐開後の観察でも古墳を思わせる地形の高まりを有していた。試掘調査においても、マウンドの頂部付近から墓壇掘方らしき土坑が検出され、表土内から形象埴輪片と思われる遺物が1点出土したことから、一辺15m程度の方墳と考えて間違いないものと判断し、現況測量を実施し、本調査に臨むこととなった。

**遺構** 本調査区における遺構の分布は散漫で、ピーク付近と北西部の斜面中段、マウンド南側の平坦部に若干の上坑、小ピットが、西端から溜池遺構が1基検出されたのみである。表土下の灰褐色砂質土を



第8図 SK-2実測図(1/40)



第9図 SK-3実測図(1/20)

検出されており、分布形態は本調査区のように2基程度のこともあれば、数基が密集して設けられている場合もある。また他の地区では焼土坑のみがあり、周辺にそれ以外の遺構は見当たらなかった。

SK-6は、小規模な酒池の遺構で、幅約16m、奥行約9m、深さ約1.5mの規模を有している。尾根の斜面部分の地山を湾入するように掘削し、その排土によって斜面下方に堤体を積み上げて構築されたものと考えられる。堤体は黄色土を単純に積み上げただけのもので、版築などの特別な造作を施さ

取り除いた下部の地山が遺構面となっており、覆土は20~30cmと薄い。

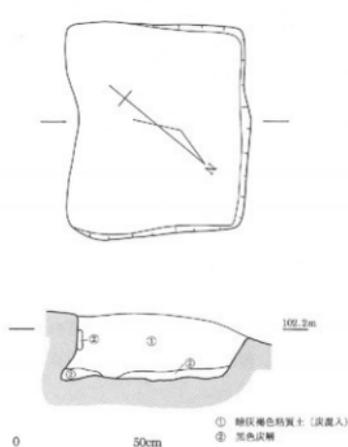
マウンド頂部から検出されたSK-2は、試掘当初は木棺直葬の墓塚と考えていたものである。規模は長辺約2.8m、短辺約1.4m、深さ約0.4mを測り、底部が舟底形を呈する。埋土は淡灰褐色土で、地山土と近似した土がブロック状に混入し、土坑底部には厚さ数cm程度の、不均一な植物遺体の堆積が認められた。埋土内からの遺物の出土は皆無であった。あまり腐食の進んでいない植物遺体層の状況から見て、土坑は比較的新しい時期の攪乱坑である可能性が強く、底部の形状などからも墓塚とは考えがたい。

SK-3は、須恵器の小壺を埋納した小土坑である。80cm×50cmの長円形を呈し、上部が削平を受けているようで深さは10cmと浅く、小壺の上端部分は表土内まで露出した状況であった。調査区内には、この他には時期的に並行すると考えられる遺構はなく、単独の立地である。何らかの祭祀

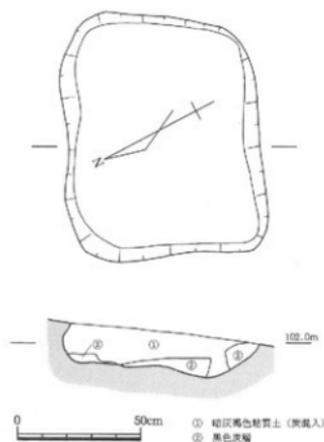
に伴うものとも考えられる。

SK-4、SK-5は熱変成を受けた隅丸長方形の土坑で、焼土坑と呼んでいるものである。土坑は壁面をほぼ垂直にして箱形に掘られており、壁面部分は火を受けて赤色硬化して、厚さ1cm程度が堅く焼き締まった状態である。底面には数cm程度の薄い炭の堆積が認められるほか、暗灰褐色粘質土の埋土にも炭化物が散漫に混入している。壁面がかなりの高熱を受けたような状況でもあり、当初は何らかの上部構造を有したものと推測されるが、現状からは旧状を復元することはできない。SK-4は長辺約85cm、短辺約70cm、深さ約25cm、SK-5は長辺約95cm、短辺約75cm、深さは約15cmの規模を有している。遺物の出土は全くなく、遺構の所属時期や性格については知ることができなかった。今次の調査では、他に4地区からも同種の遺構が

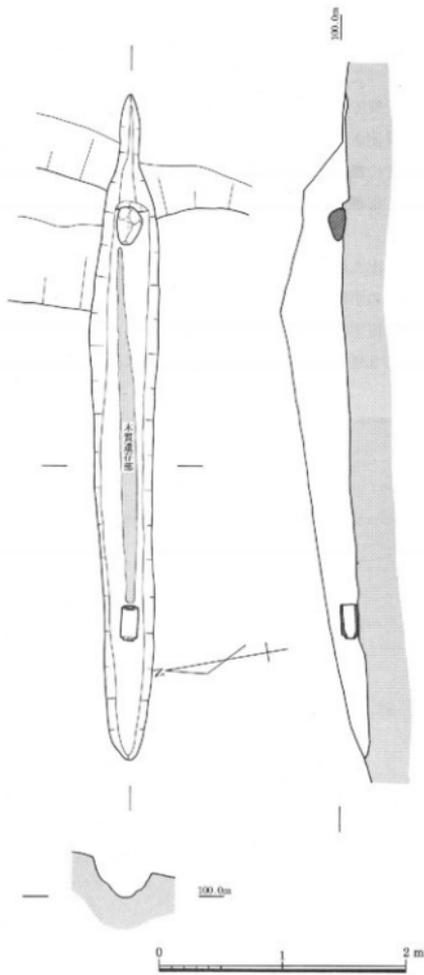




第11図 焼土坑SK-4(1/20)



第12図 焼土坑SK-5(1/20)



第13図 SX-6種実測図(1/40)

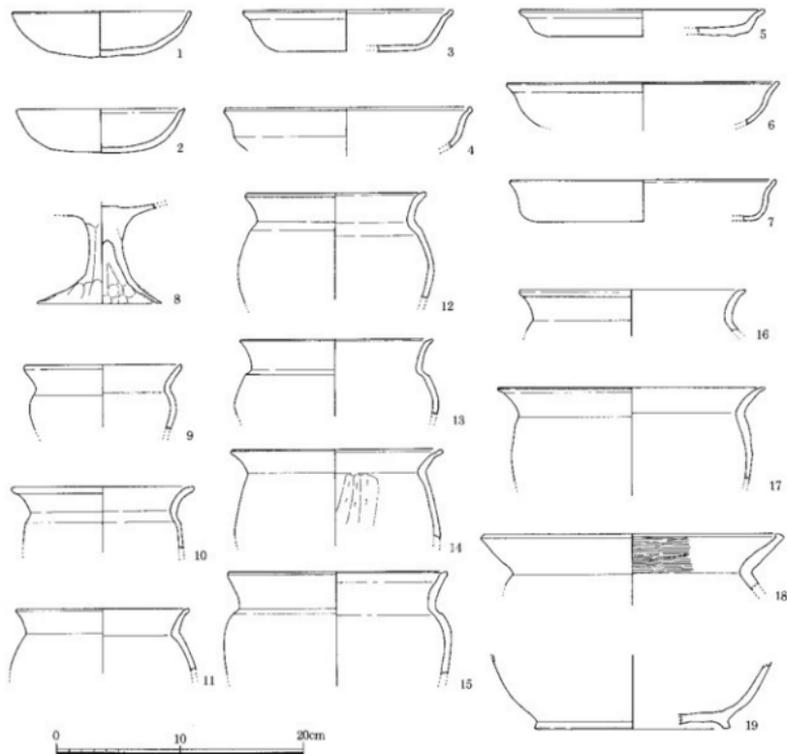
れたものではなかった(第10図 第11区東西土層断面図)。西端部分には、円筒形の瓦質管(第18図 77)と木材を併用した樋が検出されている。樋の幅は約30cm、延長は約4.3mを測り、取水口に向かって約 $3^{\circ}$ の傾斜をもっている。池底部分の樋口には人頭大の自然石が認められるが、その構造がどのようなものであったのかまでは明らかにならなかった。中央部分は木製の樋管が用いられていたようであるが、既に腐食が進み痕跡が残されていたのみで、形態については知り得なかった。その後、地土混じりの砂質土によって人為的に埋め立てられ、耕作地に転用されたようである。

#### 第4項 尺堂遺跡の出土遺物

遺物はその多くが調査地の東半部から出土しているが、地滑りによって遺構が全く残存しなかったため、すべてが包含層からの出土であった。東半部における包含層は、灰色あるいは灰黒色を呈するやや粗い土質で、地滑りによって地山ごと丘陵下方に向かって移動したような状況にあった。遺構が比較的多く検出されたテラス面上からは遺物の出土は少なく、遺構内埋土にもほとんど遺物は認められなかった。その他、テラス面下段の狭い平坦面上からも若干の遺物の出土がみられ、さらに下部の丘陵裾にあたる水田部分においても、かなり摩滅が著しいものの比較的まとまった量の遺物の出土があった。

**包含層出土遺物** 土師器には杯、皿、高杯、壺、鍋などの器種が認められる。細片が多く、粘性の高い地山土の影響によるものか残存状況はあまり良好でなく、器面調整の観察も困難なものが多い。

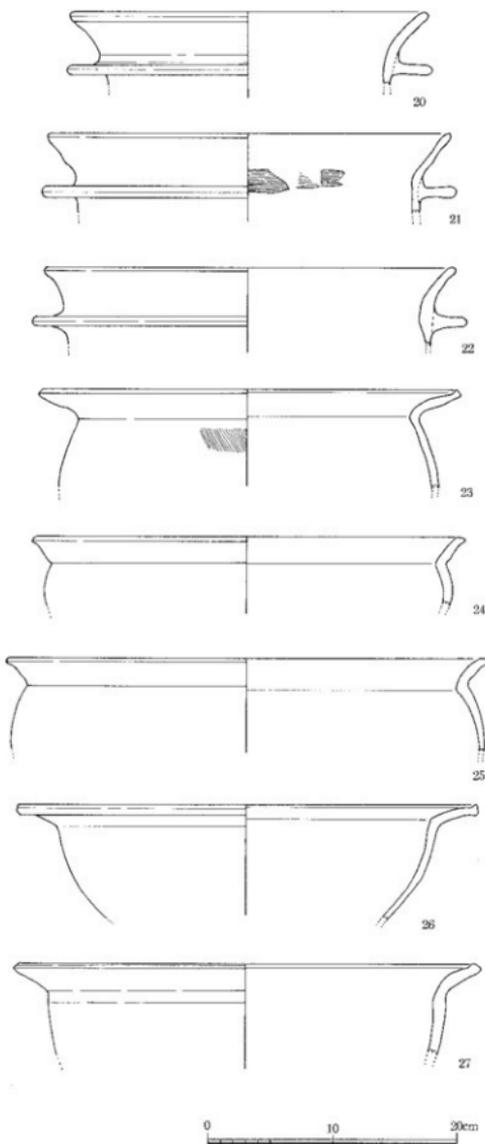
杯、皿類は小片が多く、図化し得るものが少なかった。壺は小型のもので大きく2種、大型のものも同様に3種に大別できる。小型のものは概ね口径20cm以下のもので、体部最大径が口径を上回り、口縁



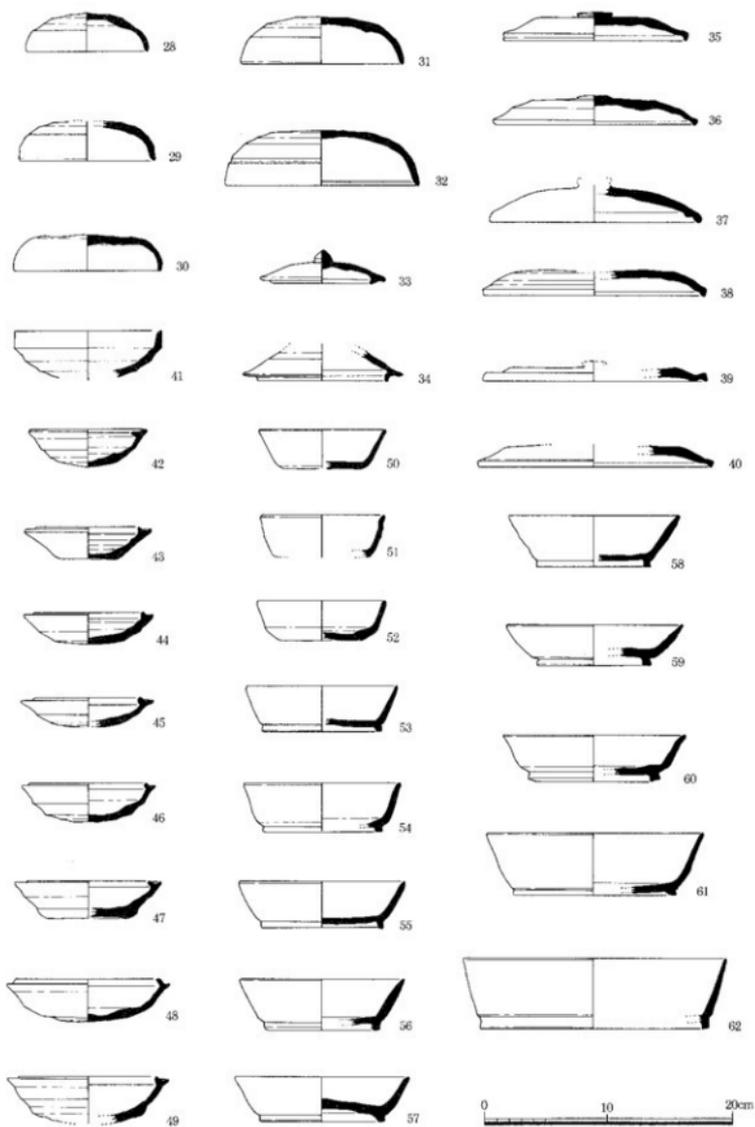
第14図 出土遺物実測図①(1/4)

部が外反して、口縁部と体部の境界にナデ調整による段を有するタイプ(11、12、13、15、16)と、同様に口縁部が外反するものの、体部がやや直立ぎみに伸びるタイプ(9、10、14、17)が認められる。大型の甕は、罅を有するもの(20、21、22)と口縁端部が上方につまみ上げられ、鋭角的に口縁部の立ち上がるもの(18、23)、口縁部が短く、厚みのあるもの(24、25)に分類できる。罅は2点(26、27)が図化でき、共に口縁端部は上方につまみ上げられるもので、口径は40cm弱のものである。

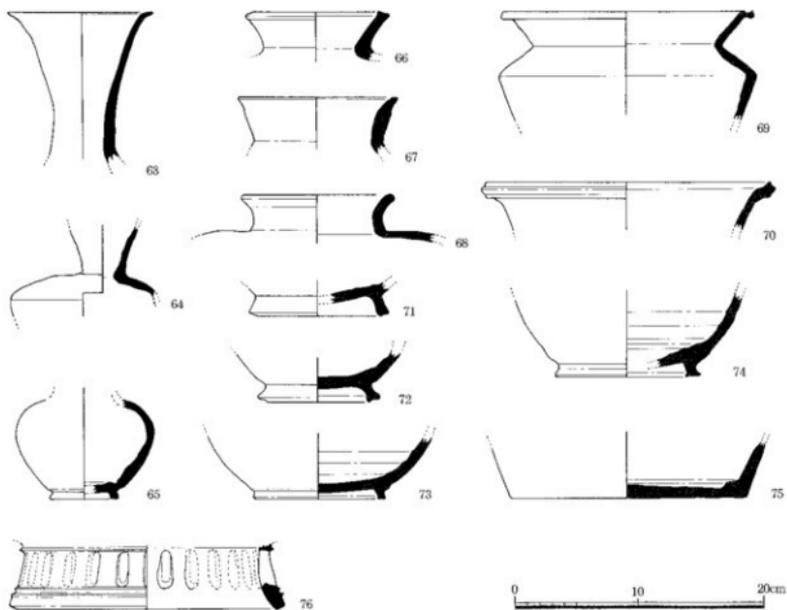
須恵器は土師器より残存が良好で、特に杯は図化可能点数も比較的多く、バリエーションも幅広いものであった。杯蓋は蓋内面にかえりを有しないもの(28~32)と蓋内面にかえりを有し、口径が小さく、宝珠形の高さのあるつまみを付すもの(33、34)、内面のかえりが消失し、器高が低く、扁平なつまみの付くもの(35~40)がある。杯身では、身にかえりの付くものは2タイプに分類でき、底が丸く仕上げられ、器壁の厚さが全体的に均一なもの(42、44~46、48、49)と、外面底部が平らに仕上げられ厚みがあるもの(43、47)の2種に分類される。かえりが消失したものは、高台の付くもの(53~62)と付かないもの(50~52)に分類でき、付くものの中には口径の大きいものが認められる。壺、甕は多くの器種が出土しており、長頸壺(63)、広口壺(69)、横瓶(68)、平瓶(64)などが認められる。76は透脚円面視で脚台の底部径22.4cmの比較的大型のもので、



第15図 出土遺物実測図㉑(1/4)



第16圖 出土遺物実測図③(1/4)



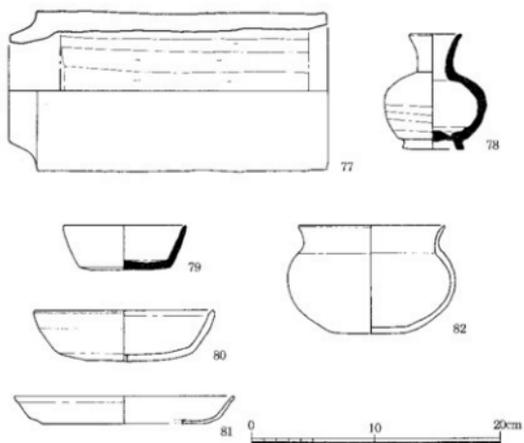
第17図 出土遺物実測図⑤(1/4)

視面部は欠損しており、脚台部には隅丸方形の透かしを有するものである。

#### 遺構出土遺物

第II区の遺構からはほとんど遺物の出土はなく、わずかに2点を図化し得たのみである。77は酒池遺構SX-6の樋管に使用されていた円筒形の瓦質管、78はSK-3の須恵器小壺である。

第I区のSK-1からは、須恵器杯(79)、土師器杯(80)、皿(81)、甕(82)が出土した。8世紀末から9世紀初頭に属するものと考えられる。



第18図 出土遺物実測図⑤(1/4)

## 第5項 小結

尺堂遺跡は今回のゴルフ場建設に伴う調査で新規発見された遺跡の1つであり、7世紀中頃から8世紀に及ぶものであることが判明した。残念ながら第Ⅰ区の東半部は、近代に発生した地滑りによって遺構が壊滅状態に至ったため、その実態を明らかにすることはできなかった。西半部には幅15m余りのテラス状の造成面が存在し、このテラス上に集中的に遺構が検出されている。本来はこのテラスが西にも伸びていき、何らかの建物が造営されたものと考えられる。地滑りによって損壊を受けた調査区西半部からは比較的まとまった量の遺物の出土があったが、出土した遺物の量やその中に円面硯が含まれることから、本遺跡を一般の集落と考えるには若干の疑問があるが、遺構が明らかにできない現状からは判断しかねる部分である。また今回はコース造成区域から外れるために、さらに西側は調査を実施できなかったが、調査区内の西端部分における遺構面や現地形の状況から見る限り、西側部分は地滑りの被害から免れているようで、遺構が残存している可能性がある。遺跡の存在する丘陵突端の北向斜面は、西側にまだかなりの面積を残しており、今後調査が実施される機会があれば、遺跡の詳細が明らかにできる可能性がある。

また第Ⅱ区は試掘調査では古墳(U-4号墳)と判断され、本調査を実施したものであるが、調査の進展によって古墳ではないことが明らかとなった。しかし散発的にはあるが遺構が存在したことから、調査を続行したものである。丘陵頂部から検出された須恵器埋納遺構SK-2は、第Ⅰ区の検出遺構と時期的に並行するものであるが、試掘調査の状況から見て、第Ⅰ区の位置する丘陵北斜面からこの頂部付近まで遺構が連続するとは考え難い。また丘陵上の平坦面は南にも続くが、試掘調査ではこの地点からも遺構・遺物の発見はなかった。調査区内には同時期の遺構は他に存在せず単独の立地で、何らかの祭祀的性格をもったものであるとも考えられよう。

焼土坑は今回の調査では、この尺堂遺跡第Ⅱ区の他に4ヶ所から検出されているほか、周辺地域では一須賀古墳群Ⅰ支群の調査において、2基の焼土坑が検出されている<sup>①</sup>。これら諸例のいずれからも遺物等の出土は見られなかったため、その時期を知ることはできず、遺構の性格についても判断する術がなかった。唯一、焼土坑群A地区から中世の土師皿が出土しているが、遺構に伴うものであるかどうかは判然としなかった。立地は丘陵の背部付近の高所であることは共通しており、周辺から関連すると考えられるような遺構は全く発見されていない。この種の焼土坑が群集墳、あるいは火葬墓の周辺に立地することを根拠に「遺体を茶毘に付す施設」ではないかと考える向きもある<sup>②</sup>。しかし筆者自身が「規模が木棺を茶毘に付すのに適当かどうかという点については、(中略)小規模であり、問題は残される」とされる通り、規模の点でやはり無理があるだろう。また焼土坑を火葬に伴う埋葬遺構そのものとも考えられているが、土坑壁面が加熱変成を受けていることなど、より具体的解釈が成されない現段階では、やはり遺構の性格は不明とせざるを得ない。

(池田)

① 岩崎二郎・上林史郎・一瀬和夫ほか 『一須賀古墳群Ⅰ支群発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1993

② a 森本徹 「火葬墓と火葬遺構—群集墳周辺にて検出される「焼土坑」の検討—」 『大阪文化財研究』第2号 大阪文化財センター 1991

b 森本徹 「火葬墓と火葬遺構2」 『大阪文化財研究』第3号 大阪文化財センター 1992

表1 尺堂遺跡遺物観察表(1)

遺物番号	出土遺構及び層位	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
1	調査区中央包含層	土師部	杯身	口径14.4cm 器高3.7cm	細砂粒を若干含む	やや良	明赤褐色	
2	試掘トレンチ包含層	土師部	杯身	口径13.6cm 器高3.6cm	やや密	やや良	黄褐色	
3	調査区中央包含層	土師部	皿	口径17.0cm 器高3.4cm	密	やや良	明赤褐色	
4	調査区中央包含層	土師部	皿	口径20.1cm 残存器高3.4cm	稠密	良	赤茶褐色	外面下半部ヘラケズリ
5	調査区西半包含層	土師部	皿	口径20.0cm 器高2.2cm	密	やや良	明赤褐色	
6	調査区中央包含層	土師部	皿	口径22.1cm 残存器高3.5cm	細砂粒を若干含む	良	暗赤褐色	
7	調査区中央包含層	土師部	皿	口径21.4cm 器高3.4cm	稠密	良	淡褐色	
8	調査区西半包含層	土師部	高杯	胴部径10.6cm 残存器高8.2cm	稠密	良	茶褐色	胴部外面ヘラケズリ 内面にシボり目、端部に指頭圧痕
9	試掘トレンチ包含層	土師部	壺	口径12.8cm 残存器高5.3cm	細砂粒を若干含む	良	暗赤褐色	
10	試掘トレンチ包含層	土師部	壺	口径14.8cm 残存器高5.9cm	やや密	不良	茶褐色	
11	調査区西半包含層	土師部	壺	口径13.8cm 残存器高5.1cm	細砂粒を若干含む	やや不良	茶褐色	
12	試掘トレンチ包含層	土師部	壺	口径14.6cm 残存器高8.8cm	やや密	良	赤茶褐色	
13	テラス下段包含層	土師部	壺	口径15.6cm 残存器高6.1cm	細砂粒を若干含む	良	暗赤褐色	
14	調査区中央包含層	土師部	壺	口径17.3cm 残存器高7.3cm	細砂粒を若干含む	良	明赤褐色	内面ヘラケズリ
15	試掘トレンチ包含層	土師部	壺	口径17.8cm 残存器高8.5cm	やや密	やや良	外面黄褐色 内面茶褐色	
16	調査区西半包含層	土師部	壺	口径18.3cm 残存器高3.5cm	細砂粒を含む	良	茶褐色	
17	調査区中央包含層	土師部	壺	口径21.8cm 残存器高7.0cm	細砂粒を含む	良	暗赤褐色	
18	調査区西半包含層	土師部	壺	口径24.3cm 残存器高4.6cm	稠密	良	暗赤褐色	口縁内面にハケ目
19	調査区西半包含層	土師部	甕	残存器高6.1cm 高台径15.8cm 高台高0.6cm	細砂粒を若干含む	良	茶褐色	底部外面は灰黒色
20	調査区西半包含層	土師部	羽釜	口径28.6cm 残存器高6.0cm	密	良	暗赤褐色	
21	調査区西半包含層	土師部	羽釜	口径32.4cm 残存器高6.5cm	砂粒を含む	良	暗赤褐色	内面にハケ目
22	テラス下段包含層	土師部	羽釜	口径23.0cm 残存器高6.4cm	白色砂粒を含む	良	茶褐色	
23	調査区中央包含層	土師部	壺	口径37.0cm 残存器高9.5cm	細砂粒を若干含む	良	淡灰褐色	体部外面にハケ目
24	調査区西半包含層	土師部	壺	口径34.8cm 残存器高5.7cm	細砂粒を若干含む	良	明赤褐色	
25	調査区西半包含層	土師部	壺	口径38.6cm 残存器高7.1cm	稠密	良	淡赤褐色	
26	調査区西半包含層	土師部	鍋	口径24.3cm 残存器高9.5cm	白色砂粒を含む	良	赤褐色	体部外面にハケ目痕跡
27	試掘トレンチ包含層	土師部	鍋	口径37.6cm 残存器高8.5cm	砂粒を若干含む	やや不良	暗赤褐色	
28	調査区西半包含層	須恵部	杯蓋	口径9.8cm 器高3.1cm	密	良	青灰色	
29	試掘トレンチ包含層	須恵部	杯蓋	口径10.8cm 残存器高3.2cm	細砂粒を含む	良	灰白色	
30	テラス下段包含層	須恵部	杯蓋	口径12.0cm 器高2.9cm	細砂粒を含む	良	暗灰色	
31	調査区西半包含層	須恵部	杯蓋	口径11.2cm 器高3.6cm	細砂粒を含む	良	灰白色+灰黒色	
32	北端水田部包含層	須恵部	杯蓋	口径15.6cm 器高4.5cm	細砂粒を含む	良	灰色	
33	調査区西半包含層	須恵部	杯蓋	口径10.0cm 器高2.7cm つまみ径1.45cm	細砂粒を含む	良	青灰色	
34	試掘トレンチ包含層	須恵部	杯蓋	口径12.8cm 残存器高2.5cm	密	良	青灰色	
35	調査区中央包含層	須恵部	蓋	口径14.8cm 器高2.3cm つまみ径2.8cm	細砂粒を若干含む	良	灰白色	
36	試掘トレンチ包含層	須恵部	蓋	口径14.4cm 器高2.4cm	白色砂粒を含む	良	明灰色	
37	試掘トレンチ包含層	須恵部	蓋	口径17.0cm 残存器高3.2cm	密	良	灰色	
38	試掘トレンチ包含層	須恵部	蓋	口径18.0cm 残存器高3.1cm	密	良	青灰色	
39	試掘トレンチ包含層	須恵部	蓋	口径18.0cm 残存器高2.1cm	密	良	青灰色	
40	試掘トレンチ包含層	須恵部	蓋	口径19.0cm 残存器高1.7cm	密	良	褐色	
41	調査区中央包含層	須恵部	高杯	口径11.8cm 残存器高3.8cm	稠密	良	灰黒色	
42	調査区西半包含層	須恵部	杯身	口径9.5cm 器高3.0cm	細砂粒を若干含む	良	暗灰色	
43	試掘トレンチ包含層	須恵部	杯身	口径10.2cm 器高2.6cm	密	良	灰色	底層外面に自然亀
44	北端水田部包含層	須恵部	杯身	口径10.4cm 器高2.6cm	稠密	良	灰白色	

表2 尺堂遺跡遺物観察表(2)

遺物番号	出土遺構及び層位	種別	器種	法量	胎土	焼成	色調	備考
45	調査区中央包舎層	須恵器	杯身	口径10.6cm 器高2.9cm	密	良	黒灰色	
46	調査区西平包舎層	須恵器	杯身	口径10.8cm 器高3.1cm	稠密	良	青灰色	
47	調査区西平包舎層	須恵器	杯身	口径12.0cm 器高3.1cm	稠密	良	青灰色	底部ヘラ切り未調整
48	北端木田部包舎層	須恵器	杯身	口径13.2cm 器高4.3cm	細砂粒を 含む	良	明灰青色	
49	調査区西平包舎層	須恵器	杯身	口径12.6cm 器高3.7cm	細砂粒を 含む	良	灰白色	底部ヘラ切り未調整
50	調査区中央包舎層	須恵器	杯身	口径10.2cm 器高3.2cm	細砂粒を 若干含む	良	灰白色	底部ヘラ切り未調整
51	試掘トレンチ包舎層	須恵器	杯身	口径10.0cm 器高3.4cm	細砂粒を 若干含む	良	黒灰色	
52	調査区西平包舎層	須恵器	杯身	口径10.3cm 器高3.2cm	細砂粒を 含む	良	灰色	底部ヘラ切り未調整
53	調査区中央包舎層	須恵器	杯身	口径12.2cm 器高3.7cm 高台径9.6cm 高台高0.6cm	稠密	良	灰白色	底部ヘラ切り未調整
54	試掘トレンチ包舎層	須恵器	杯身	口径12.6cm 器高4.0cm 高台径9.6cm 高台高4.1cm	細砂粒を 含む	良	灰色	
55	試掘トレンチ包舎層	須恵器	杯身	口径13.5cm 器高3.8cm 高台径9.8cm 高台高0.5cm	稠密	良	灰白色	底部ヘラ切り未調整
56	試掘トレンチ包舎層	須恵器	杯身	口径13.2cm 器高4.2cm 高台径9.2cm 高台高0.6cm	細砂粒を 若干含む	良	灰白色	底部ヘラ切り未調整
57	調査区中央包舎層	須恵器	杯身	口径14.1cm 器高3.7cm 高台径10.0cm 高台高0.5cm	細砂粒を 若干含む	良	灰白色	底部ヘラ切り未調整
58	試掘トレンチ包舎層	須恵器	杯身	口径13.7cm 器高4.2cm 高台径9.1cm 高台高0.5cm	稠密	良	黒灰色	
59	調査区中央包舎層	須恵器	杯身	口径14.2cm 器高3.3cm 高台径9.2cm 高台高0.5cm	密	良好	灰色	
60	調査区中央包舎層	須恵器	杯身	口径14.6cm 器高3.8cm 高台径10.6cm 高台高0.8cm	密	良好	灰色	
61	調査区中央包舎層	須恵器	杯身	口径17.3cm 器高5.0cm 高台径13.0cm 高台高0.5cm	密	良	青灰色	底部ヘラ切り未調整
62	調査区西平包舎層	須恵器	杯身	口径21.4cm 器高5.7cm 高台径18.4cm 高台高1.0cm	密	良	青灰色	
63	調査区西平包舎層	須恵器	壺	口径11.8cm 残存器高12.4cm 口縁部径11.8cm	細砂粒を 若干含む	良	灰白色	
64	調査区西平包舎層	須恵器	平瓶	体部径11.0cm 残存器高9.0cm 口縁基部径3.6cm	密	良	灰色+黒灰色	口縁接合痕あり
65	調査区中央包舎層	須恵器	小壺	体部径11.2cm 残存器高8.1cm 高台径4.5cm 高台高0.6cm	密	良好	青灰色	
66	調査区西平包舎層	須恵器	壺	口径11.5cm 残存器高4.0cm	稠密	良	灰黒色	
67	北端木田部包舎層	須恵器	壺	口径13.0cm 残存器高4.0cm	稠密	良	明灰色	
68	調査区西平包舎層	須恵器	横瓶	口径12.2cm 残存器高3.3cm	砂粒を含む	良	淡灰色	外面：平行タタキ後、などで磨し 内面：同心円タタキ
69	調査区中央包舎層	須恵器	広口壺	口径20.4cm 残存器高8.8cm	密	良好	暗灰色	
70	北端木田部包舎層	須恵器	壺	口径23.0cm 残存器高4.0cm	稠密	良	黒灰色	
71	試掘トレンチ包舎層	須恵器	一(底部)	残存器高2.3cm 高台径11.4cm 高台高1.7cm	稠密	良	灰白色	
72	試掘トレンチ包舎層	須恵器	一(底部)	残存器高3.9cm 高台径10.0cm 高台高1.4cm	細砂粒を 若干含む	良	灰白色	底部内面に緑褐色の自然粘
73	試掘トレンチ包舎層	須恵器	一(底部)	残存器高5.4cm 高台径10.7cm 高台高0.7cm	稠密	良	内面明灰色 外側黒灰色	内面回転タタキ
74	調査区西平包舎層	須恵器	一(底部)	残存器高6.3cm 高台径11.8cm 高台高1.1cm	稠密	良	内面淡灰色 外側淡灰色	
75	北端木田部包舎層	須恵器	一(底部)	残存器高4.4cm 底部径18.9cm	稠密	良	灰白色	
76	調査区中央包舎層	須恵器	内面硯	残存器高5.3cm 底部径22.2cm	稠密	良	灰色	脚座のみ 観察不明
77	第Ⅱ区SX-6	瓦葺	管	径12.7cm 長25.4cm	密	良	黒灰色	内面ヘラケズリ
78	第Ⅱ区SK-3	須恵器	小壺	口径4.1cm 器高9.3cm 高台径4.8cm 高台高0.7cm 体部径8.1cm 腹部径2.8cm	密	良	黒灰色	体部外面下手ヘラケズリ
79	SK-1	須恵器	杯身	口径9.8cm 器高3.6cm	稠密	良	灰白色	底部ヘラ切り未調整
80	SK-1	土師器	杯	口径14.6cm 器高4.1cm	細砂粒を 若干含む	良	茶褐色	内外面剝離のため調整不明
81	SK-1	土師器	皿	口径17.7cm 器高2.3cm	細砂粒を 若干含む	良	茶褐色	内外面剝離のため調整不明
82	SK-1	土師器	短頸壺	口径11.8cm 器高 8.7cm 頸部径10.9cm	細砂粒を 含む	良	茶褐色	

### 第3節 向山遺跡の調査

#### 第1項 はじめに

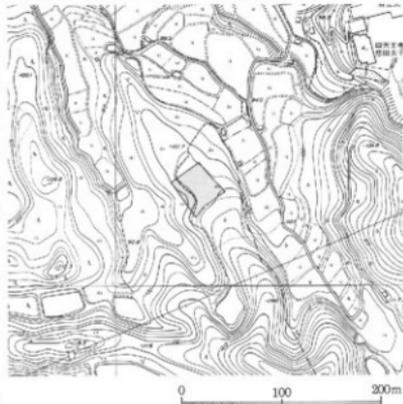
向山遺跡は、太子カントリー倶楽部事業地内の北部域で、新規発見された3遺跡の内の1つである。当該地区の試掘調査においては、尾根上で部分的に6世紀代から中世に及ぶ遺物包含層の存在が確認されると共に、若干のピットが発見されたことから、全面調査を実施することとなった。また尾根上で遺物包含層が確認されたため、試掘トレンチを丘陵の斜面にも延長したところ、西斜面において遺物はほとんど含まれないものの、丘陵上の包含層と類似した堆積が確認できたため、斜面部分については本調査時に再調査を実施して、全面調査の可否を検討することとし試掘調査を終えた。

追調査においては、丘陵斜面部分では全くと言っていいほど遺物は出土せず、また遺構も皆無であったため、尾根上の平坦部のみを調査対象として本調査を実施することとした。調査面積は約1,425㎡である。

#### 第2項 遺跡の立地

向山遺跡は大阪府南河内郡太子町大字山田字向山に位置するもので、字名を冠して遺跡名とした。

遺跡は南方から派生する一丘陵が、傾斜を緩めて幅約20～30mほどの平坦面を形成する地点に立地している。丘陵の東西には狭い谷が入り込み、北側の丘陵先端は平坦な太井川の氾濫原へと急激に下降していく。ゴルフ場事業地の北部域における今回の調査で発見された向山遺跡と植田遺跡、尺堂遺跡の3遺跡は、立地的には良く似た環境にあるが、本遺跡はその中でも尾根の最高所に位置するものである。遺跡から北の展望は開けており、北東に位置する推古天皇陵(高松古墳)と国指定史跡・二子塚古墳、北西の葉室古墳群が一望され、さらに西の遠方には敏達天皇陵(奥城古墳)が望まれる。しかし東に隣接する尾根との標高差は+40～50mと高く、西側に広がる低平な尾根とは趣を違える。



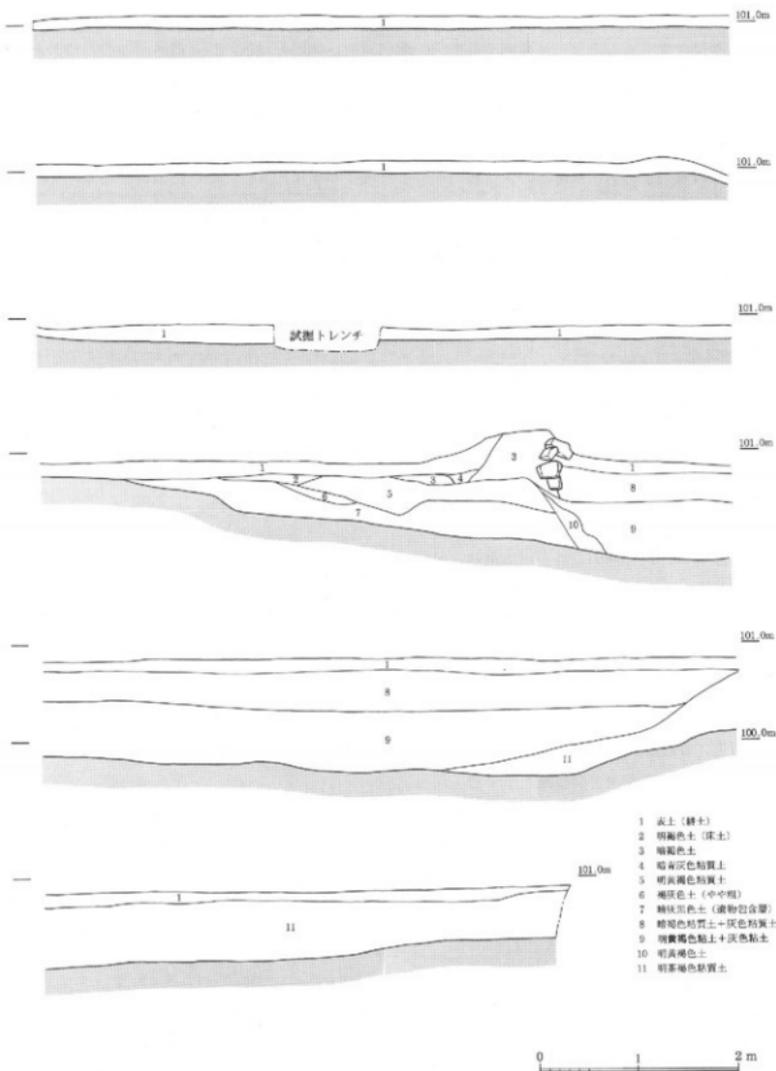
第19図 向山遺跡調査区位置図(1/5,000)

向山遺跡の谷を挟んだ東側の丘陵突端部には植田遺跡が所在しているが、試掘調査では时期的にも近似した遺物が出土しているので、両遺跡には何らかの有機的な関係があることも考えられた。

#### 第3項 基本層序

調査前の遺跡の現況は耕作地として利用されており、尾根の方向と並行して階段状に耕作地が配されていた。比較的広い平坦面を成す最高所の丘陵背部も、これらの耕作地が開かれることによって平坦化されたと考えられる。したがって第1層表土(耕土)直下、もしくは第2層の明褐色土(床土)下に検出される地山が遺構面となっており、深さも20～30cm程度と非常に浅い。

西側の一段低い部分では、耕作地の付設に伴い地山面がかなり深く埋め立てられた状況にあり、表土



第20図 向山遺跡調査区南壁断面図(1/50)



#### 第4項 遺構と出土遺物

発見された遺構のほとんどは小ピットと溝であり、遺跡の時期および性格を特徴付けるような顕著な遺構は、ほとんど検出されなかった。遺構は調査区の中央を南北に走る溝の東側の平坦面上と、西側の丘陵斜面部に集中している。ピットはまとまりがつかず、建物を復元できるものはなかった。

遺物の出土量は、調査区全体における総量でコンテナ4箱程度と、ごく少量であった。また遺構からの出土はほとんど認められず、包含層出土の遺物が大半を占めている。したがって図化できた6点の遺物も、すべてが包含層からの出土である。

1は外面に蓮弁文をもつ青磁碗である。青灰白色の稠密な胎土を有し、釉色は暗青緑色、焼成は堅緻である。復元口径は15.7cm、残存高は3.7cmを測る。2は黒色土器の碗底部と考えられるが、断定はし難い。高台径は7.3cmで、高さ1cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。器壁は薄く仕上げられている。表面は残存状況が悪く、調整については不明で、A・B類の分類も困難である。3は須恵器の底部で器種は壺と考えられる。外方に開く高台は径10.9cm、高さは0.65cmを測り、残存高は5.3cmである。外面は回転ナデ、内面はヘラケズリで仕上げられている。4は土師器壺で、外反する口縁は短く、台形状の断面をもつ。口縁部はナデが施されているが、体部は表面が剝離し、調整は不明である。5は土師器釜の口縁部で、遺構面直上で一括して破片が出土したものである。「く」の字形に屈曲する口縁はやや外反し、端部は短く上方に立ち上がる。頸は肩部下方に付き、短く下方に垂下している。内面はケズリ、外面はナデ調整されている。6の瓦器羽釜は復元口径25.4cmで、口縁部は緩やかに内湾し、外面には段を有する。張り付けの頸は、ほぼ水平にのびる。外面と内面上部は、ヨコナデで仕上げられる。

第22図 向山遺跡出土遺物実測図(1/4)

#### 第5項 小結

向山遺跡は、試掘調査終了段階では隣接する植田遺跡と関連した中世の遺構の発見が期待されたが、結果的に顕著な遺構は検出されず、両遺跡の関係についても知る事ができなかった。また包含層からは時期的にさかのぼる平安期の黒色土器片なども出土したが、同期の遺構も明確に区分し得ず、遺跡の性格等について知る由もなかった。しかしながら遺跡の存在する山間部における丘陵の開発が、11世紀前後にまでさかのぼる可能性が指摘されることは重要であろう。

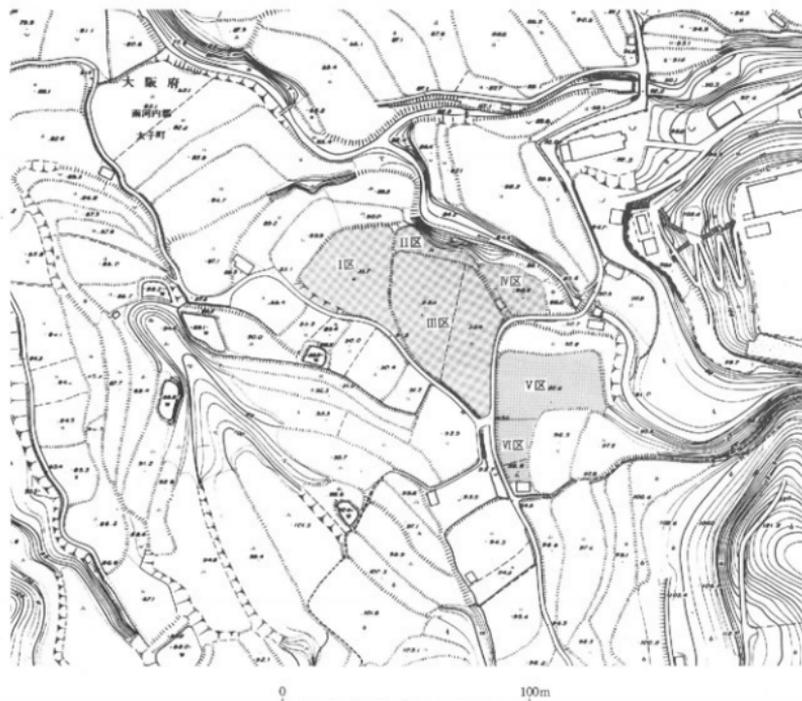
(池田)

## 第4節 植田遺跡の調査

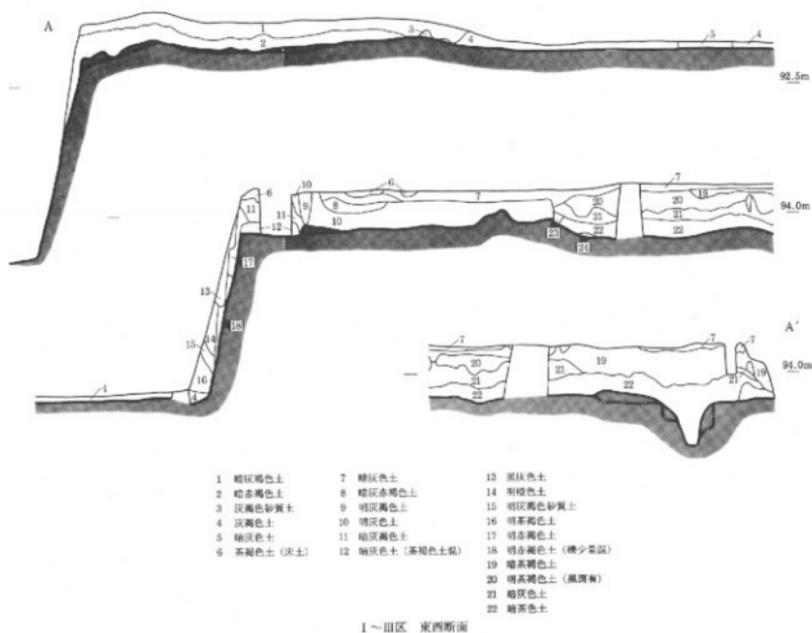
### 第1項 遺跡の立地

今回の発掘調査の対象となったゴルフ場予定地が所在する、南河内郡太子町南部から一部河内町にかかる地域は、葛城山系西麓にひろがる丘陵地帯である。この丘陵地帯は、東南から西北に向かって傾斜し、傾斜に沿って流れる水流は基盤層である花崗岩を深く侵食し、それによって形成されたV字谷は樹枝状に入り組んでいる。標高は200mに満たず高いとは言えないが、急峻な尾根が複雑に連なる地形となっている。その北縁には、数条の低平な舌状台地が礫長谷に向かって伸び、その先端をかすめるように太井川が西に向かって流れている。

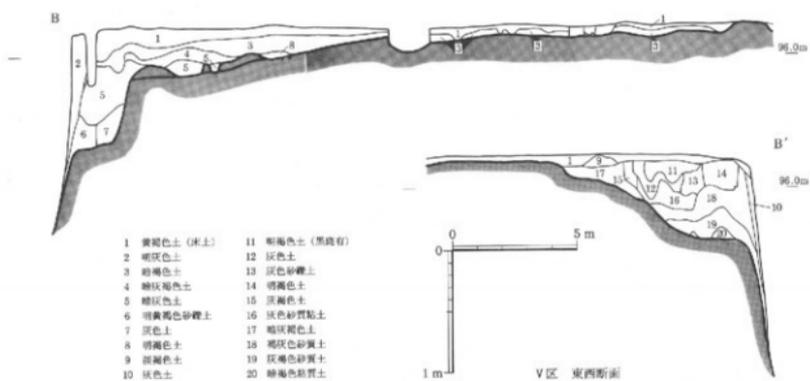
植田遺跡は、その舌状台地のうちの最も東の標高90～95mの台地上に立地する。遺跡の東辺から北辺に沿って太井川が流れ、その浸食作用によって急な崖になっている。西南方向は比高約2m程度の崖となり、幅約30mの狭い谷に接する。この谷の対岸の尾根には向山遺跡が立地している。東南は比高20mの急な斜面を介して背後の尾根に取りつく。この尾根を南方に約2kmたどると松山山城遺跡に連する。このように、河川や谷、急崖に囲まれた台地上に遺跡は立地していた。



第23図 植田遺跡周辺地形図(1/2,000)



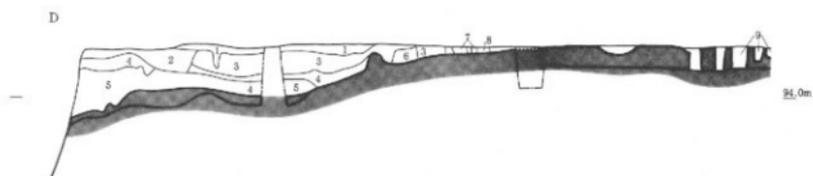
I-III区 東西断面



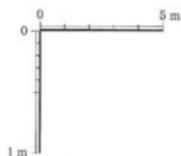
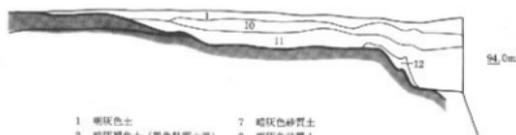
第24图 植田遺跡土層断面図①



I区 南北断面



D'



II区 南北断面



V区 南北断面

第25図 植田遺跡土層断面図②

## 第2項 検出された遺構

集落が営まれるのは幅約40mの台地上で、延長約120mにわたる部分を占有し、面積は約4,000㎡に達する。元来、東南から西北西に向けて下降する地形であるが、3段の籬段状に造成して水田にしている。そのため、尾根の中央部や段の下部付近は削平されており、その部分の遺構は消滅したと思われる。地山は黄褐色の礫層及び砂層である。その上層の堆積状態を見ると、籬段造成されているため、段の直下の削平部は、地山の上に直接水田の耕作土・床土が乗り、遺物包含層は遺存していない。一方、段の上部は水田を造成するために土を盛っているが、盛土と地山の間に中世の遺物を包含する茶褐色ないし灰褐色の土層が残っている。遺構はこの包含層の下の地山面で検出した。

削平によって形成された3段の籬段状遺構面で検出した遺構は、掘立柱建物6棟、井戸5基、集石遺構3基、土坑27基、溝2条、ピット、河川跡等である。各段毎にその在り方を見ると、下段（Ⅰ区）には掘立柱建物4棟や井戸3基、集石遺構1・2、土坑1・2、その他土坑、ピット多数がある。遺構は北寄りに集中しており、東南辺は空白になっている。

中段（Ⅱ・Ⅲ区）は、西南辺沿いに掘立柱建物2棟があり、その周辺に土坑3・4、その他土坑・ピットが若干存在する。建物5のまわりには溝がめぐる。東端には集石遺構3、井戸4があり、その北西に平行して走る溝群やピット群等がある。この段の中央部には遺構はほとんどなく、水田造成に伴い削平されたものとみられる。

上段（Ⅴ・Ⅵ区）は、中央部に不定形の土坑6や土坑7があり、その周辺に土坑・ピットが多く存在する。ピットは幾条かの列を成す部分が看取できるが、建物を復元することは困難であった。これらの遺構群の東部の遺構面は、太井川に向かって下降し人為的な遺構の分布は散漫になる。南部も明確な遺構は少ない。

### 建物1

Ⅰ区の中央からやや南西よりに存在する2間×4間の総柱の建物である。しかし、東柱は側柱の方向と微妙にずれていて、あまり整ったプランとは言い難い。北辺をとるとN66Wで、尾根筋の方向に一致する。桁行約8.6m、梁行4.8～5.0mで、面積は約42.1㎡である。今回の調査で検出された6棟の建物のなかで最大のものである。建物の位置は尾根の中心線から南西にずれており、この建物の北東側には遺構が密集するが、南西側にはほとんど存在しない。

### 建物2

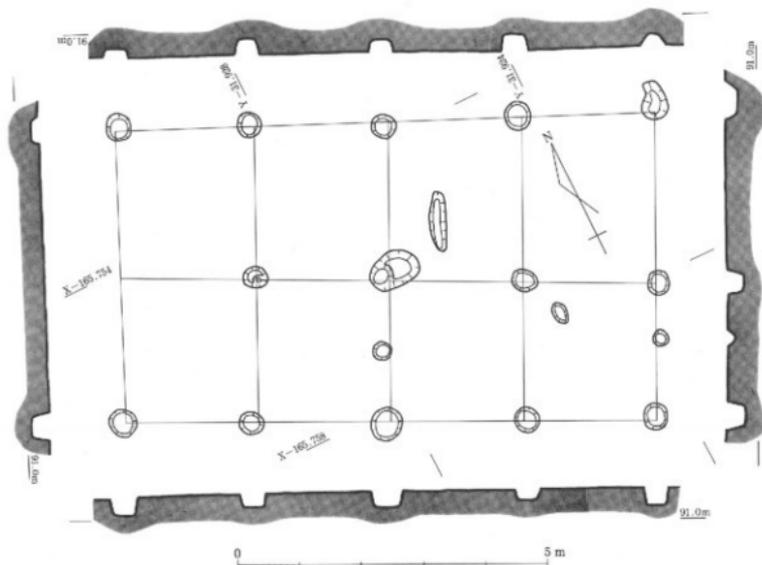
Ⅰ区の北西端で検出した1間×2間の建物である。側柱の方向は平行ではなく、柱間の寸法も一定でないなど粗雑なプランをもつ。西北辺をとるとその方向はN31E。桁行約3.9m、梁行約2.1～2.5m、面積約9㎡の小規模なものである。

### 建物3

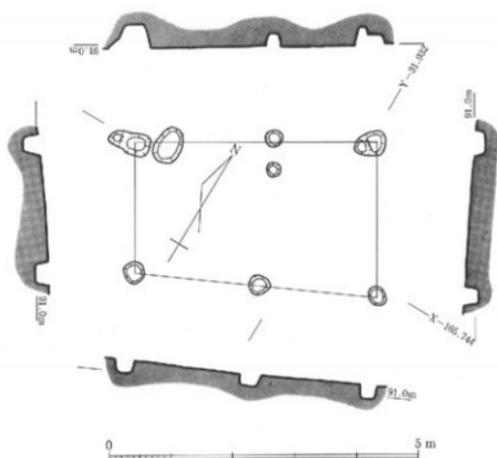
Ⅰ区の中央部で検出した。ほぼ正方形、座標北から西へ1°40′振れる。東西約3.1m、南北約3.2mで面積は約9.9㎡をはかる。なお、東辺から1間分、東に平行な溝があり、その北の北辺の延長上にあるピットがあるので、建物はもう1間分東に伸びる可能性もあるが、そうすると東南の隅柱がないという難点がある。土坑2と重なっており、北辺の側柱は土坑2に切られている。



第26図 植田遺跡遺構配置圖(約1/600)



第27图 建物1 实测图(1/80)



第28图 建物2 实测图(1/80)

#### 建物 4

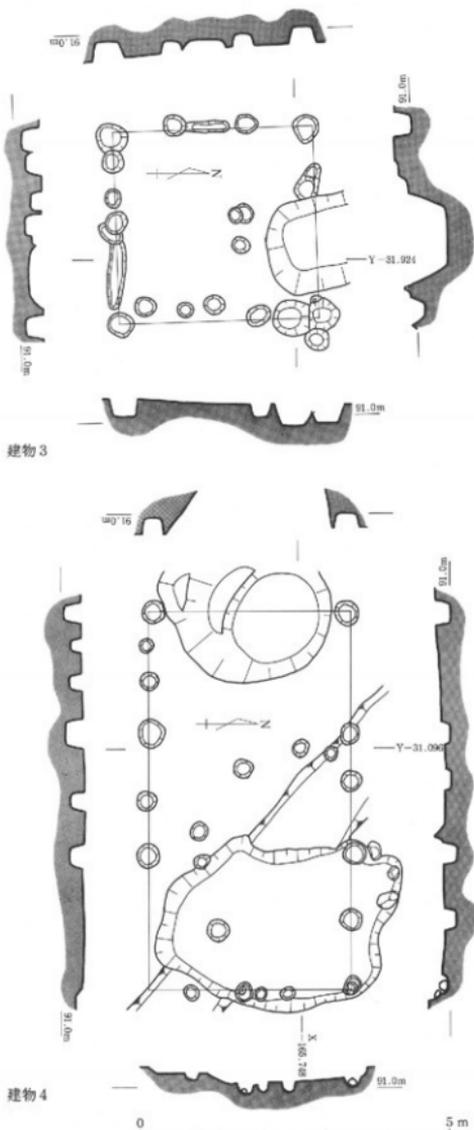
建物 3 の約 4 m 東にある 1 間 × 3 間の建物である。主軸の方向はほぼ座標に一致する。桁行約 6.2 m、梁行約 3.3 m、面積約 20.5 m<sup>2</sup> である。

#### 建物 5

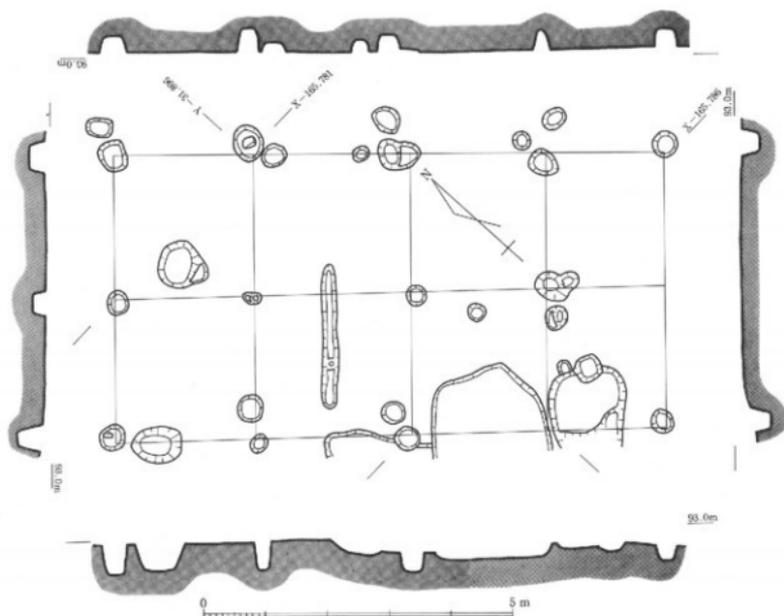
中段の西辺の北寄りに位置する 2 間 × 4 間の総柱の建物である。主軸は尾根筋と平行している。桁行約 8.9 m、梁行 4.5~4.7 m で面積は約 40.9 m<sup>2</sup> である。東北辺と西南辺はすこし方向がずれている。東北辺は N44W である。東柱も側柱に一致しないものがあるなど、粗雑なプランである。建物の東側は半円形状に溝で囲まれている。

#### 建物 6

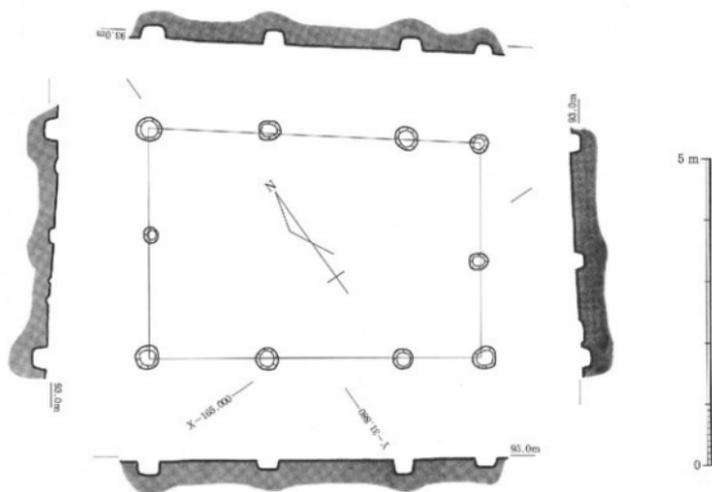
下段の西辺、建物 5 の南 7 m にある 2 間 × 3 間の建物である。建物 5 と同様に尾根筋に平行の主軸を持つ。西南辺の方向は N55W である。桁行約 5.4 m、梁行 3.5~3.7 m、面積約 19.4 m<sup>2</sup> である。これも各辺は厳密に直角には交わらない規格性に欠ける建物である。



第29図 建物 3(上)・建物 4(下)実測図 (1/80)



第30図 建物5実測図(1/80)



第31図 建物6実測図(1/80)

### 井戸 1

I区の中央部、建物4に接する径2.2m程の円形の井戸である。上部の南壁は崩壊したのか、不整形に広がっている。深さは約1.5mである。井戸枠材の残存はなく、素堀の井戸とみられる。

### 井戸 2

I区の中央よりやや南より、建物1の東南にある素堀の井戸である。平面形は楕円形で、長径約2.3m、短径約1.8mである。深さは約1.75mである。

### 井戸 3

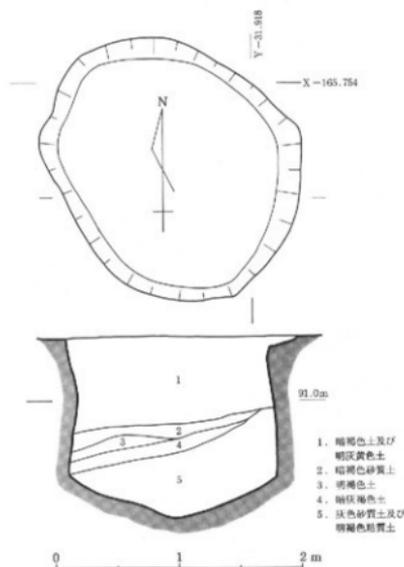
I区の東部、中段との境目付近にある井戸である。上部は石組み、下部は木材で枠をつくっている。下部の木材はわずかに木質の繊維が縦方向に残るのみで、その構造はわからない。上部は20~50cm程度の川原石を積んでいる。上面は径2~2.5mの楕円形、深さ約3.2mである。底部には長径60cmの大石が落ち込んでいる。

### 井戸 4

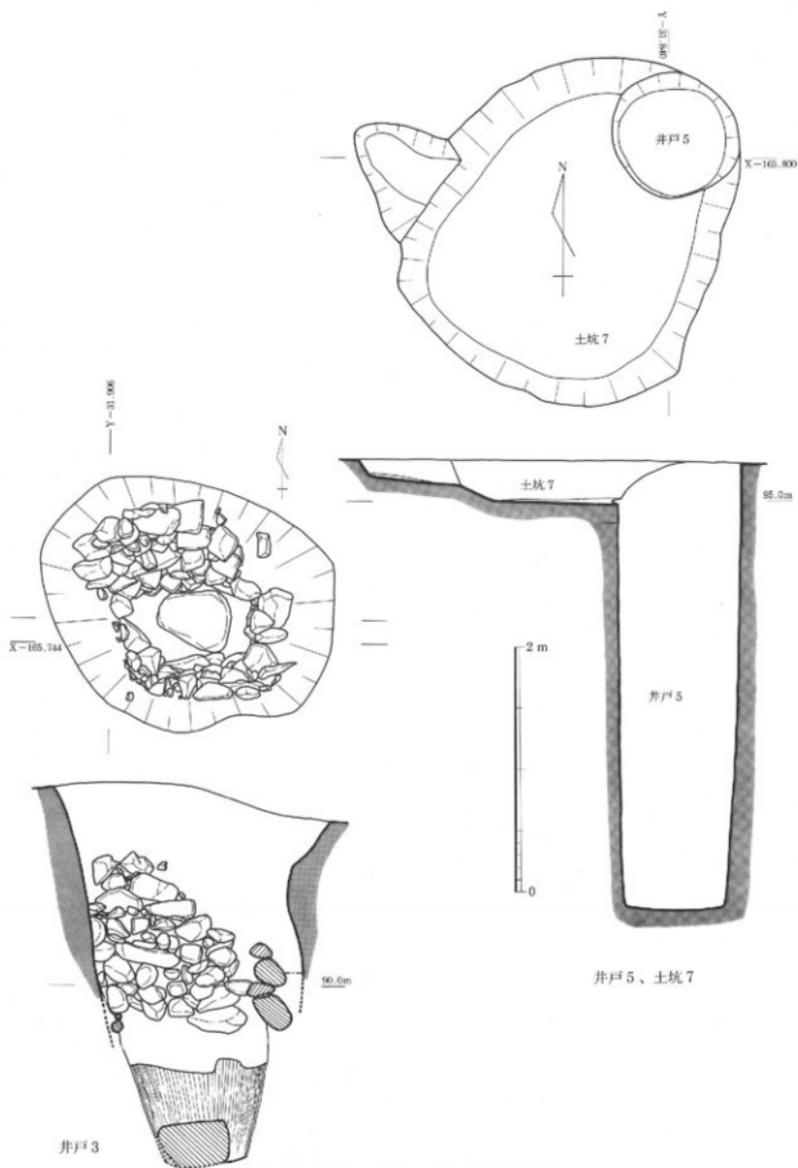
II区の東端、集石遺構3の南南東約2mの素堀の井戸である。上面の径2.4m前後、深さ約2mである。底部近くから曲物の底板が出土した。他に、土師器、瓦器等が出土している。

### 井戸 5

V区の中央南寄りにあり、土坑7を完掘後にその底面で検出した。径1m強、深さ約3.7mの素堀の井戸である。



第32図 井戸 2 実測図(1/40)



第33图 井戸 3、井戸 5、土坑 7 实测图(1/40)

### 集石遺構 1

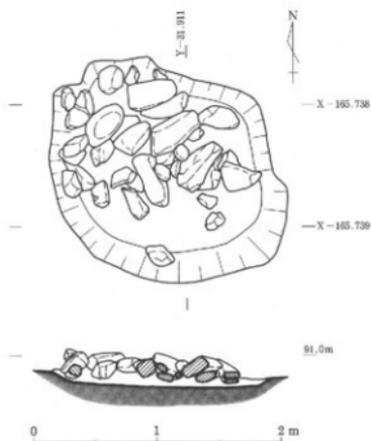
I 区の東北辺にある。南北約 9 m、東西 3 ~ 4 m の不整形の落ち込みである。深さは約 0.2 m の浅いものである。20 cm ないし 50 cm 程度の川原石を大量に含む。その中に、建築材とみられる加工された凝灰岩を含む。これは、破碎され、火を受けている。川原石にも火を受けた痕跡があるものがみられる。他に瓦器碗などの土器が少量出土した。

### 集石遺構 2

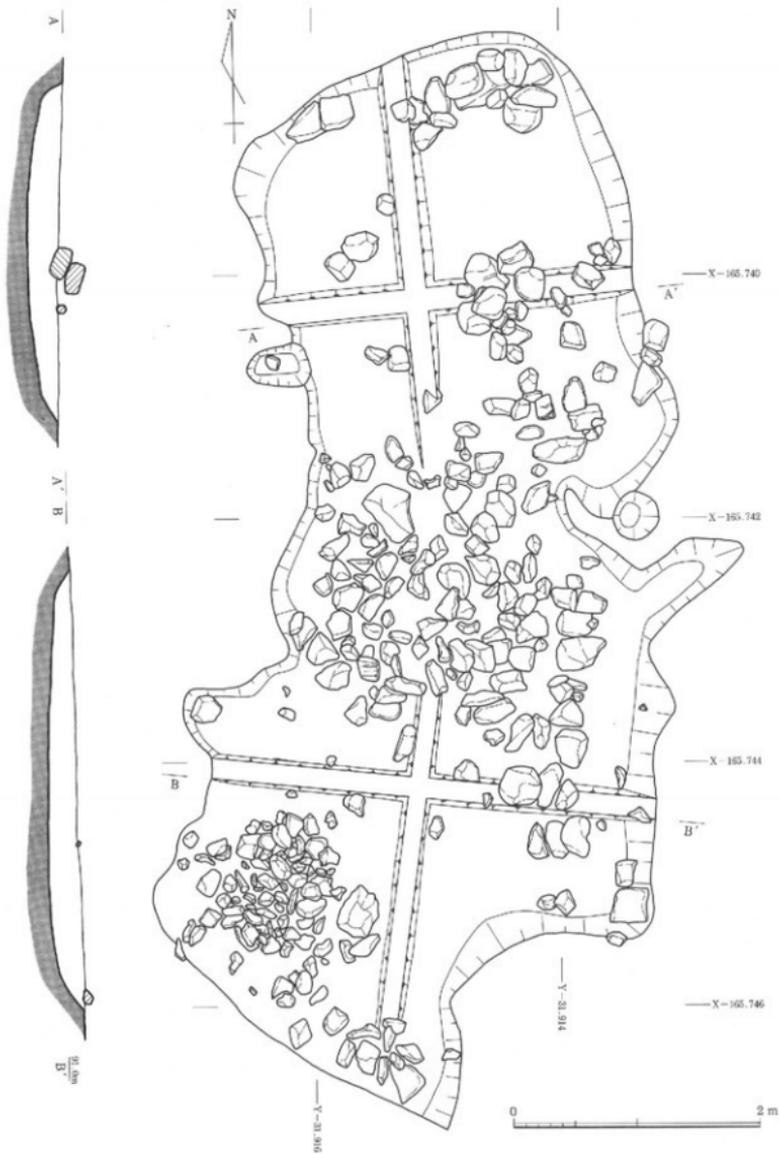
I 区の北東辺、径 1.8 m 前後の不整形形の浅い皿状の土坑である。川原石を多く含んでいる。検出面からの深さは 0.1 m 程度であるが、石の上面のレベルからみて本来は 0.3 m 以上あったと思われる。

### 集石遺構 3

II 区の東辺の河川跡をのぞむ崖上にある。一辺 5 m 程度の不整形形の浅い落ち込みである。川原石を大量に含む。焼けた凝灰岩石材の破片も含む。少量の土器が出土した。



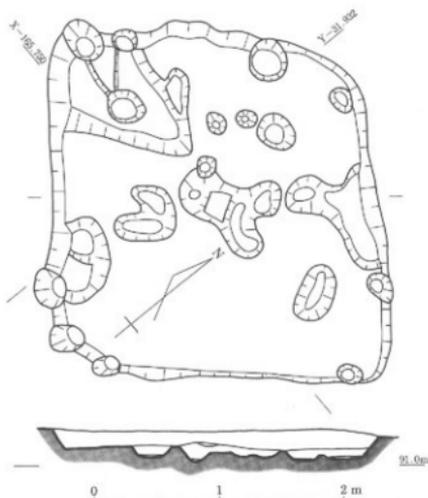
第34図 集石遺構 2 実測図(1/40)



第35図 集石遺構 1 実測図(1/40)

### 土坑 1

I区の北西部、建物1と建物2の間に位置する。一辺約2.8m、深さ0.2m弱の隅丸方形の堅穴状遺構である。主軸は方位に対して約45°ずれている。壁に沿って多数のピットがあり、床面にもピットや土坑が多い。何かの作業場とも想定されるが、明確ではない。



第36図 土坑1実測図(1/40)

### 土坑 2

I区のはぼ中央部、建物3に接する。南北約2.4m、東西約1.5m、深さ約80cmの長方形の土坑である。不整形の浅い落ち込み土坑10を切る。上面に川原石を敷き詰めたような状態である。

### 土坑 3

II区の西辺、建物5と建物6の間にある。径3m弱の不整形の土坑である。深さは約60cmある。底のほうに川原石と凝灰岩石材があった。底面には粘土が溜まり、西から水が流れこんだ痕跡がある。

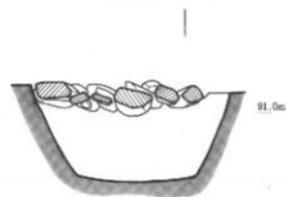
### 土坑 4

II区の南端、建物6の南辺に接する。東西約2.8m、南北約2.4mの半円形の土坑である。深さ約10cm以下の浅いものである。壁に沿って多くのピットがある。川原石を多く含んでいた。



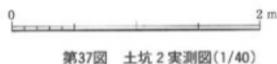
### 土坑 5

V区の中央部で検出した東西約2.9m、南北約3.3mの不整形の土坑である。深さは約25cm。底面には、いくつかのピットがある。幅30cmの溝が西にむかって約4.6mのびて舌状台地端の崖に至る。この土坑にともなう排水溝であろうか。

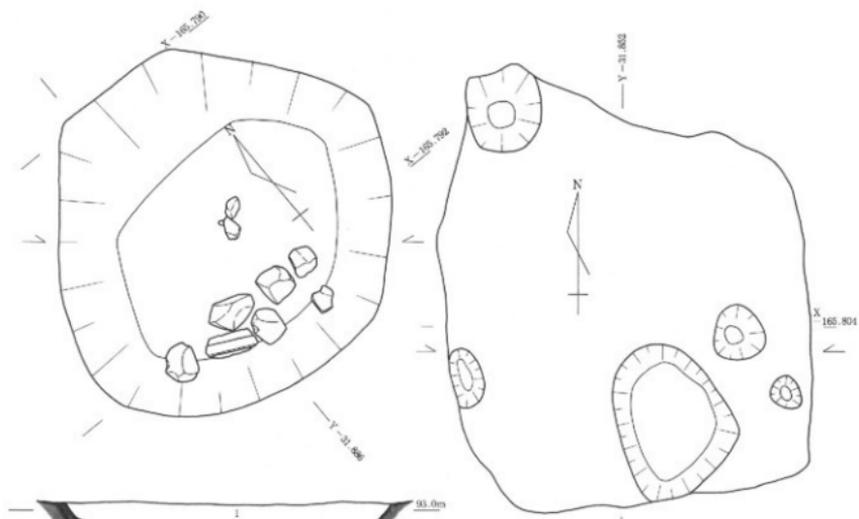


### 土坑 6

V区のはぼ中央部にある。無花果状の平面形をもつ落ち込みで、幅約4.2m、長さ約7.5mである。東南端は溝



第37図 土坑2実測図(1/40)

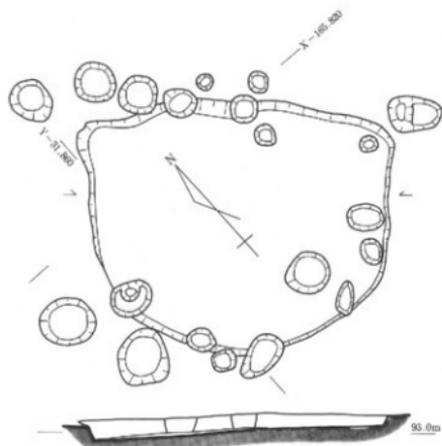


1. 黄褐色土
2. 黄灰褐色土
3. 灰色砂质土
4. 青灰色粘土

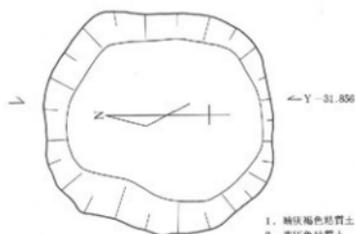
土坑 3



土坑 5



土坑 4



1. 黄褐色粘质土
2. 青灰色砂质土
3. 灰色砂

土坑 8



第38图 土坑 3·4·5·8 实测图(1/40)

56につながる。北東は浅い棚状の落ち込みが付属する。中央から北西部にかけては川原石が集積する。南半部から溝56との接続部にかけては川原石は列状に連なっている。北東の棚状部には東寄りに南北方向の溝があり、その底部にはピットが掘られている。



第39図 土坑6実測図(1/60)

### 土坑 7

V区の中央南寄りで検出した東西約2.8m、南北約2.4mの楕円形に近い土坑である。深さは約35cmであった。多量の川原石を含む。底面で井戸5を検出した。

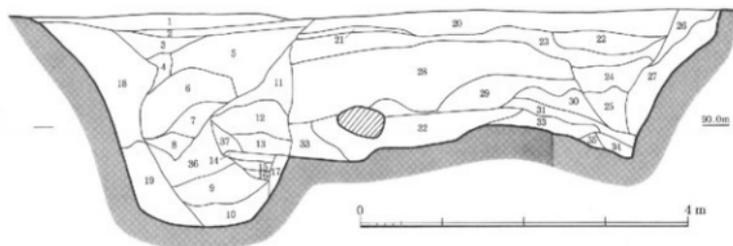
### 土坑 8

V区の南部にある、径約1.8m、深さ約0.6mの円形の土坑である。下部に灰色砂が堆積し、その上は薄い青灰色砂質土層があり、その上に川原石が乗っている。上部には暗灰褐色粘質土が堆積している。

### 河川跡

II区東辺の崖下（N区）で太井川の旧流路とみられる河川跡を検出した。崖に沿って東から北へ湾曲して流れている。全体の幅は約8.5m、深さ約2.7mをはかるが、最終流路の幅は約3m程度と思われる。川底のレベルは太井川の現河床より約5m高い。上層から14世紀後半の、下層から12世紀後半の土器が大量に出土した。今回調査した集落部分の遺構の遺物は大半が14世紀のものであって、下層の12世紀代の遺物がどこから供給されたかはわからないが、近接地に当該期の遺跡が存在していた可能性は高い。

(岩崎)



- |                     |            |            |                    |            |
|---------------------|------------|------------|--------------------|------------|
| 1 褐色粘砂土             | 10 緑灰色粘土   | 19 暗緑灰色シルト | 28 暗黄褐色粘質土         | 37 暗灰青色粘質土 |
| 2 緑灰色粘砂             | 11 暗青灰色砂質土 | 20 暗黄灰色粘質土 | 29 黄色粘質土           |            |
| 3 暗青灰色粘土            | 12 暗黄灰色粘砂  | 21 赤褐色粘質土  | 30 暗黄灰色土           |            |
| 4 褐色粘砂粘質土           | 13 暗黄灰色粘質土 | 22 暗茶褐色粘質土 | 31 暗黄灰色粘質土         |            |
| 5 暗黄灰色粘砂 (暗青灰色粘土混入) | 14 暗茶褐色シルト | 23 茶褐色粘質土  | 32 礫               |            |
| 6 灰色シルト (暗青色)       | 15 暗茶褐色シルト | 24 黄褐色粘質土  | 33 砂礫              |            |
| 7 灰青色シルト            | 16 暗茶褐色シルト | 25 茶褐色粘質土  | 34 茶褐色粘質土          |            |
| 8 暗黄褐色シルトブロック       | 17 暗茶色シルト  | 26 暗黄褐色粘質土 | 35 暗灰褐色砂           |            |
| 9 灰青色シルト (軽味おびる)    | 18 茶褐色粘質土  | 27 礫       | 36 灰青色シルト (7より明るい) |            |

第40図 河川跡断面図(1/60)

### 第3項 出土遺物

植田遺跡の調査によって出土した遺物は、土器、瓦(丸瓦)、鉄器(鉄鎌)、銭貨、木製品(漆器・漆塗り容器・木製容器)、石製品(石帯・砥石・滑石製石鍋・加工した凝灰岩)、サメカイト剥片などがある。これらの遺物は、ピット、井戸、集石遺構、土坑、溝、河川跡、遺構面直上、包含層などから出土し、概ね12世紀中～後半と14世紀後半～末の遺物に大別できる。遺物の中で大部分を占めるのは土器であり、瓦器碗・小皿・土釜、瓦質摺鉢・甕、土師器皿・小皿・土釜・捏鉢・甕、須恵器捏鉢・甕、湊焼甕・捏鉢などの日常雑器、青磁碗・皿、白磁碗などの輸入陶磁器、若干の縄紋土器片などがある。

これらの中で特に注目すべきものとして、土坑6や河川跡上層・下層出土の遺物がある。これらは、年代が推定しうる良好な一括遺物であり、絶好の基準資料といえる。ここでは、これら一括遺物に重点をおいて遺構毎に述べることにする。土器、瓦、鉄器、銭貨、漆器、木製品、石製品の順番でそれらの観察を記し、記載されたすべての遺物法量については本項の末尾に表としてまとめた。

なお733点の遺物を実測したが、本項にはその内490点を掲載した。

また、土器の年代や特徴については以下の文献を参考にした。

白石太一郎 「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」 『古代学研究』 54 古代学研究会 1969

樋口吉文 『堺 中近世環濠都市遺跡発掘調査報告』 堺市教育委員会 1980

尾上実 「南河内の瓦器碗」 『藤澤一夫先生古希記念 古文化論叢』 1983

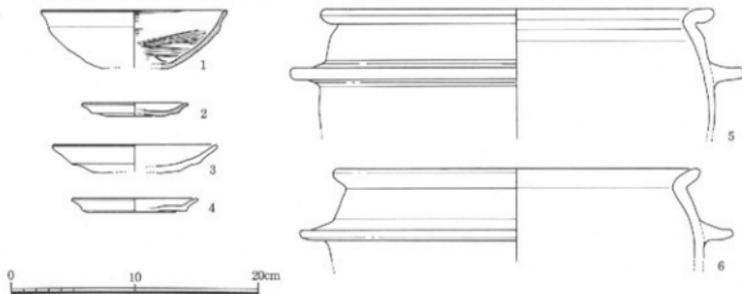
菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」 『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』 同朋社出版 1983

日本中世土器研究会 『中近世土器の基礎研究』 I～VIII 1985～1992

中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995

#### ①ピット出土遺物(第41図)

掘立柱建物を形成する柱穴からは土器の細片が出土しているが、図化するものはない。ただ、建物周辺のピットからは、若干の図示しうる土器が出土している。瓦器(1・2)、土師器皿(3・4)、土師器土釜(5・6)があり、ピット53からは1と5が出土している。1は底部を欠失しているが、口縁部は強いヨコナデにより段をもち、端部は丸くおさまる。内面には横方向の暗文が施されており、和泉型の瓦器碗と考えられる。5は土師器の土釜で、口縁部は「く」の字形に外反し、端部は丸くおさまる。肩部には水平に鈔をめぐらしている。なお、体部外面には煤が付着している。これらの土器の年代については、12世紀後葉頃(Ⅲ-1)と考えられる。



第41図 ピット出土遺物(1/4)

#### ②井戸1出土遺物(第42図)

瓦器碗(1~6)、土師器小皿(7)、瓦器小皿(8)、須恵器甕(9)、瓦器土釜(10)などが出土している。1の口縁部は強いヨコナデにより段をもち、端部は丸くおさまる。断面逆台形の低い高台を貼りつけている。2~4の内面には横方向の暗文が施されている。9の口縁端部は強く外湾し、端部は段をもつ。口頸部は短く体部にむかって大きく広がる。体部外面は左下がりの平行タタキ、内面には青海波文が遺存している。10はやや小型の瓦器土釜で、口縁部は内傾し端部に面をもつ。鈔は強いヨコナデによって上方に摘みあげられている。なお、体部外面には煤が付着している。これらの土器の年代は、1~6が13世紀中葉(Ⅳ-1)頃と考えられる。

#### ③井戸2出土遺物(第42図)

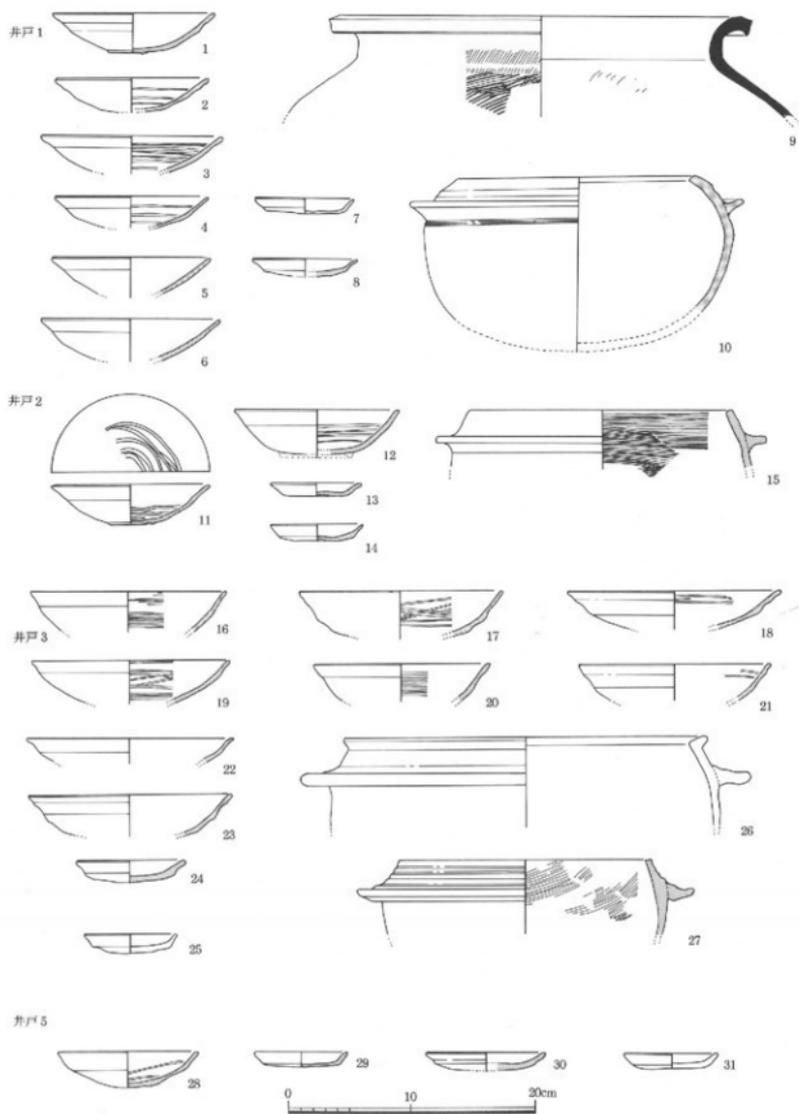
瓦器碗(11・12)、瓦器小皿(13・14)、瓦器土釜(15)などが出土している。11の口縁部は強いヨコナデにより段をもち、端部はやや角張る。断面逆台形の低い形骸化した高台を貼りつけている。内面には圈線状の暗文が施されている。12にも同様な圈線状の暗文が施されている。15の口縁部は内方に傾斜し、端部はやや角張り気味である。口縁部内面には細かい横方向のハケ目を施す。肩部には水平の鈔をめぐらせている。なお、体部外面には煤が付着している。これらの土器の年代は、13世紀中葉(Ⅳ-1)頃と考えられる。

#### ④井戸3出土遺物(第42図)

瓦器碗(16~23)、瓦器皿(24)、土師器小皿(25)、土師器土釜(26)、瓦器土釜(27)などが出土している。すべての瓦器碗は高台部を欠失している。26の口縁部は「く」の字形に短く外反し、端部は丸い。肩部には水平方向に鈔をめぐらす。内外面ともヨコナデによって仕上げられている。なお、体部外面には煤が付着している。27は古相の瓦器土釜と考えられる。口縁部外面は強いヨコナデによって段を形成している。鈔は基部が太く、端部はやや上方に短く摘みあげている。内面には左下がりのハケ目を施す。体部外面には煤が付着している。土器の年代については、12世紀後~末葉頃(Ⅲ-2)と考えられる。

#### ⑤井戸4出土遺物(第43図)

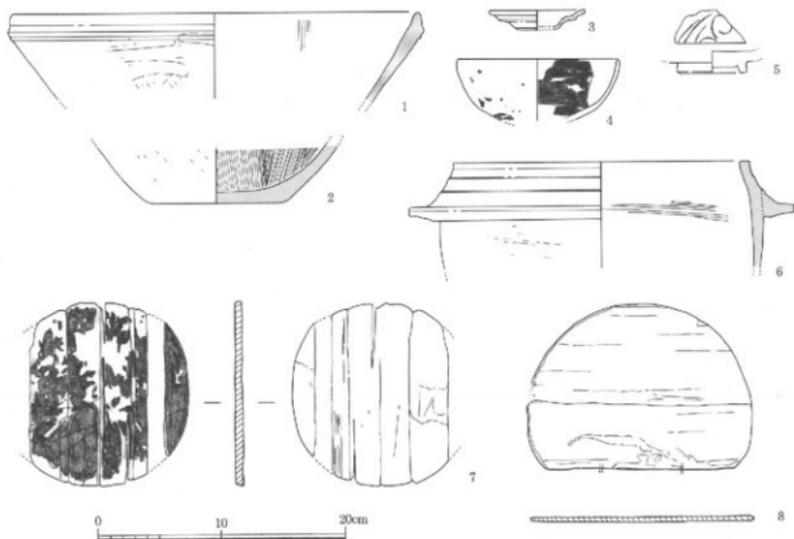
瓦質摺鉢(1・2)、土師器小皿(3)、漆器碗(4)、青磁碗(5)、瓦器土釜(6)、漆塗り容器(7)、木製容器(8)などがある。1の口縁部は断面三角形を呈し、端部は丸くおさまる。口縁部内面には摺目が遺存し、体部外面には横方向のヘラケズリが施されている。2は1の底部であろう。内面には縦方向に1cmに5本の摺目が明瞭に遺存している。外面は右下りのヘラケズリが施されている。3はいわゆる「へそ皿」である。底部は欠失しているが、突出部をもつものであろう。口縁部は2段にわたって外反し、端部は丸くおさまる。器内は薄い。4は内外面が総黒色の漆器碗であるが、底部は欠失している。黒色漆は内面に良好に遺存しているが、外面はほとんど剥落していた。碗部はやや深めで、口縁端部は尖り気味である。5は青磁碗の高台片である。高台端部はやや丸味をおび、杯部との境には回転ヘラケズリによって沈線が施されている。器内は分厚い。内底面には、輪状や弧線の文様がみられる。6の口縁部はやや内傾し、端部は面を有する。口縁部外面は2条の沈線によって段を形成し、内面には横方向のハケ目が遺存している。体部外面には横方向のヘラケズリが施されている。7は曲物の底板であろう。底板上面には黒漆が明瞭に遺存していた。径約15cm、厚さ約0.6cmの柾目の板で、周縁には明瞭に鉋で削った痕跡を看取できる。8は径約18cm、厚さ約0.5cmの杉の柾目の円板の片側を直線状に切って下面とするもので、容器の側板と考えられる。直線部の側縁には、2ヶ所の目釘穴が認められた。なお、遺物の年代については、14世紀中~後葉頃と考えられる。



第42図 井戸1～3、5出土遺物(1/4)

⑥井戸 5 出土遺物(第42図)

瓦器碗(28)、瓦器小皿(30)、土師器小皿(29・31)などがある。28の口縁部は強いヨコナデにより段をもち、端部は丸くおさまる。口径は縮小し、高台は消失している。内面には螺旋状の暗文が施されている。31の口縁部は短く外反し、端部は丸くおさまる。口縁部内外面はヨコナデ、それ以外はナデ。これらの土器の年代については、13世紀末葉頃(Ⅳ-3)と考えられる。



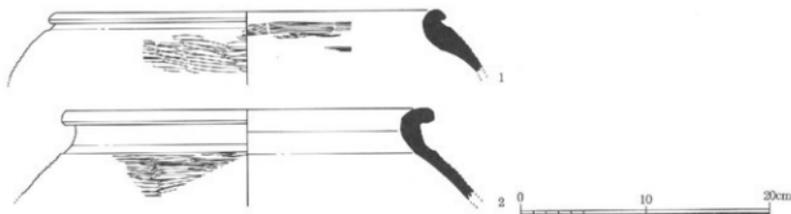
第43図 井戸 4 出土遺物(1/4)

⑦集石遺構 3 出土遺物(第44図)

1は淡焼堯の口縁部片である。口縁端部は外側に折り返して丸くおさまる。端部外面直下には強いヨコナデを施している。体部外面は平行タタキ、内面には一部横方向のハケ目が遺存している。

2も淡焼堯の口縁部片である。口縁部は短く立ち上がり、端部は直角に外反する。口縁部内外面はナデ調整。体部外面は平行タタキ、内面には右下りのハケ目が遺存している。

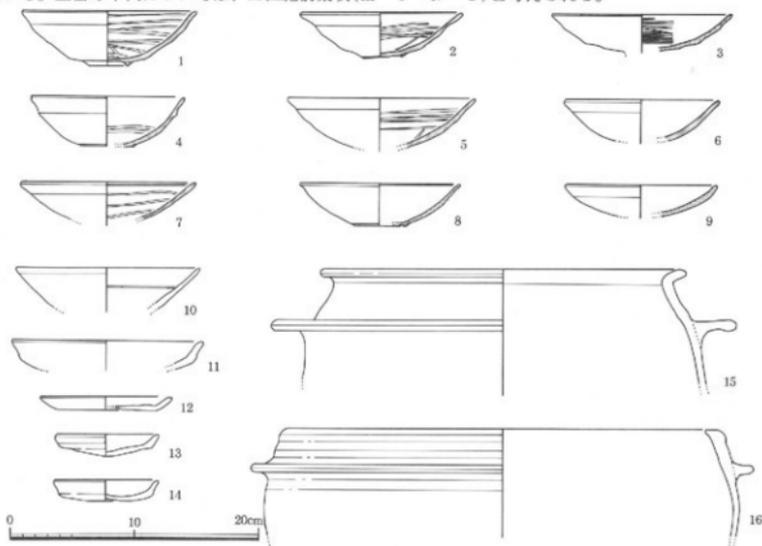
これらの土器の年代については、15世紀前~中葉頃と考えられる。



第44図 集石遺構 3 出土遺物(1/4)

⑧土坑 1 出土遺物(第45図)

瓦器碗(1~9)、白磁碗(10)、土師器皿(11)、土師器小皿(12~14)、土師器土釜(15・16)などがある。1の口縁部外面は強いヨコナデによって段をもち、端部は外反気味に丸くおさまる。体部外面は指頭痕が明瞭であり、内面には横方向の暗文がみられる。底部には断面三角形の高台を貼りつける。2と4は、1と同様な調整・形態であるが、高台は粘土紐を貼りつけたただけのものである。10は白磁碗片であり、碗部内面の中ほどに一条の沈線をめぐらしている。13の口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面は不調整。15の口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさまる。肩部には水平に鈔をめぐらしている。内外面はヨコナデ調整。口縁部及び体部内外面の一部に火をうけた痕跡がみられる。16の口縁部は内傾し、強いヨコナデによって段をもち、端部は面をもつ。肩部には水平に短い鈔をめぐらしている。体部は内外面とも強いナデ調整。口縁部内面を除くすべてに煤が付着している。土器の年代については、13世紀前葉頃(Ⅲ-3~Ⅳ-1)と考えられる。

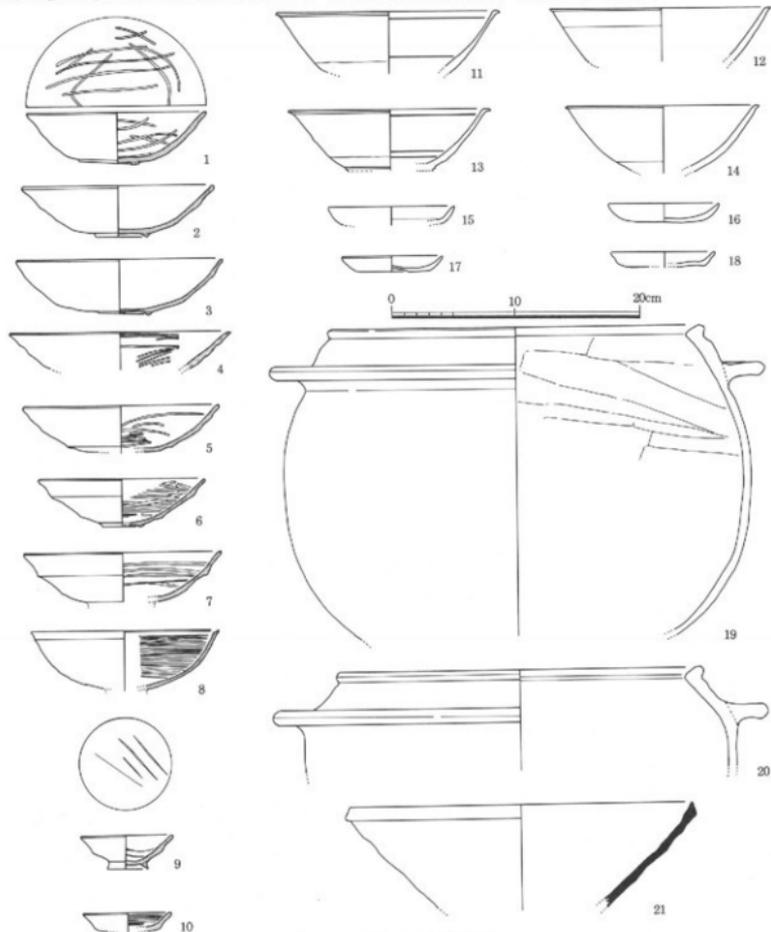


第45図 土坑 1 出土遺物(1/4)

⑨土坑 2 出土遺物(第46図)

瓦器碗(1~9)、瓦器皿(10)、白磁碗(11~14)、土師器小皿(15~18)、土師器土釜(19・20)、須恵器鉢などがある。1は完形の瓦器碗である。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさまる。高台は粘土紐がひしゃげた状態で貼りついている。体部外面には明瞭に指頭痕が遺存し、一部重ね焼きの痕跡がみられる。また体部内面には平行暗文が施されている。2の器表はかなり摩滅しているが、内面底部には平行暗文、体部内面には團線状暗文の痕跡が看取できる。高台の断面は三角形を呈している。5の体部内面には團線状の暗文がみられる。8は底部を欠失している。口縁部はヨコナデによって僅かに外反し、端部内面には沈線をめぐらす。体部内面には口縁部に平行する整美な團線状暗文を施している。大和型の瓦器碗である。9は小型の瓦器碗で、口縁部は強いヨコナデによって段をもつ。高台は外側に踏ん張

り、端部は尖り気味である。内外面は平行暗文が、口縁部内面と体部内外面には横方向の細かいヘラミガキが施されている。11の口縁部は外上方に真っすぐ伸び、端部を水平に外側へ引っ張りだして面を有する。口縁部内面と底部内面近くに各々1条の沈線をめぐらす。13も同様の調整・形態である。19は底部を欠失する以外は良好に遺存していた。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさまる。肩部には水平に鈿をめぐらし、端部は丸い。体部はやや丸味を帯びている。口縁部及び鈿部内外面はヨコナデ調整。体部はナデ調整。鈿部下方には煤や焦げ目がみられる。21の口縁部は断面三角形形状を呈し、端部は尖り気味である。口縁部外面、体部内外面は回転ナデ調整を施す。おそらく、東播系の須恵器片口鉢であろう。これらの土器の年代については、12世紀末葉頃(Ⅲ-2)と考えられる。



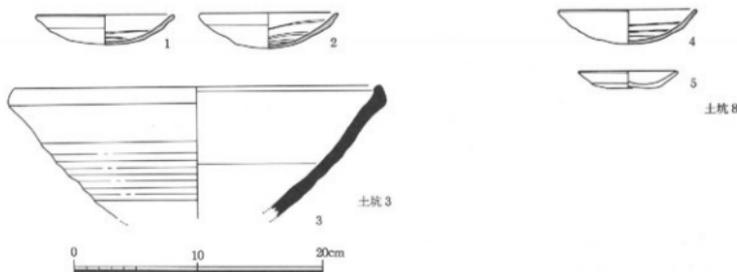
第46図 土坑2出土遺物(1/4)

#### ⑩土坑3出土遺物(第47図)

瓦器碗(1・2)、須恵器捏鉢(3)などがある。1と2は、浅い碗形の丸底を呈し、高台は消失している。体部内面には数条の螺旋状暗文を施すのみである。2の体部外面には重ね焼きの痕跡が良好に遺存している。3は口縁端部を上方に拡張し、内側に肥厚する。調整は体部内外面とも回転ナデ。ただ、体部内面下半は使用されたことによって器表がかなり摩擦している。東播系須恵器の捏鉢であろう。土器の年代については14世紀前葉(N-4)頃と考えられる。

#### ⑪土坑8出土遺物(第47図)

4は瓦器碗である。口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は丸くおさめる。体部は浅い碗形の丸底を呈し、高台は消失している。体部内面には数条の螺旋状暗文を施している。体部外面には重ね焼きの痕跡が良好に遺存している。5は土師器小皿である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底面はやや上げ底状を呈している。これらの土器の年代は、14世紀前葉頃(N-4)頃と考えられる。

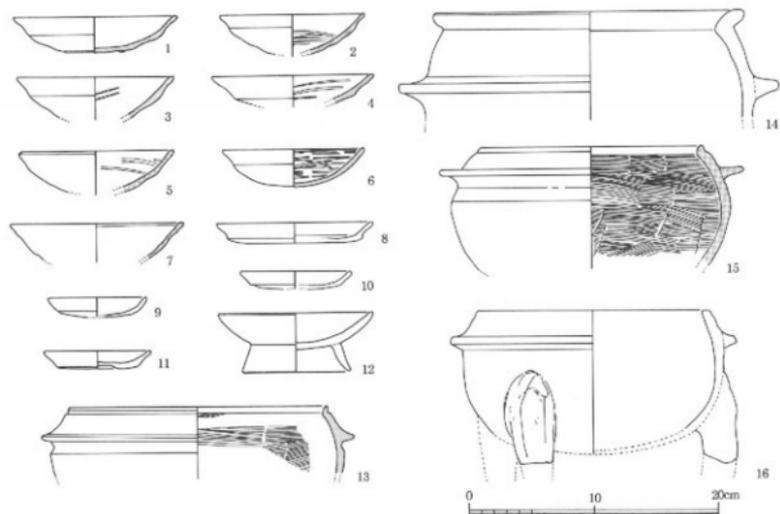


第47図 土坑3、8出土遺物(1/4)

#### ⑫土坑4出土遺物(第48図)

瓦器碗(1~7)、土師器皿(8)、土師器小皿(9~11)、土師器台付杯(12)、瓦器土釜(13・15)、土師器土釜(14)、土師器三足付土釜(16)などが出土している。

1の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は丸くおさめる。断面逆台形の低い形骸化した高台を貼りつけている。暗文は器表が摩擦しているため明確ではない。6の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は丸くおさめる。体部は浅い碗形の丸底を呈し、高台は消失している。体部内面には数条の螺旋状暗文やヘラミガキが施されている。体部外面には重ね焼きの痕跡が良好に遺存している。11の口縁部は強いヨコナデを施し、底面はやや上げ底状を呈している。12の口縁部は外上方に伸び、端部は尖り気味である。台部は外側に踏ん張っており、その端部を僅かに摘みあげている。主にヨコナデ調整を施す。色調は乳灰色を呈している。紀伊系の土師器であろう。13の口縁部は内傾し、端部を上方へ僅かに摘みあげた後、丸くおさめる。口縁部及び体部内面は横方向のハケ目を施している。体部外面には煤が付着している。15も口縁部は内傾し、端部を上方へ僅かに摘みあげた後、丸くおさめる。肩部には幅の狭い鈎をめぐらし、体部は半球形を呈している。口縁部及び鈎部外面はヨコナデ調整、体部外面はナデで仕上げる。口縁部及び体部内面は横方向のハケ目を施している。なお、体部外面には煤が付着している。16の口縁部は内傾し、端部には面をもつ。肩部には短い鈎をめぐらす。体部中央からは足を貼りつけているが、大部分は欠失している。口縁部及び体部外面はナデ調整を施す。なお、体部外面には煤が付着している。これらの土器の年代については、14世紀前葉頃(N-4)と考えられる。

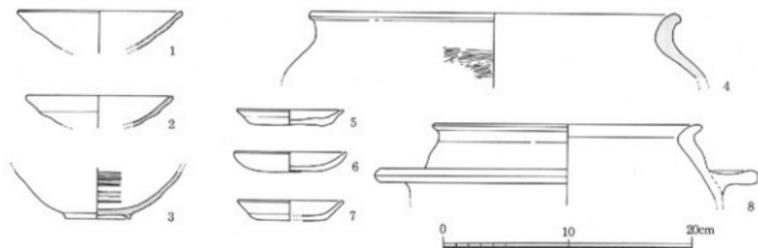


第48図 土坑4 出土遺物(1/4)

⑬土坑5 出土遺物(第49図)

瓦器碗(1~3)、瓦質壺(4)、土師器小皿(5~7)、土師器土釜(8)などが出土している。

3の口縁部は欠失しているが、底部に断面三角形の高台を貼りつける。体部内面には圈線状暗文が施されている。4の口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさまる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はやや右下りの平行タキ、内面はナデを施す。8の口縁部も「く」の字状に外反し、端部は丸くおさまる。肩部には水平方向に罫をめぐらしその端部は丸い。口縁部内外面ともヨコナデ調整を施す。体部内面や破断面は火をうけ、焦げている。これらの土器の年代については、12世紀後葉(Ⅲ-1)頃と考えられる。



第49図 土坑5 出土遺物(1/4)

⑭土坑6 出土遺物(第50図)

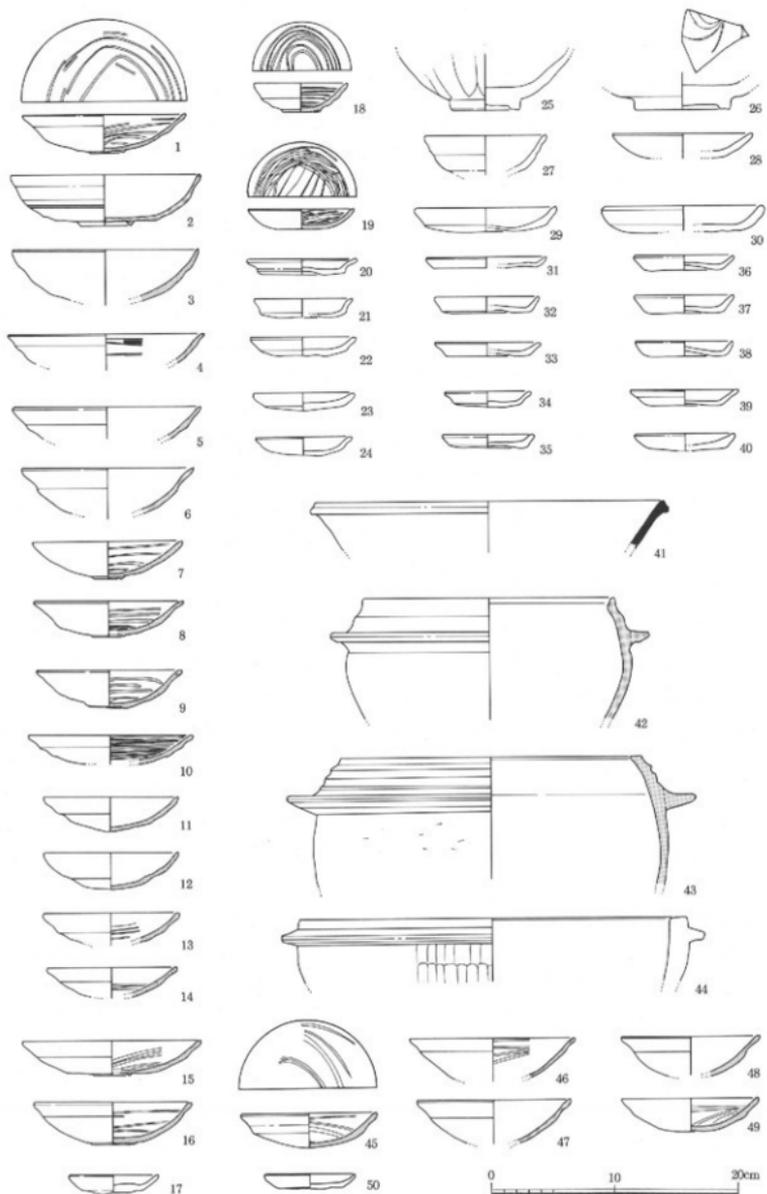
瓦器碗(1~16・45~49)、小型瓦器碗(18)、瓦器皿(19)、土師器小皿(17・20~24・31~35・36~40・50)、土師器皿(28~30)、青磁碗(25・27)、青磁皿(26)、須恵器捏鉢(41)、瓦器土釜(42・43)、石

鍋(44)などがある。

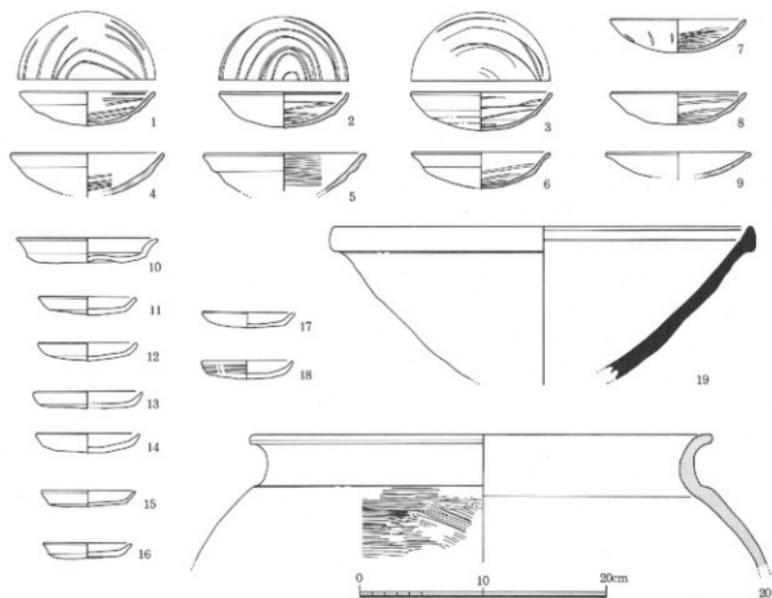
1の口縁部は、外方に真っすぐ伸び、端部を丸くおさめる。底面には低い断面三角形の高台を貼りつけている。体部内面には圏線状暗文が明瞭に施されていた。体部外面には指頭痕が遺存している。重ね焼きの痕跡もみられる。2の体部内面には横方向、底部内面には平行暗文が施されている。体部外面には指頭痕が明瞭に遺存していた。7の高台は小さく、低く貼り付けられている。体部内面には圏線状暗文が施されている。体部外面には指頭痕が明瞭に遺存していた。9の口縁部は、強いヨコナデによって外反し、低くて小さな高台が貼り付けられている。体部内面には螺旋状暗文が施されている。11~14の口縁部は、強いヨコナデによって外反し端部は丸くおさめる。体部内面は螺旋状暗文が若干確認される。体部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。口径は縮小し、高台は消失している。17の口縁部は丁寧なヨコナデを施す。底部外面は不調整及びユビオサエ。18の口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさまる。底部には断面三角形の高台を貼り付けている。体部内面には圏線状の暗文が施されている。口縁部から体部外面にかけて黒斑が遺存している。19の口縁部は外上方に伸び、端部は丸くおさまる。底部内面は平行暗文、口縁部内面は横方向にヘラミガキを施す。20の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は丸くおさめる。25の口縁部は欠失しているが、底部には断面逆台形の高台を貼りつけている。体部外面には蓮弁文がみられる。26は大皿の底部の破片である。底部には浅い断面台形の高台が貼りつけられている。底部内面には劃花文がみられる。38の口縁部は外反し、端部は尖り気味である。底部は上げ底。41の口縁部は断面三角形を呈し、下方に垂下する。口縁部内外面は回転ナデ調整。42の口縁部は内傾し、強いヨコナデによって段をもち、端部内側に面を有する。肩部には水平に鈔をめぐらす。鈔端部は丸くおさまる。体部内外面はナデ調整。体部外面には煤が付着している。43の口縁部も内傾し、強いヨコナデによって三段に分かたれている。端部は内側にやや肥厚する。肩部にはやや上向きに鈔をめぐらし、端部はやや尖り気味。体部外面には横方向のヘラケズリが遺存している。体部には煤が付着している。44は滑石製の石鍋である。口縁部直下に削りだした鈔をめぐらす。口縁部径は約31.3cm、鈔部径34.4cmをはかる大型品である。口縁端部は約1.1cmの平坦面を有する。鈔断面は方形を呈する。口縁部及び体部外面には縦方向の鉄ノミの削り痕が良好に遺存している。内面は横方向に丁寧な研磨が為されている。45の口端部は強いヨコナデによって外反し、端部を丸くおさめる。体部は浅い椀形の丸底を呈し、高台は消失している。体部内面には螺旋状暗文やヘラミガキが施されている。また、体部外面には重ね焼きの痕跡が良好に遺存している。これらの土器の年代については、13世紀前葉(Ⅲ-3)から14世紀前葉(Ⅳ-4)頃と考えられる。

#### ⑨土坑7出土遺物(第51図)

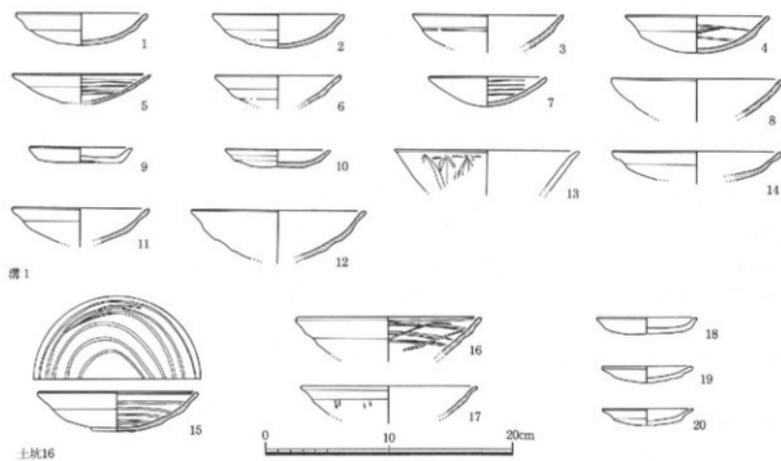
瓦器椀(1~9)、土師器皿(10)、土師器小皿(11~18)、須恵器捏鉢(19)、瓦質大甕(20)などが出土している。1~3、7の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は丸くおさめる。体部は浅い椀形の丸底を呈し、高台は消失している。体部内面には螺旋状暗文が施されている。また、体部外面には重ね焼きの痕跡が良好に遺存している。なお、7の体部外面には約3cm間隔でヘラオサエがみられる。19の口端部は断面三角形を呈し、端部は丸くおさまる。体部内外面は強いヨコナデを施す。体部内面下方はかなり摩擦している。東播系の須恵器であろう。20の口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。体部外面は水平方向及び右下がりの平行タキがみられる。体部内面はナデ調整。体部外面には鉄分が多く付着している。これらの土器の年代については、13世紀末葉(Ⅳ-3)から14世紀前葉(Ⅳ-4)頃と考えられる。



第50圖 土坑 6 出土遺物(1/4)



第51図 土坑7出土遺物(1/4)



第52図 溝1及び土坑16出土遺物(1/4)

### ⑨溝1及び土坑16出土遺物(第52図)

瓦器碗(1~8・11・12・14・16・17)、瓦器小皿(10・19・20)、青磁碗(13)、土師器小皿(9・18)などがある。1と4の口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。体部は浅い碗形の丸底を呈し、高台は消失している。体部内面には螺旋状暗文の痕跡がみられる。体部外面には指頭痕が残存する。5の口縁部は外反し、端部内面には沈線がある。また、体部内面には圏線状暗文が施されている。大和型であろうか。15の口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部には形骸化した高台を貼りつけている。体部内面は螺旋状暗文が施されている。13の青磁碗の体部外面には整美な片影蓮弁文が施されている。器内は薄く、シャープで軸上がりもよい。

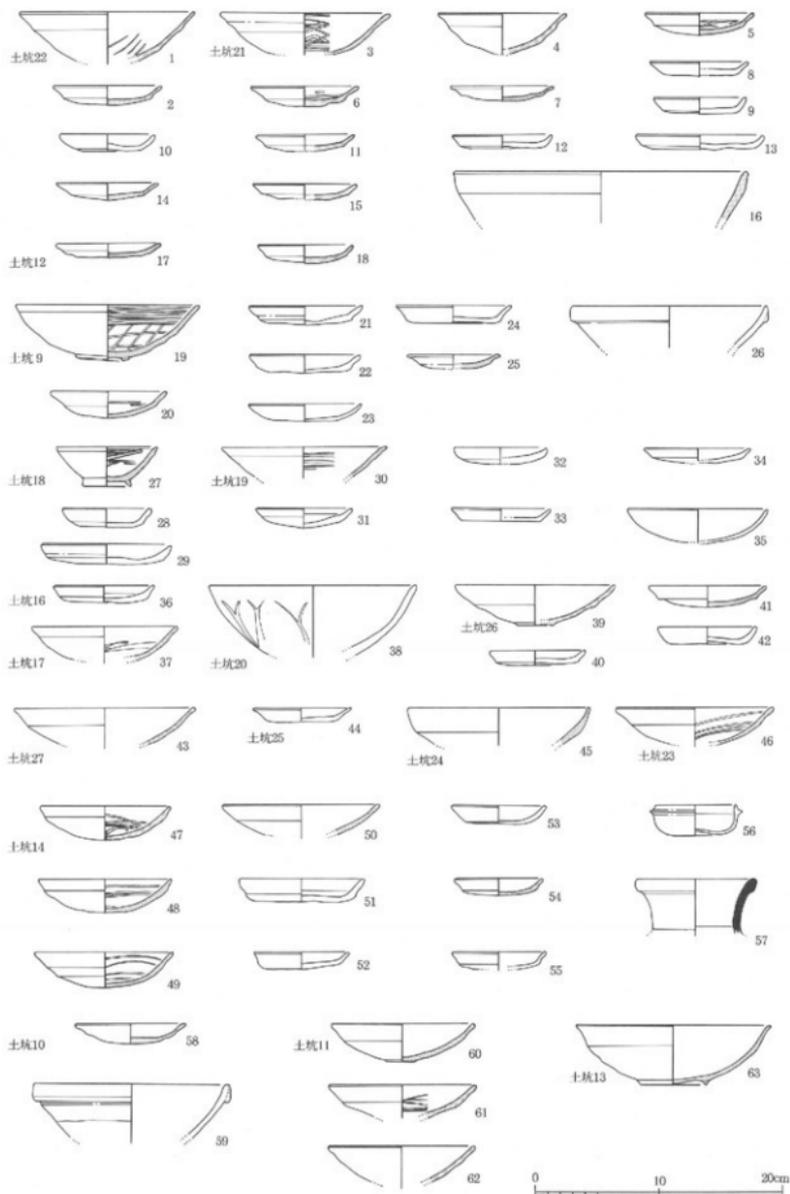
これらの土器の年代については、溝1が13世紀末葉(Ⅳ-3)から14世紀初頭(Ⅳ-4)頃、土坑16が13世紀後葉(Ⅳ-2)頃と考えられる。

### ⑩その他の土坑の出土遺物(第53図)

瓦器碗(1・3・4・16・19・30・37・39・43・45~50・60~63)、瓦器皿(2・5~7・11・14・15・17・18・20・25・41・54・58)、小型の瓦器碗(27)、土師器小皿(8~10・12・21~24・28・31~34・36・40・42・44・52・53・55)、土師器皿(13・29・51)、土師器杯(35)、土師器小型杯(56)、白磁碗(26・59)、青磁碗(38)、須恵器短頸壺(57)などがある。

1は底部を欠失しているが、口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は丸くおさめる。底部内面には平行暗文が施されている。体部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。3の体部内面には圏線状暗文が施されている。16は大型の瓦器鉢であろう。口縁部は強いヨコナデを施し、端部は丸くおさめる。器内は厚い。体部内面には圏線状暗文が遺存している。19の口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部には断面方形の高台が貼りつけられている。底部内面には格子状暗文、体部内面には圏線状暗文が施されている。体部外面には明瞭に指頭痕が遺存している。46の口縁部は強いヨコナデによって外反し、体部内面には螺旋状暗文が施されている。47~49の口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。体部は浅い碗形の丸底を呈し、高台は消失している。体部内面には螺旋状暗文の痕跡がみられる。体部外面には指頭痕が遺存している。48と49には重ね焼きの痕跡がみられる。5と20の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部を丸くおさめる。体部内面には螺旋状暗文が施されている。20の体部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。27の口縁部は外反し、端部は内側に面をもつ。底部には断面逆台形の高台を貼りつけている。体部内面には圏線状暗文が施されている。瓦器碗のミニチュアサイズ。51の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部を丸くおさめる。体部内面はナデ。底部外面は不調整。胎土には金雲母が多く含まれている。56の口縁部は短く立ち上がり、端部は尖り気味である。受部は短く水平に張り出し、端部は尖る。体部はやや丸みを帯び、底部にいたる。底部は上げ底になっている。口縁部内外面はヨコナデ、それ以外はナデ。胎土は精良で、器内は薄く仕上げられている。蓋は出土していないが、合子状の化粧道具であろうか。26と59は玉縁状の口縁部をもち、釉調も良好である。なお、体部外面下方は釉を施していない。38は大型の青磁碗である。体部外面には、大柄な片影蓮弁文が施されている。釉調は良好である。57は口頸部の破片で、体部との接合部で切り離されている。口縁端部は折り返され、外側に肥厚する。

各土坑の年代については、土坑18は12世紀前葉(Ⅱ-1)、土坑9・10・13は12世紀中葉(Ⅱ-3)頃、土坑21・22が13世紀前葉(Ⅲ-3)頃、土坑11・19・26・27は13世紀中葉(Ⅳ-1)、土坑16・17は13世紀末葉(Ⅳ-3)、土坑14は14世紀初頭(Ⅳ-4)頃、土坑20の青磁は14世紀前葉頃に比定されるものと考え



第53図 その他の土坑出土遺物(1/4)

られる。

#### ⑨河川跡上層出土遺物(第54図)

須恵器広口壺(1)、瓦器碗(2)、瓦器皿(3)、石帯(4)、瓦器土釜(5・7・8・11・12・14~17)、土師器土釜(6・13)、土師器甕(9)、漆焼甕(10)などがある。

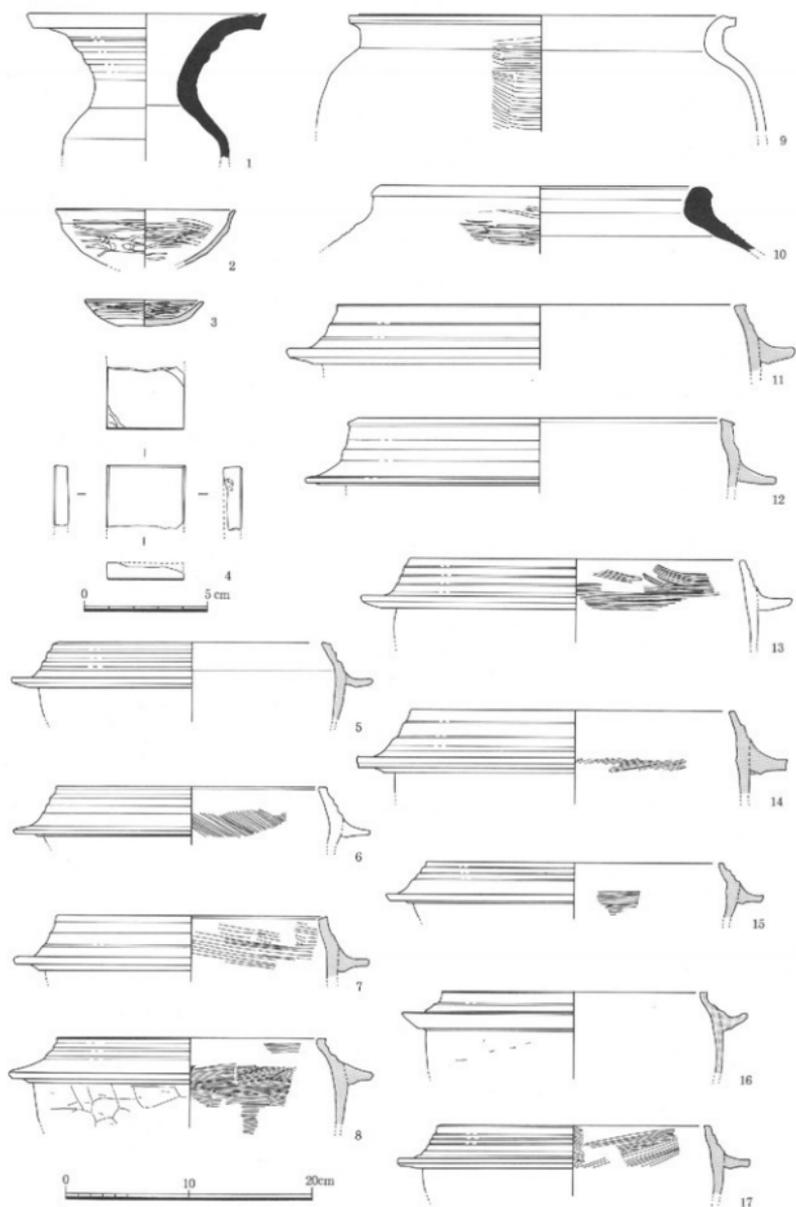
1の口頸部は大きく外反する。口縁部は外上方に立ち上がり、端部をさらに摘みあげる。肩は張っている。口縁部及び体部内外面は回転ナデ調整。おそらく花瓶であろう。2の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は内側に面をもつ。底部内面は平行暗文、体部内外面は横方向のヘラミガキを施している。3の口縁部も強いヨコナデによって外反し、端部は内側に面をもつ。底部内面には平行暗文、体部内外面は横方向に丁寧なヘラミガキを施している。4は一辺約3.1cm、厚さ0.7cmの石帯(巡方)と考えられる。片面が剝離しているため、潜穴の有無はわからない。石材は明確ではないが、表面は乳白色を呈している。6の口縁部は内傾し、強いヨコナデによって四段に分かたれている。端部は平坦で、内側に沈線を有する。肩には水平に鈔をめぐらし、端部は角張り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は右下りのハケ目調整。8の口縁部も内傾し、強いヨコナデによって四段に分かたれている。肩には水平な鈔をめぐらし、端部は角張り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は水平及び左下りにハケ目を施す。体部外面は横方向のヘラケズリ。9の口縁部は外反する。口縁端部は垂直な面をもつ。内面には凹線を施している。体部外面には右下り及び水平方向のタタキ目が遺存している。口縁部内外面、体部内面はナデ。10の口縁部は真っすぐに立ち上がり、玉縁状の端部をもつ。体部外面には横方向のタタキ。14の口縁部は内傾し、強いヨコナデによって三段に分かたれている。肩には水平に鈔をめぐらし、端部は角張り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は左下りの細かいハケ目を施す。体部外面には煤が付着している。16の口縁部も内傾し、端部は面をもち、強いヨコナデによって三段に分かたれている。肩部には水平に鈔をめぐらし、端部は上方に反っている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は水平方向の細かいハケ目を施し、体部外面はヘラケズリ。なお、体部外面には煤が付着している。

これらの土器の年代については、12世紀後葉(II-3)頃であろうか。なお土釜については14世紀中葉頃であろう。

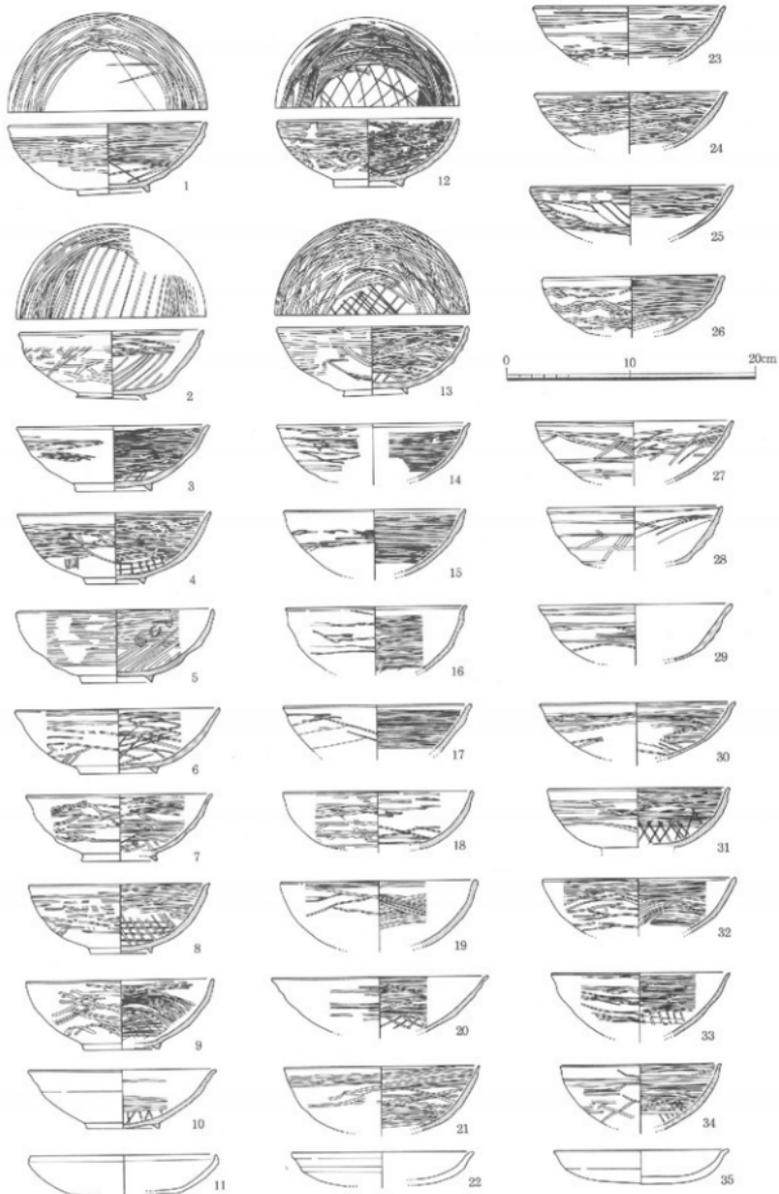
#### ⑨河川跡下層出土遺物(第55・56図)

瓦器碗(55-1~55-10・55-12~55-21・55-23~55-34)、土師器杯(11・22・35)、瓦器高台付き皿(56-1・56-2・56-5)、瓦器皿(56-3・56-4・56-6~56-10)、土師器皿(56-11~56-25)、須恵器片口鉢(27)、瓦器土釜(28・29・31・32)、土師器土釜(30)、雁股式鉄鎌(26)などがある。

55-1~55-3・55-7の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は内側に面をもつ。底部は断面逆台形の高台を貼りつけている。底部内面には平行暗文、体部内外面には細かい横方向のヘラミガキを施している。胎土も緻密で焼成も良好である。55-2~55-3の体部外面には重ね焼き痕跡がみられる。55-4も同様な形態ではあるが、底部内面には格子状暗文が施されている。体部外面には煤が付着している。55-5の内面は口縁部近くまで平行暗文がみられる。底部には断面三角形の高台が貼りつけられている。55-8も口縁部が強いヨコナデによって外反し、端部は内側に傾斜する面をもつ。底部には、断面三角形の高台を貼りつけている。底部内面には斜格子状の暗文、体部内外面には細かい横方向のヘラミガキを施している。胎土も緻密で焼成も良好、色調は銀色を呈している。55-9の口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部には断面三角形の高台を貼りつける。底部内面には格



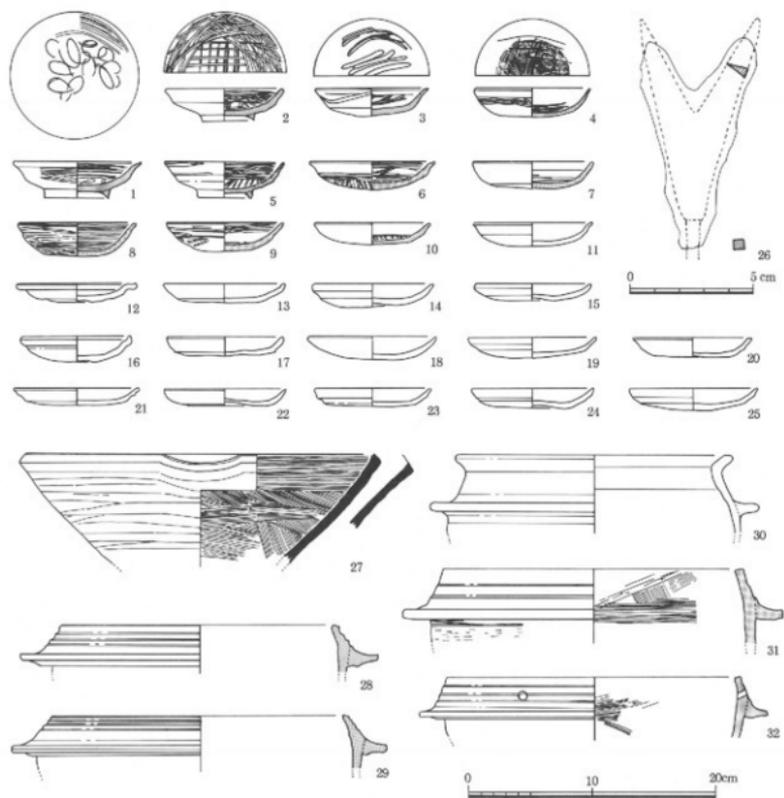
第54図 河川跡上層出土遺物(1/4・1/2)



第55図 河川跡下層出土遺物①(1/4)

子状暗文を施し、体部内外面は細かなヘラミガキで仕上げている。55-12・55-13の口縁部も内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。底部には断面逆台形の高台を貼りつけている。底部内面には格子状暗文、口縁部及び体部内外面には細かい横方向のヘラミガキを施している。55-14・55-15・55-17の口縁部は僅かに外反し、端部内側に沈線をもつ。体部外面には間隔の広い圏線状暗文があり、内面には等間隔に圏線状暗文を施す。器内は薄くシャープな仕上がりである。55-16の形態・調整も同様であるが、底部内面には平行暗文がみられる。55-14～55-17はいわゆる大和型の瓦器碗である。55-24の口縁部は僅かに外反し、端部は揃みあげる。口縁部内外面は横方向のヘラミガキを施している。55-25は口縁部外面に規則的な指頭痕が遺存する。内外面は横方向のヘラミガキを施している。55-26の口縁部は内湾し、端部は内側に面をもつ。底部内面には平行暗文、体部内外面には細かい横方向のヘラミガキを施している。胎土も緻密で焼成も良好である。55-31の口縁部は僅かに外湾し、端部は内側に面をもつ。底部内面には斜格子状の暗文、それ以外は横方向の細かなヘラミガキを施している。器内は分厚い。なお、底部には高台の割がれた痕跡が遺存する。55-34の口縁部は僅かに外反し、端部は内側に面をもつ。椀部は深い。底部には平行暗文、それ以外は横方向の細かなヘラミガキを施している。底部には高台の割がれた痕跡が遺存する。55-22の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部は丸くおさめる。内外面はナデ。金雲母を多く含む。

56-1の口縁部は外反し、端部内側に沈線をめぐらす。底部には断面三角形の高台を貼りつけている。底部内面には連結輪状の暗文を、体部内外面には横方向の丁寧なヘラミガキを施している。胎土も緻密で、焼成も良好である。大和型の瓦器である。56-2・56-5の口縁部は強いヨコナデによって「く」の字状に外反し、端部内側に面をもつ。56-2の底部には断面三角形、56-5の底部には断面逆台形の高台を貼りつけている。56-2の底部内面には格子状暗文、56-5には平行暗文、体部内面には横方向のヘラミガキを施している。56-3の口縁部は外反し、端部内側に面をもつ。底部内面には平行暗文、それ以外は丁寧なヘラミガキを施している。底部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。56-4の口縁部内外面は強いヨコナデによって外反し、端部内側に面をもつ。底部内面には斜格子状暗文、底部外面以外は丁寧なヘラミガキを施している。体部内面には重ね焼きの痕跡がみられる。56-6の口縁部は外反し、端部内側に沈線をめぐらす。底部内側には輪状の暗文を、体部内外面には横方向の丁寧なヘラミガキを施している。胎土も緻密で、焼成も良好である。大和型の瓦器である。56-8は、皿というより椀であろう。口縁部は外方に立ち上がり、端部は尖り気味である。底部内面には格子状暗文、体部内外面はヘラミガキを施している。56-9の口縁部は強いヨコナデによって体部との境に段を設ける。底部内外面には平行暗文、それ以外は丁寧なヘラミガキを施している。胎土も緻密で、焼成も良好である。56-12はいわゆる「て」の字状口縁であり、端部は尖り気味である。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ。体部外面には指頭痕が遺存し、底部はやや上げ底気味である。金雲母を多く含み、焼成も良好である。56-16も同様な「て」の字状口縁であり、端部は尖り気味である。体部外面には「切り込み円板技法」の痕跡がみられる。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ。体部外面には指頭痕が遺存している。金雲母を多く含み、焼成も良好である。56-27の口縁部は断面三角形を呈し、端部は尖り気味である。口縁部には片口を有する。口縁部内面及び体部外面は横方向の強いカキ目状の回転ナデ、体部内面は右下り及び横方向のナデが遺存している。口縁部周辺には自然釉がみられる。おそらく、東播系の須恵器片口鉢であろう。56-28の口縁部は短く内傾し、強いヨコナデによって三段に分かたれている。端部は平坦面をもつ。肩部にはやや上方に反る罫をめぐらし、その端部は尖り気味である。口縁部内外



第56図 河川跡下層出土遺物②(1/4・1/2)

面はヨコナデ。56-32の口縁部は「く」の字状に外反し、端部を丸くおさめる。肩部には水平な鈎をめぐらし、端部は丸い。口縁部内外面はヨコナデ、体部はナデか。口縁部及び体部外面には煤が付着している。56-32の口縁部は短く内傾し、強いヨコナデによって四段に分かたれている。端部は平坦面をもつ。肩部にはやや上方に反る鈎を水平にめぐらし、その端部は角張る。口縁部中程には径約0.6cmの円孔が穿たれている。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面には左下がりのハケ目が遺存し、体部外面には黒斑がみられる。56-26は雁股式鉄鎌の破片である。全体的にかなり錆に覆われている。全長8.5cm以上、刃部幅4.8cm以上をはかる。刃部の断面は三角形で、幅約0.9cm、厚さ約0.45cmをはかる。茎部の断面は長方形で、厚さ約0.5cm、幅約0.45cmをはかる。

なお、遺物の年代については、瓦器碗が12世紀前葉～中葉(II-1～II-2)、瓦器土釜などが14世紀中葉頃と考えられ、大きく二分される。(上林)

### ○包含層出土遺物の地区標記

包含層出土の遺物の取り上げにあたっては、第57図に示した地区割を使用している。後記する包含層及び遺構面直上出土遺物に冠しているローマ数字とアルファベットを組み合わせた地区標記については、当該図を参照されたい。

地区割は、基本的に現状の雑段状に開発された耕作面を基準にして設定しており、最も西端に位置する最下段の耕作面をⅠ区、その上段の北端の東西に細長い耕作面をⅡ区、Ⅱ区の南側をⅢ区、河川跡の検出された太井川の開折谷に接した地区をⅣ区、最も東端の耕作面の北半部分をⅤ区、南半部分をⅥ区としている。さらにⅢ区は断面観察のために設けた畦畔の北側の部分をⅢ-N区、南側をⅢ-S区に分割して北西部分をⅢ-NW区、北東部分をⅢ-NE区、南西部分をⅢ-SW区、南東部分をⅢ-SE区に分割している。またⅠ区とⅤ区についてはⅠ-NW区、Ⅰ-NE区、Ⅰ-SW区、Ⅰ-SE区、Ⅴ-NW区、Ⅴ-NE区、Ⅴ-SW区、Ⅴ-SE区に分割した。

包含層の堆積状況は、各地区毎にまちまちな状況であった。Ⅰ区では特に北半部を中心にかなり厚い包含層堆積が認められ、遺物も比較的多量に出土している。しかしⅢ区やⅤ区・Ⅵ区の平坦部中央付近では、表土である耕作土と床土の直下から地山が検出され、ほとんど包含層らしい堆積は認められなかった。かろうじて各地区の縁辺部分においては、旧地形の傾斜が看取され、その部分からまとまった遺物の出土が認められた。特にⅡ区やⅢ-S区の南端部分、Ⅴ-S区東端、Ⅴ-NE区南西端部分では、遺構面の上面からまとまった量の遺物が確認され、一括資料として貴重なものである。

これらの遺構面直上出土遺物には、先に示したⅣ区の河川跡出土遺物と同時期に属する12世紀代の遺物も相当数含まれている。両者共、出土遺物の器壁のローリングはほとんど認められず、本遺跡においては古相に属するこれら遺物も、本来はこの尾根上に存在した集落から供給されたものであろうと推定することができる。

(池田)



第57図 植田遺跡包含層地区割図(1/800)

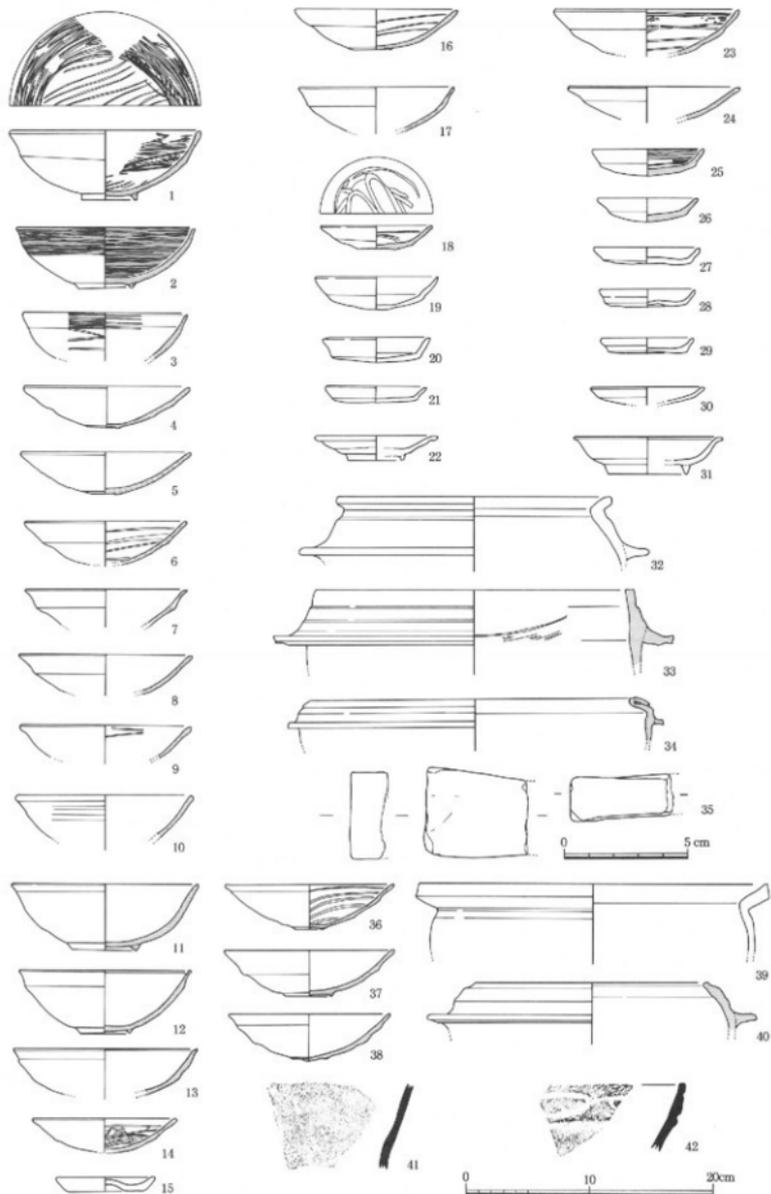
#### ㊦遺構面直上出土遺物(第58図)

瓦器碗(1・14・16・17・23・24・36~38)、瓦器皿(18・25・26)、土師器小皿(15・19~21・27~30)、土師器土釜(32)、瓦器土釜(33・34・40)、土師器鍋(39)、磁器(22・31)、砥石(35)、縄紋土器(41・42)などがある。

1の口縁部は大きく外反し、端部は尖り気味である。底部には断面三角形の高台を貼りつけている。底部内面には平行暗文、体部内外面には横方向のヘラミガキを施す。体部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。12世紀中~後葉(Ⅱ-3)。2の口縁部は外湾し、端部を上方に摘みあげる。さらに、端部内側には沈線をめぐらしている。底部には断面逆台形の高台を貼りつけている。口縁部内外面及び体部内面には水平で密なヘラミガキを施す。なお、体部外面には指頭痕が遺存している。大和型の瓦器碗である。12世紀中~後葉(Ⅲ-A古)。6の口縁部は外上方に伸び、端部を丸くおさめる。底部が消失するタイプであろう。体部内面には螺旋状暗文が施されている。14世紀末葉(Ⅳ-3)。12・13の口縁部は外反し、端部を上方に摘みあげる。さらに、端部内側には沈線をめぐらしている。12の底部には断面三角形の高台を貼りつけている。高台の平面は円形ではなく、楕円形を呈している。口縁部内外面及び体部内面には水平で密なヘラミガキを施している。なお、体部外面には指頭痕が遺存している。大和型の瓦器碗である。12世紀中~後葉(Ⅲ-A古)。14の口縁部は外上方に伸び、端部を丸くおさめる。底部を消失するタイプであろう。体部内面には螺旋状暗文が施されている。また、体部外面には指頭痕が遺存している。14世紀末葉(Ⅳ-3)。18・25の口縁部は強いヨコナデによって体部との境に段をもつ。底部内面の暗文は18が輪状、25が平行である。25の口縁部内外面及び体部外面には密なヘラミガキを施している。底部外面には指頭痕が遺存している。36の口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部には形骸化した高台が貼りつけられている。体部内面には螺旋状暗文、体部外面には指頭痕が遺存している。13世紀中葉(Ⅳ-2)。32の口縁部は「く」の字状に外反し、端部を丸くおさめる。肩部には水平な罫をめぐらしている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面には煤が付着している。12世紀初頭。34は口縁部を外側に折り返すもので、端部は尖り気味である。口頸部はヨコナデにより段を設けている。肩部には水平方向に短い罫をめぐらし、端部は角張る。器内はうすく仕上げられている。40の口縁部は強いヨコナデによって内傾し、端部内側に面をもつ。罫はやや反り気味にめぐらされている。口縁部内外面はヨコナデ調整。39の口縁部は強いヨコナデによって外反し端部は外傾する面をもつ。体部はナデ調整。体部外面には煤が付着している。15の口縁部は外反する。底面は上げ底である。41は縄紋土器の深鉢の底部近くの破片である。調整は明確ではないが、胎土には角閃石や金雲母が多く含まれている。生駒西麓産の土器であろう。42は緑帯文土器の深鉢の口縁部片である。口縁部に楕円形の沈線の文様が連続している。口縁端部や紋様帯には明瞭に縄紋が遺存している。また、口縁部内面には煤が付着している。色調は乳赤色を呈している。北白川上層2式(縄紋時代後期前葉)に属するものであろう。35は砥石の破片で、片面は割がれているが、別の片面には擦痕が遺存している。

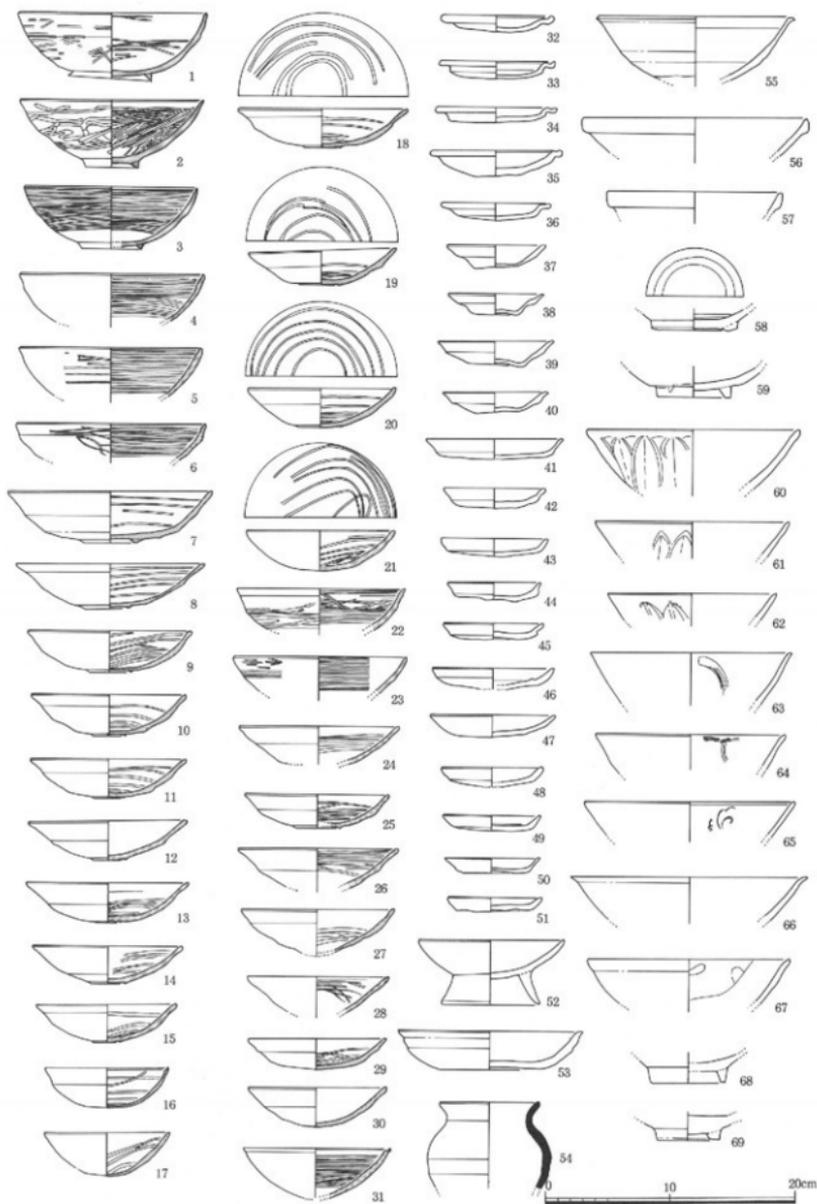
#### ㊧包含層出土遺物(第59・60図)

瓦器碗(59-1~59-31)、土師器小皿(59-32~59-51)、土師器台付杯(59-52)、土師器皿(59-53)、須恵器短頸壺(59-54)、白磁碗(59-55~59-59)、青磁碗(59-60~59-69)、淡焼壺(60-1)、瓦質埴鉢(60-2)、須恵器埴鉢(60-3)、土師器壺(60-4・60-18)、瓦器土釜(60-5・60-7・60-11・60-13・60-17)、土師器土釜(60-6、60-8~60-10・60-12・60-14~60-16)、北宋銭(60-19)などが出土している。

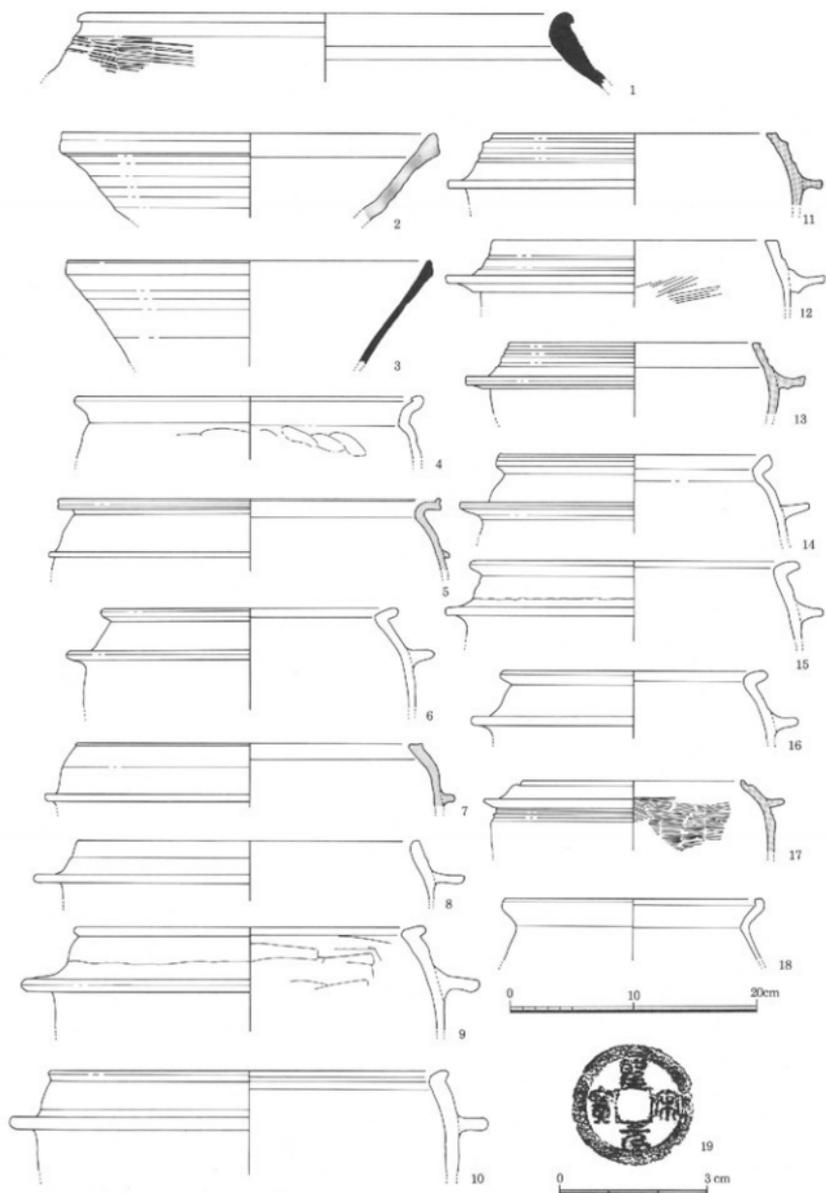


第58圖 遺構面直上出土遺物(1/4・1/2)

59-1の口縁部は内湾し、端部は内側に面をもつ。底部には大型の断面三角形の高台を貼りつけている。体部内外面は横方向のヘラミガキを施す。12世紀中葉(II-2)。59-3の口縁部は内湾し、端部を上方に摘まみ上げる。端部内側には沈線をめぐらしている。底部には断面三角形の高台を貼りつけている。口縁部及び体部内外面には水平で密なヘラミガキを施す。大和型の瓦器碗である。12世紀中～後葉(III-A古)。59-4～59-6、59-31の口縁部は内湾し、端部を上方に摘まみあげる。さらに、端部内側には沈線をめぐらしている。口縁部及び体部内外面には水平で密なヘラミガキを施す。大和型の瓦器碗である。59-9～59-11の口縁部は強いヨコナデによって外反し、端部を丸くおさめる。底部には形骸化した高台を貼りつけている。体部内面には螺旋状暗文が施されている。体部外面には指頭痕が遺存している。13世紀前葉(III-3)。59-16は深い碗状の体部をもつ。口縁部は内湾し、端部は内側に沈線をめぐらしている。体部内面には螺旋状暗文が施されている。高台は消失している。大和型の瓦器碗である。14世紀初頭(IV-A)。59-17の体部も深い碗状を呈する。体部内面には螺旋状暗文が施されている。高台は消失している。59-18の口縁部は外反する。底部には形骸化した高台を貼りつけている。体部外面には指頭痕がみられ、内面には圈線状暗文が施されている。59-19及び59-20も同様な形態であるが、口径は縮小している。体部内面には螺旋状暗文が施されている。59-21・29の口縁部は外反する。体部内面には螺旋状暗文、体部外面には指頭痕が遺存している。すでに高台は消失している。なお体部外面には重ね焼きの痕跡がみられる。59-32～59-34はいわゆる「て」の字状口縁をもつ小皿である。内外面とも火をうけている。三胴体とも近似した調整・形態である。59-37～59-39は深身で内型つくり的な成形法を用いる。口縁部は屈曲して外方に大きく開く小皿である。底部は上げ底を呈している。口縁部内外面はヨコナデ調整で、体部及び底部外面はユビオサエによって整形し、内面はナデで仕上げている。14世紀中～後葉。59-52の口縁部は外上方に伸びる。台部は外側に踏ん張っている。ヨコナデ調整を施す。紀伊系の土師器であろう。59-54の口縁部は外反し、口縁部内外面は回転ナデ。体部外面は回転ヘラケズリ。体部外面には煤が付着している。59-55の口縁部は外上方に真っすぐ伸び、端部を水平に外側へ引っ張り出した面を有する。口縁部内面と底部内面近くに各々1条の沈線をめぐらす。59-60の口縁部は外反する。体部には整美な蓮弁文を削りだしている。釉調もよく、シャープな仕上がりである。60-1の口縁部は外側に折り返して丸くおさめる。体部外面は平行タタキ、内面は左下がりのヘラオサエがみられる。60-2・60-3の口縁部は断面三角形を呈し、端部は丸味をおびる。60-2の口縁部及び体部内外面は回転ナデ。口縁部外面には重ね焼きの痕跡がある。東播系の須恵器であろう。60-5の口縁部は「く」の字状に外反し、端部は内側に肥厚する。肩部には短い罫を水平にめぐらす。口縁部及び体部外面には煤が付着している。体部内面はナデ。大和型の土釜である。60-17の口縁部は内湾し、端部をさらに摘まみ上げる。肩部には上反りの短い罫を水平にめぐらす。罫直下は強いヨコナデによって凹線がめぐる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面には右下がり及び水平方向のハケ目が遺存している。体部外面には煤が付着している。60-18の口縁部は外湾し、端部は肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ。体部内面は板ナデ。60-19は北宋の貨幣である「聖宋元寶」である。径約2.4cm、中央に約0.6cmの方孔を穿っている。鋳上りはあまりよくない。北宋の建中靖国元年(1101)に初めて鋳造された。幣文には篆書と行書の2種類からなり、それぞれ小平、當二銅、鉄銭がある。非常に精巧につくられており、版の数も相当多い。小平銭には隸書のものがあるが、数量は少ない。また當五銭は崇寧元年から2年(1102～1104)にかけて鋳造された。(陳紹文主編『経済大辞典 中国史巻』上海辞書出版社1993を参考。)



第59圖 包舍層出土遺物①(1/4)



第60圖 包含層出土遺物②(1/4・1/1)

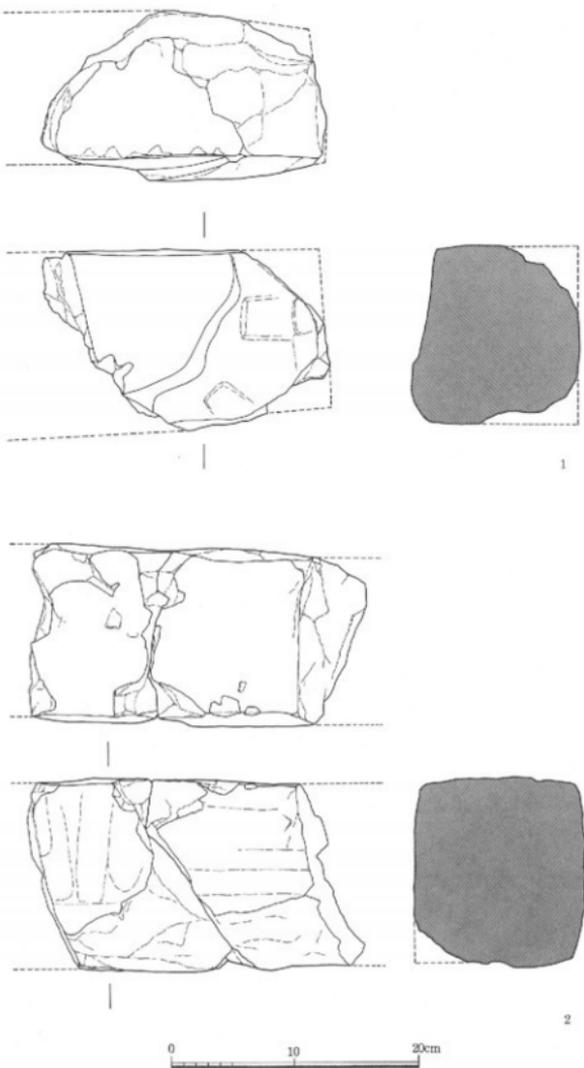
◎凝灰岩切石

(第61図～第65図)

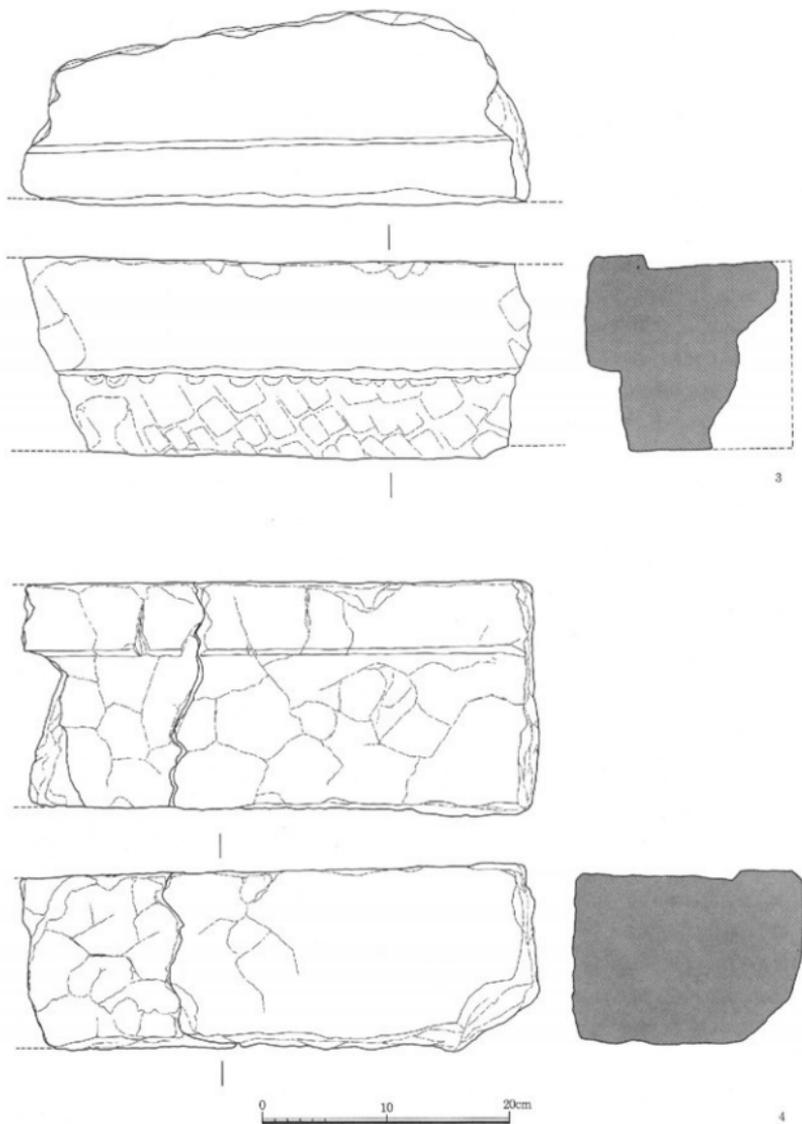
土坑や井戸、朱石遺構などから、凝灰岩切石の長方形柱状の破片が17個体以上出土している。おそらく、方形柱を接続して掘立柱建物や板材をのせる基礎部分に使用されたものであろう。1は長さ22.5cm以上、幅約13.5cm、高さ約15cm。片側面が受状に削りだされている。上部と側面が黒変。2は長さ26.5cm以上、幅約15.7cm、高さ約14.8cm。上面にノミの痕跡がある。底面を除く三方が黒変。

3は長さ41cm以上、幅約16cm、高さ約15.5cm。上面と側面に削りこみがある。上下面が黒変。4は長さ41cm以上、幅約19.5cm、高さ約14.5cm、上面にL字形の削りこみがある。上面が黒変。5は長さ34cm以上、幅約17cm、高さ約20cm、三方が黒変。6は長さ38cm以上、幅約17cm、高さ約14cm。上面に削りこみ。上下が黒変。7は長さ33cm以上、幅約16.5cm、高さ14cm。側面に削りこみがある。全体に黒変。8は長さ23cm以上、幅約20.5cm、高さ約

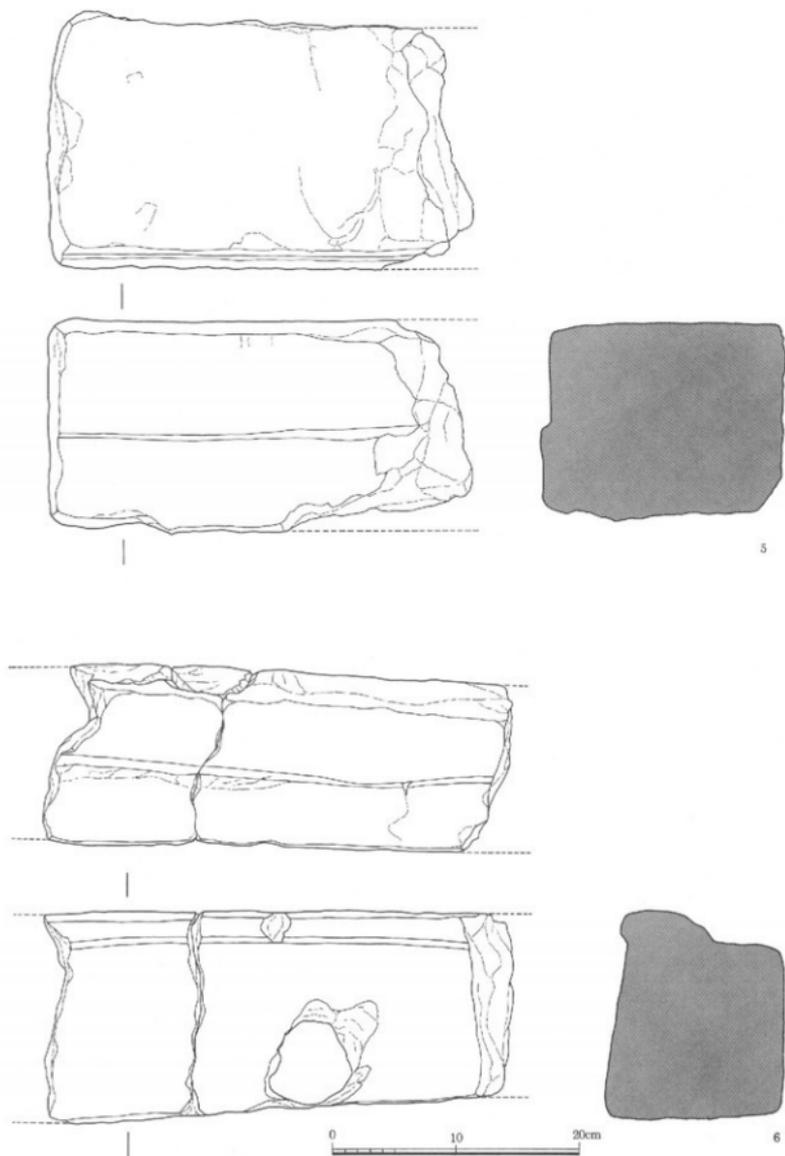
21cm。上面にノミ痕あり。側面は黒変。9は長さ10.5cm以上、幅12cm以上、高さ19.3cm。上面にL字形の削りこみがある。全体が黒変。10は長さ12cm以上、幅約19cm、高さ約15cm。三方が黒変。(上林)



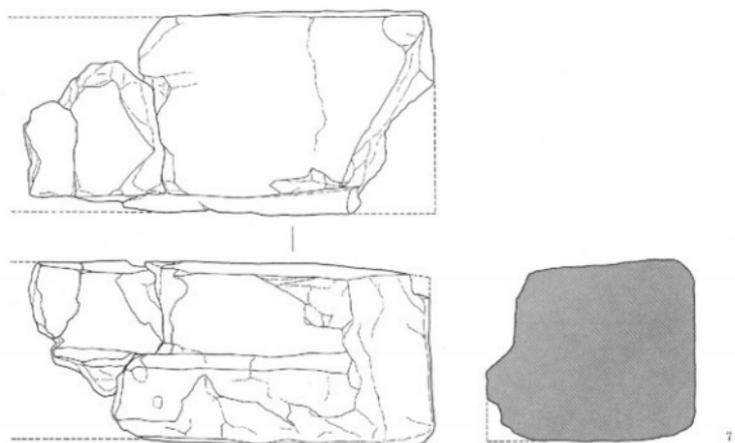
第61図 凝灰岩切石実測図①(1/4)



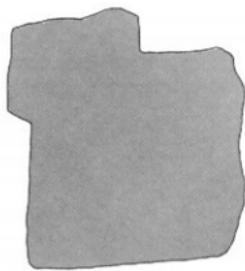
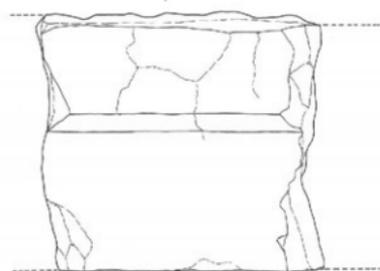
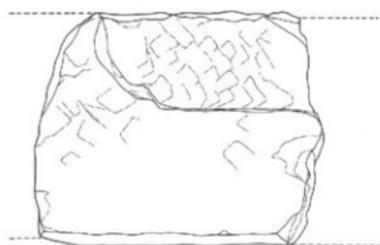
第62图 凝灰岩切石尖刃器②(1/4)



第63图 凝灰岩切石实测图③(1/4)



7



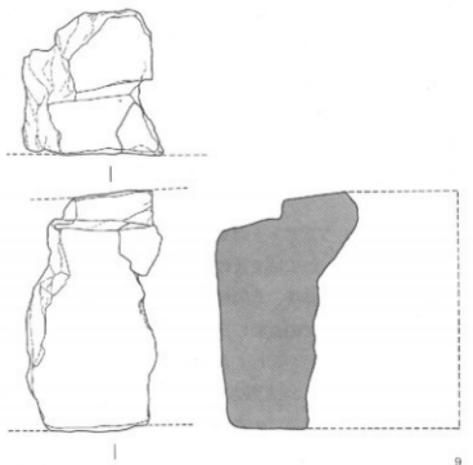
8

0 10 20cm

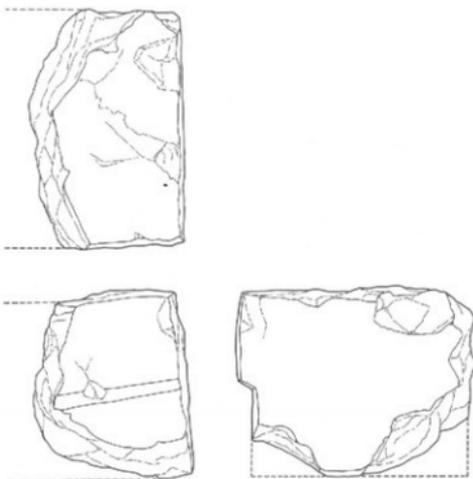
第64圖 凝灰岩切片実測図④(1/4)

#### 第4項 小結

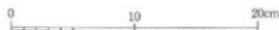
遺構 今回の調査で検出された主要な遺構には、掘立柱建物6棟、井戸5基、集石遺構3ヶ所、その他、溝・土坑・ピット多数がある。それらは集落内に一様に分布するのではなく、遺構が集中する部分空白の部分が見られる。集落の北西端部、I区の北半には、掘立柱建物4棟や井戸3基、集石遺構2ヶ所、その他、土坑・ピット多数がある。これらの中心をなすものは建物1で、総柱の2×4間で面積約42㎡を測り、今回検出した中で最大の建物である。この建物の北東に小規模な建物3棟、井戸3基、土坑などが配される。これらの遺構からは、12世紀中頃から13世紀中頃の遺物が出土した。これらの遺構群の約13m南、II区の西辺沿いに掘立柱建物2棟があり、その周辺に土坑3・4、その他土坑・ピットが若干存在する。建物5は2×4間の総柱で、面積は約41㎡で建物1に次ぐ規模をもち周囲には溝がめぐる。建物周辺の土坑から出土した遺物は、14世紀前半のものが多く、東辺には集石遺構3、井戸4があり、その北西に平行して走る溝群やピット群がある。II区の中央部は遺構はほとんどなく、水田造成に伴い削平されたものとみられる。集落の東南部、V・VI区には中央部に不定形の土坑6や土坑7があり、その周辺に土坑・ピットが多く存在する。ピットは幾条かの列を成す部分が看取できるが、建物を復元することは



9



10



第65図 凝灰岩切石実測図⑤(1/4)

できなかった。この地区では12世紀前半から14世紀前半の遺物が出土している。さて検出した遺構の分布状態は上記の通りであるが、集落廃絶後の水田造成により削平され、特にⅡ区の中央部は遺構がない空白部になっていて、今回検出した小規模な建物は集落の縁辺部に限られる。ここで注目されるのは、集石遺構や井戸などで検出された凝灰岩の建築部材であって、一般集落としては中国青・白磁、常滑焼などの出土が多いことも考え合わせると、中央部に礎石を使用した立派な建物が存在していた可能性が高い。さらに、集落の立地を見ると、自然地形を利用した防御の側面を指摘することができる。また、焼けた凝灰岩や河原石、粘土塊が全域に見られることから、廃絶時には何らかの原因で焼け落ちたことが考えられる。集落の廃絶時期が14世紀中頃であることを考えると、その成立から廃絶に関して南北朝の動乱が絡んでいることは容易に想像できる。

(岩崎)

**遺物** 今回の調査で出土した遺物は供膳具や煮沸具である瓦器・土師器・土釜などの在地土器類、調理具や貯蔵具である東播系須恵器・常滑焼・湊焼・石鍋などの広域流通の土器、奢侈品である白磁碗・青磁碗などの中国製貿易陶磁器類、その他縄紋土器、石帯、鉄鎌、北宋銭、漆器、木製容器、凝灰岩切石などに大別される。河川下層から12世紀前葉～後葉にかけての古相の瓦器(碗・高台付き皿・皿)が一括出土(40個体以上)している。遺存状況は良好であり、遠くから流れてきたものではない。当該期の明確な遺構は検出されていないが、おそらく近接して集落(11～12世紀後葉)が営まれていたのであろう。なお、これらの瓦器はほとんど和泉型に属するが、その内の14%に大和型が認められた。大和に隣接する植田遺跡の地理的立地からすれば当然であろう。瓦器については、当初12世紀中～後葉と14世紀中葉の二つの時期が考えられていた。しかし、土坑18から12世紀前葉(Ⅱ-1)に溯る可能性をもつ小型瓦器碗が1点出土している。これは包含層から1枚出土している北宋銭「聖元永寶」の初鋳時期(12世紀初頭)とも矛盾しない。いずれにしても、各遺構からは確実に12世紀前葉から14世紀中葉(Ⅱ-1～Ⅳ-5)までの各時期の瓦器が出土している。遺物から見ると、集落は存続していたのである。また、河川下層や包含層からは11世紀に溯る「て」の字状口縁をもつ土師器小皿が完形で7枚出土しているのも興味深い。さらに、紀伊系の土師器台付杯が土坑4と包含層から1点づつ出土している。南河内地域と紀州北部との流通を窺わせるものである。土釜は、瓦器と土師器に大別され、ほとんど河内型に属するものであるが、口縁端部が内側に肥厚する大和型の土釜も数個体出土している。瓦器とともに大和との交流を看取することができる。東播系の須恵器片口鉢が各土坑や包含層などから出土し、12世紀末葉と14世紀前葉頃に編年される。常滑焼は体部の破片であり図化できなかったが、若干出土している。石鍋はあまり一般集落では見られない遺物であるが、確実に1点出土している。遠隔地の長崎から流通してきたものであろう。中国製陶磁器の青・白磁は破片ではあるが、比較的多く出土している。白磁碗は12世紀前葉から末葉にかけてのものが主体であり、青磁碗は劃花文や蓮弁文が施される13世紀中葉から14世紀前葉頃の中国龍泉窯系のものが大部分をしめ、陶磁器についても時期が連続している。また、河川跡からは雁股式鉄鎌1点が出土している。鉄鎌は茎部を欠失していたが、武器として使用されたものであろう。なお、同上層からは石帯(巡方)1点が出土している。石帯は古代の衣服制に伴う遺物であるが、本遺跡からは古代の土器は全く出土していない。ただ、本遺跡から直線約400mに位置する尺堂遺跡では、7～8世紀の土器類がまとまって出土しており、関連するものかもしれない。太子町初出土になる縄紋土器が2点出土している。1点は緑帯文土器であり、口縁部外面に沈線で画された紋様帯や縄紋が良好に遺存していた。縄紋後期前葉頃のものであろう。なお、本遺跡周辺では、南西3.7kmに位置する河南町神山遺跡で縄紋後期の土器が一括出土している。

(上林)

表3 植田遺跡出土遺物法量表①

図面 番号	出土遺物 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺物 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁部径	底径	器高					口縁部径	底径	器高	
41-1	V-SW SP-53	瓦器 椀	14.8		4.7 以上		42-20	II 井戸3	瓦器 椀	14.15		3.0 以上	
41-2	I-NE SP-223	瓦器 皿	8.6		1.1		42-21	II 井戸3	瓦器 椀	15.3		3.0 以上	
41-3	I-NE SP-223	土師器 皿	13.2		2.25		42-22	II 井戸3	瓦器 椀	16.5		1.9 以上	
41-4	V-NW SP-245	土師器 土釜	10.0		1.1		42-23	II 井戸3	瓦器 椀	16.25		3.3 以上	
41-5	V-SW SP-53	土師器 土釜	31.2		10.0 以上		42-24	II 井戸3	瓦器 皿	8.5		1.7 以上	
41-6	V-SW SP-247	土師器 土釜	28.6		7.4 以上		42-25	III-NE 井戸-151	土師器 皿	7.3		1.55	
42-1	I-NE 井戸1	瓦器 椀	12.9	3.2	3.2		42-26	II 井戸3	土師器 土釜	28.9	最大径 38.4	7.4 以上	
42-2	I-NE 井戸1	瓦器 椀	12.2		2.8 以上		42-27	III-NE 井戸3	瓦器 土釜	20.1	最大径 27.0	6.1 以上	
42-3	I-NE 井戸1	瓦器 椀	14.5		2.9 以上		42-28	V-SE 井戸5	瓦器 椀	11.2		2.9 以上	
42-4	I-NE 井戸1	瓦器 椀	12.2		2.5 以上		42-29	V-SE 井戸5	土師器 小皿	7.45		1.25	
42-5	I-NE 井戸1	瓦器 椀	12.5		3.0 以上		42-30	V-SE 井戸5	瓦器 小皿	9.4		1.5 以上	
42-6	I-NE 井戸1	瓦器 椀	14.25		3.3 以上		42-31	V-SE 井戸5	土師器 皿	7.5		1.3	
42-7	I-NE 井戸1	土師器 皿	8.0		1.3		43-1	III-NE 井戸4	瓦器 糖鉢	32.5		7.5 以上	43-2と同一 個体
42-8	I-NE 井戸1	瓦器 小皿	8.35		1.4 以上		43-2	III-NE 井戸4	瓦器 糖鉢	9.7		4.8 以上	
42-9	I-NE 井戸1	須臾器 甕	32.0		8.2 以上		43-3	III-NE 井戸4	土師器 皿	7.5		1.6	
42-10	I-NE 井戸1	瓦器 土釜	18.96	最大径 26.8	11.6 以上		43-4	III-NE 井戸4	漆器 椀	12.75		4.9 以上	片面黒漆塗り
42-11	I-SE 井戸2 最下層	瓦器 椀	12.4		3.35		43-5	III-NE 井戸4	青磁 椀	5.1		1.8 以上	
42-12	I-SE 井戸2 最下層	瓦器 椀	13.2		3.6 以上		43-6	III-NE 井戸4	瓦器 土釜	23.6	最大径 31.0	8.6 以上	
42-13	I-SE 井戸2 最下層	瓦器 皿	7.2		1.1		43-7	III-NE 井戸4	漆器 曲物底板	15.0		厚さ 0.5	片面黒漆塗り
42-14	I-SE 井戸2	瓦器 皿	7.4		1.35		43-8	III-NE 井戸4	木製容器 復板	18.2		厚さ 0.4	目釘穴2ヶ所 遺存
42-15	I-SE 井戸2	瓦器 土釜	20.9	最大径 26.5	4.9 以上		44-1	III-NE 紫石遺跡3	漆器 甕	30.8		5.0 以上	
42-16	II 井戸3	瓦器 椀	15.6		3.3 以上		44-2	III-NE 紫石遺跡3	漆器 甕	28.9		7.5 以上	
42-17	II 井戸3	瓦器 椀	16.25		3.7 以上		45-1	I-NE 土坑1	瓦器 椀	14.0	3.1	4.45	
42-18	II 井戸3	瓦器 椀	17.0		3.1 以上		45-2	I-NE 土坑1	瓦器 椀	13.2	3.2	3.7	
42-19	II 井戸3	瓦器 椀	15.8		3.5 以上		45-3	I-NE 土坑1	瓦器 椀	14.4		3.0 以上	

表4 植田遺跡出土遺物法量表②

図面 番号	出土遺物 及び 部位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺物 及び 部位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁径	底径	器高					口縁径	底径	器高	
45-4	I-NE 土坑1	瓦器 碗	12.2	4.1	4.0		46-13	I-NE 土坑2	白磁 碗	15.6		5.2 以上	内面に沈線
45-5	I-NE 土坑1	瓦器 碗	15.1		4.05 以上		46-14	I-NE 土坑2	白磁 碗	15.6		5.2 以上	
45-6	I-NE 土坑1	瓦器 碗	12.2		3.3 以上		46-15	I-NE 土坑2	磁器 碗	10.2		1.4 以上	
45-7	I-NE 土坑1	瓦器 碗	13.9		3.0 以上		46-16	I-NE 土坑2	土師器 皿	8.8		1.5	
45-8	I-NE 土坑1	瓦器 碗	13.0	4.2	5.45		46-17	I-NE 土坑2	土師器 皿	8.1		1.2	
45-9	I-NE 土坑1	瓦器 碗	12.1		2.5		46-18	I-NE 土坑2	土師器 皿	8.4		1.2	
45-10	I-NE 土坑1	白磁 碗	14.7		3.3 以上		46-19	I-NE 土坑2	土師器 土釜	29.4	最大径 40.0	25.2 以上	ほぼ完好
45-11	I-NE 土坑1	土師器 皿	15.3		2.3 以上		46-20	I-NE 土坑2	土師器 土釜	28.4	最大径 40.0	8.2 以上	
45-12	I-NE 土坑1	土師器 小皿	10.6		1.1		46-21	I-NE 土坑2	須恵器 鉢	28.0		8.4 以上	
45-13	I-NE 土坑1	土師器 小皿	8.4		1.8		47-1	III-SE 土坑3	瓦器 碗	11.0		2.4	
45-14	I-NE 土坑1	土師器 小皿	8.3		1.7		47-2	III-SE 土坑3	瓦器 碗	10.95		2.9	
45-15	I-NE 土坑1	土師器 土釜	28.7	最大径 37.5	9.4 以上		47-3	III-SE 土坑3	須恵器 控鉢	29.3		10.7 以上	
45-16	I-NE 土坑1	土師器 土釜	32.6	最大径 40.4	8.8 以上		47-4	VI 土坑8	瓦器 碗	10.9		2.8	
46-1	I-NE 土坑2	瓦器 碗	14.6	4.8	4.2		47-5	VI 土坑8	土師器 皿	7.7		1.4	
46-2	I-NE 土坑2	瓦器 碗	15.6	4.2	4.2		48-1	III-SE 土坑4	瓦器 碗	13.0		2.95	
46-3	I-NE 土坑2	瓦器 碗	16.8	3.9	4.4		48-2	III-SE 土坑4	瓦器 碗	11.5		3.25	
46-4	I-NE 土坑2	瓦器 碗	18.0		3.0 以上		48-3	III-SE 土坑4	瓦器 碗	12.35		3.4 以上	
46-5	I-NE 土坑1	瓦器 碗	15.9		3.7		48-4	III-SE 土坑4	瓦器 碗	12.9		2.3 以上	
46-6	I-NE 土坑2	瓦器 碗	13.6	3.2	3.9 以上		48-5	III-SE 土坑4	瓦器 碗	12.2		3.4 以上	
46-7	I-NE 土坑2	瓦器 碗	16.0		3.7		48-6	III-SE 土坑4	瓦器 碗	11.3		3.1	
46-8	I-NE 土坑2	瓦器 碗	15.0		5.0 以上	大和型	48-7	III-SE 土坑4	瓦器 碗	14.0		2.9 以上	
46-9	I-NE 土坑2	瓦器 碗	7.6	3.3	2.8	小型	48-8	III-SE 土坑4	土師器 皿	12.45		1.65	
46-10	I-NE 土坑2	瓦器 皿	7.3		1.5		48-9	III-SE 土坑4	土師器 皿	8.0		1.55	
46-11	I-NE 土坑2	白磁 碗	18.2		4.9 以上	内面に沈線	48-10	III-SE 土坑4	土師器 皿	8.85		1.45	
46-12	I-NE 土坑2	白磁 碗	17.8		4.5 以上		48-11	III-SE 土坑4	土師器 皿	8.5		1.5	

表5 植田遺跡出土遺物法量表①

図面 番号	出土遺物 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺物 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁径	底径	器高					口縁径	底径	器高	
48-12	Ⅲ-S E 土坑4	土師器 台付杯	12.4	8.6	4.8	紀伊系	50-13	V-NE 土坑6	瓦器 碗	11.1		2.5	
48-13	Ⅲ-S E 土坑4	瓦器 土釜	20.6	最大径 25.2	5.6 以上		50-14	V-NE 土坑6	瓦器 碗	10.6		2.4	
48-14	Ⅲ-S E 土坑4	土師器 土釜	24.3	最大径 30.6	8.8 以上		50-15	石製み取り櫛し俵 土坑6	瓦器 碗	14.5	2.9	2.9	
48-15	Ⅲ-S E 土坑4	瓦器 土釜	17.7	最大径 24.5	10.0 以上		50-16	石製み取り櫛し俵 土坑6	瓦器 碗	12.8	3.3	3.5	
48-16	Ⅲ-S E 土坑4	土師器 土釜	18.3	最大径 23.0	12.5	三足付	50-17	石製み取り櫛し俵 土坑6	土師器 小皿	7.3		1.6	
49-1	V-NE 土坑5	瓦器 碗	13.2		3.1 以上		50-18	V-NW 土坑6	瓦器 碗	7.6	2.95	2.4	小型
49-2	V-NE 土坑5	瓦器 碗	11.8		2.5 以上		50-19	V-NW 土坑6	瓦器 皿	8.6		1.6	内底面に平行 線文
49-3	V-NE 土坑5	瓦器 碗		5.2	3.7 以上		50-20	V-SE 土坑6	土師器 皿	9.0		1.6	
49-4	V-NE 土坑5	瓦器 壺	29.4		5.3 以上		50-21	V-SE 土坑6	土師器 小皿	8.0		1.5	
49-5	V-NE 土坑5	土師器 小皿	8.5		1.3		50-22	V-SE 土坑6	土師器 小皿	8.5		1.5	
49-6	V-NE 土坑5	土師器 小皿	9.0		1.6		50-23	V-NE 土坑6	土師器 小皿	8.2		1.4	
49-7	V-NE 土坑5	土師器 小皿	8.5		1.7		50-24	V-NW 土坑6	土師器 小皿	7.8		1.5	
49-8	V-NE 土坑5	土師器 土釜	21.2	最大径 31.0	6.2 以上		50-25	V-NW 土坑6	青磁 碗		5.4	4.4 以上	外面に蓮弁文
50-1	V-NE 土坑6	瓦器 碗	13.1	2.7	3.2		50-26	V-NW 土坑6	青磁 皿		7.5	2.3 以上	
50-2	V-NW 土坑6	瓦器 碗	15.4	4.1	4.2		50-27	V-NW 土坑6	青磁 碗	9.9		3.0 以上	
50-3	V-NW 土坑6	瓦器 碗	15.0		4.2		50-28	V-NW 土坑6	土師器 皿	11.4		2.0 以上	
50-4	V-SE 土坑6	瓦器 碗	15.9		2.4 以上		50-29	V-NW 土坑6	土師器 皿	11.6		2.0 以上	
50-5	V-NW 土坑6	瓦器 碗	15.2		2.6		50-30	V-NW 土坑6	土師器 皿	13.2		2.1 以上	
50-6	V-NE 土坑6	瓦器 碗	13.9		3.7		50-31	V-NW 土坑6	土師器 皿	9.8		0.9	
50-7	V-SE 土坑6	瓦器 碗	12.3	2.2	3.0		50-32	V-NW 土坑6	土師器 小皿	8.5		1.3	
50-8	V-NW 土坑6	瓦器 碗	12.2	2.6	2.9		50-33	V-NW 土坑6	土師器 小皿	8.6		1.1	
50-9	V-NW 土坑6	瓦器 碗	11.8	3.3	3.0		50-34	V-NW 土坑6	土師器 皿	7.06		1.2	
50-10	V-NW 土坑6	瓦器 碗	13.4		2.4 以上		50-35	V-NW 土坑6	土師器 小皿	7.5		1.1	
50-11	I-NE 土坑6	瓦器 碗	10.8	3.2	3.7		50-36	V-SE 土坑6	土師器 小皿	8.2		1.2	
50-12	V-NE 土坑6	瓦器 碗	11.0		3.05		50-37	V-NW 土坑6	土師器 小皿	8.1		1.4	

表6 植田遺跡出土遺物法量表④

図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁径	底径	高さ					口縁径	底径	高さ	
50-38	V-NW 土坑6	土師器 小皿	8.0		1.2		51-13	V-SE 土坑7	土師器 小皿	8.8		1.3	
50-39	V-SE 土坑6	土師器 小皿	8.8		1.3		51-14	V-SE 土坑7	土師器 小皿	8.2		1.5	
50-40	V-NW 土坑6	土師器 小皿	8.2		1.4		51-15	V-SE 土坑7	土師器 小皿	7.5		1.3	
50-41	V-NW 土坑6	須恵器 鉢	28.0		4.0 以上		51-16	V-SE 土坑7	土師器 小皿	7.1		1.3	
50-42	V-NW 土坑6	瓦器 土釜	20.2	最大径 26.0	9.9 以上		51-17	V-SE 土坑7	土師器 小皿	7.45		1.2	
50-43	V-NW 土坑6	瓦器 土釜	24.2	最大径 33.0	10.6	外面ケズリ	51-18	V-SE 土坑7	土師器 小皿	7.3		1.5	
50-44	V-NW 土坑6	石鍋	31.1	最大径 34.6	5.2 以上		51-19	V-SE 土坑7	須恵器 鉢	33.6		12.5 以上	
50-45	石積み取り壊し後 土坑6	瓦器 碗	10.9		2.8		51-20	V-SE 土坑7	瓦器 大甕	37.2		10.8 以上	
50-46	石積み取り壊し後 土坑6	瓦器 碗	13.5		3.3 以上		52-1	V-NE 溝-1	瓦器 碗	10.6		2.65	
50-47	石積み取り壊し後 土坑6	瓦器 碗	12.6		3.5 以上		52-2	V-NE 溝-1	瓦器 碗	10.6		2.8	
50-48	石積み取り壊し後 土坑6	瓦器 碗	11.2		3.2 以上		52-3	V-NE 溝-1	瓦器 碗	12.1		2.65 以上	
50-49	石積み取り壊し後 土坑6	瓦器 碗	11.1		2.7		52-4	V-NE 溝-1	瓦器 碗	11.4		3.0	
50-50	石積み取り壊し後 土坑6	土師器 小皿	7.4		1.2		52-5	V-NE 溝-1	瓦器 鉢	11.05		2.35	
51-1	V-SE 土坑7	瓦器 碗	10.8		2.7		52-6	V-NE 溝-1	瓦器 鉢	10.0		2.3 以上	
51-2	V-SE 土坑7	瓦器 碗	10.3		2.8		52-7	V-NE 溝-1	瓦器 鉢	9.4		2.35	
51-3	V-SE 土坑7	瓦器 碗	11.4		3.1		52-8	V-NE 溝-1	瓦器 碗	13.8		3.0 以上	
51-4	V-SE 土坑7	瓦器 碗	12.2		3.2 以上		52-9	V-NE 溝-1	土師器 皿	8.2		1.3	
51-5	V-SE 土坑7	瓦器 碗	13.0		3.2		52-10	V-NE 溝-1	瓦器 皿	8.4		1.4	
51-6	V-SE 土坑7	瓦器 碗	11.0		2.9		52-11	V-NE 溝-1	瓦器 碗	10.9		2.75	
51-7	V-SE 土坑7	瓦器 碗	10.8		2.65	外面にヘラオ サエ	52-12	V-NE 溝-1	瓦器 碗	14.0		4.0 以上	
51-8	V-SE 土坑7	瓦器 碗	10.8		2.5		52-13	V-NE 溝-1	青磁 碗	14.8		3.3 以上	外面に蓮弁文
51-9	V-SE 土坑7	瓦器 碗	11.7		2.0 以上		52-14	V-NE 溝-1	瓦器 碗	13.6		2.3 以上	
51-10	V-SE 土坑7	土師器 皿	11.3		2.0		52-15	V-NW 土坑-16	瓦器 碗	12.8	3.2	3.25	完整
51-11	V-SE 土坑7	土師器 小皿	7.7		1.4		52-16	V-NW 土坑-16	瓦器 碗	14.8		3.0 以上	
51-12	V-SE 土坑7	土師器 小皿	7.9		1.4		52-17	V-NW 土坑-16	瓦器 碗	14.2		2.3 以上	

表7 横田遺跡出土遺物量表②

図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁径	底径	器高					口縁径	底径	器高	
52-18	V-NW 土坑-16	土師器 小皿	8.0		1.3		53-23	I-NE 土坑-9	土師器 小皿	9.1		1.4	
52-19	V-NW 土坑-16	瓦器 小皿	7.3		1.3		53-24	I-NE 土坑-9	土師器 小皿	9.2		1.3	
52-20	V-NW 土坑-16	瓦器 小皿	7.3		1.3		53-25	I-NE 土坑-9	瓦器 皿	7.5		1.1	
53-1	V-SE 土坑-22	瓦器 椀	14.0		4.0		53-26	I-NE 土坑-9	白磁 椀	15.8		3.4	
53-2	V-SE 土坑-22	瓦器 皿	8.8		1.5		53-27	V-NE 土坑-18	瓦器 椀	8.0	3.8	3.2	小皿
53-3	V-SE 土坑-21	瓦器 椀	13.8		3.4 以上		53-28	V-NE 土坑-18	土師器 小皿	7.0		1.5	
53-4	V-SE 土坑-21	瓦器 椀	10.4		3.3 以上		53-29	V-NE 土坑-19	土師器 皿	10.8		1.6	
53-5	V-SE 土坑-21	瓦器 皿	8.6		1.75		53-30	V-NE 土坑-19	瓦器 椀	13.1		2.5 以上	
53-6	V-SE 土坑-21	瓦器 皿	8.6		1.6		53-31	V-NE 土坑-19	土師器 小皿	7.7		1.6	
53-7	V-SE 土坑-21	瓦器 皿	8.1		1.15		53-32	V-NE 土坑-19	土師器 小皿	7.4		1.3 以上	
53-8	V-SE 土坑-21	土師器 小皿	7.9		1.15		53-33	V-NE 土坑-19	土師器 皿	7.85		1.0	
53-9	V-SE 土坑-21	土師器 小皿	7.35		1.3		53-34	V-SE 土坑-19	土師器 小皿	8.5		1.1	
53-10	V-SE 土坑-21	土師器 小皿	7.6		1.4		53-35	V-SE 土坑-19	土師器 杯	11.4		2.8 以上	
53-11	V-SE 土坑-21	瓦器 皿	7.8		1.35		53-36	II-SE 土坑-16	土師器 小皿	8.0		1.4	
53-12	V-SE 土坑-21	土師器 小皿	7.9		1.05		53-37	II 土坑-17	瓦器 椀	11.6		2.75 以上	
53-13	V-SE 土坑-21	土師器 皿	10.25		1.2		53-38	V-NE 土坑-20	青磁 椀	16.6		5.7 以上	外面に葉舟文
53-14	V-SE 土坑-21	瓦器 皿	8.2		1.4		53-39	V-NE 土坑-26	瓦器 椀	12.8	2.9	3.25	
53-15	V-SE 土坑-21	瓦器 皿	8.3		1.3		53-40	V-NE 土坑-26	土師器 小皿	7.6		1.2	
53-16	V-SE 土坑-21	瓦器 椀	23.5		4.0		53-41	V-NE 土坑-26	瓦器 皿	9.4		1.7	
53-17	II 土坑-12	瓦器 皿	8.3		1.2		53-42	V-NE 土坑-26	土師器 小皿	7.8		1.4	
53-18	II 土坑-12	瓦器 皿	7.6		1.5		53-43	V-SE 土坑-27	瓦器 椀	14.5		3.0 以上	
53-19	I-NE 土坑-9	瓦器 椀	14.7	4.35	4.5	格子状施文	53-44	V-NE 土坑-25	土師器 小皿	7.9		1.2	
53-20	I-NE 土坑-9	瓦器 皿	9.2		2.2		53-45	V-NE 土坑-24	瓦器 椀	14.6		3.0 以上	
53-21	I-NE 土坑-9	土師器 小皿	9.0		1.5		53-46	V-NE 土坑-23	瓦器 椀	12.6		3.0 以上	
53-22	I-NE 土坑-9	土師器 小皿	8.8		1.5		53-47	III-SE 土坑-14	瓦器 椀	10.5		2.8	

表8 植田遺跡出土遺物流量表⑥

図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	流量(cm)		備考	図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	流量(cm)		備考		
			口縁部	底径部					器高	口縁部		底径部	器高
53-48	Ⅲ-SE 土坑-14	瓦器 碗	10.7		2.75	54-10	Ⅳ 河川跡上層	漆 甕	25.5		5.3 以上		
53-49	Ⅲ-SE 土坑-14	瓦器 碗	11.1		2.85	54-11	Ⅳ 河川跡上層	土師器 土釜	32.6	最大径 41.2	5.4 以上		
53-50	Ⅲ-SE 土坑-14	瓦器 碗	12.6		2.5 以上	54-12	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 土釜	29.3	最大径 38.0	5.7 以上		
53-51	Ⅲ-SE 土坑-14	土師器 皿	10.0		1.9	54-13	Ⅳ 河川跡上層	土師器 土釜	26.8	最大径 35.0	6.8 以上		
53-52	Ⅲ-SE 土坑-14	土師器 小皿	7.6		1.4	54-14	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 土釜	26.0	最大径 35.0	6.8 以上		
53-53	Ⅲ-SE 土坑-14	土師器 小皿	7.5		1.6	54-15	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 土釜	23.8	最大径 30.6	4.4 以上		
53-54	Ⅲ-SE 土坑-14	瓦器 皿	7.0		1.4	54-16	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 土釜	21.2	最大径 28.0	6.7 以上		
53-55	Ⅲ-SE 土坑-14	土師器 小皿	7.5		1.4	54-17	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 土釜	21.9	最大径 28.6	5.7 以上		
53-56	Ⅲ-SE 土坑-14	土師器 杯	6.5		2.5	55-1	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	16.7	5.8	5.8	平行略文	
53-57	Ⅲ-SE 土坑-14	須恵器 短頸甕	9.5		4.4 以上	55-2	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	14.7	5.6	5.6	平行略文	
53-58	I-NE 土坑-10	瓦器 甕	8.9		1.7	55-3	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	15.4	6.0	5.3	格子状略文	
53-59	I-NE 土坑-10	白磁 碗	15.6		4.4 以上	55-4	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	15.5	4.6	5.8	格子状略文	
53-60	I-NE 土坑-11	瓦器 碗	11.4		2.5 3.1	55-5	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	15.6	5.6	5.9		
53-61	I-NE 土坑-11	瓦器 碗	11.8		2.7 以上	55-6	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	16.3	6.3	5.2		
53-62	I-NE 土坑-11	瓦器 碗	11.7		3.0 以上	55-7	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	15.0	5.8	5.4	格子状略文	
53-63	Ⅲ-SW 土坑-13	瓦器 碗	15.5		5.4 4.9 以上	55-8	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	14.5	4.9	5.6	格子状略文	
54-1	Ⅳ 河川跡上層	須恵器 灰口壺	19.0		11.7 以上	55-9	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	14.9	6.1	5.7	格子状略文	
54-2	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 碗	14.5		4.5 以上	55-10	河川跡下層	瓦器 碗	15.1	5.7	4.7	格子状略文	
54-3	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 皿	9.5		2.1	55-11	河川跡下層 暗灰黑色土	土師器 皿	15.0		3.2 以上		
54-4	Ⅳ 河川跡上層	石帯	長 3.15	厚 2.5 以上	0.8	55-12	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	14.4	5.5	5.5	格子状略文	
54-5	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 土釜	21.4		最大径 29.2	6.4 以上	55-13	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	15.3	5.2	5.7	格子状略文
54-6	Ⅳ 河川跡上層	土師器 土釜	21.8		最大径 29.0	4.7 以上	55-14	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	15.4		4.6 以上	大和型
54-7	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 土釜	22.0		最大径 28.8	5.0 以上	55-15	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	14.5		5.5 以上	大和型
54-8	Ⅳ 河川跡上層	瓦器 土釜	21.6		最大径 29.5	7.0 以上	55-16	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	14.4		5.3 以上	大和型
54-9	Ⅳ 河川跡上層	土師器 甕	29.0		9.4 以上	55-17	河川跡下層 暗灰黑色粘質土	瓦器 碗	15.0		3.9 以上	大和型	

表9 植田遺跡出土遺物法量表⑦

図面 番号	出土遺物 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺物 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁部	底部径	器高					口縁部	底部径	器高	
55-18	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	15.1		4.7 以上		56-8	V 河川跡下層	瓦器 皿	9.4		2.7	
55-19	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	15.7		5.4 以上		56-9	V 河川跡下層	瓦器 皿	9.4		2.3	
55-20	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	17.45		4.55 以上	格子状暗文	56-10	V 河川跡下層	瓦器 皿	9.3		1.7	平行暗文
56-21	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	15.45		5.3 以上		56-11	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.4		1.9	
55-22	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	土師器 皿	14.6		2.8 以上		56-12	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.6		1.6	「て」の字状口縁
55-23	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	15.4		4.4 以上		56-13	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.8		1.5	
55-24	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	15.3		4.5 以上		56-14	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.6		1.85	
55-25	河川跡下層 暗灰黒色土	瓦器 碗	16.2		4.3 以上		56-15	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.3		1.4	
55-26	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	14.6		4.8 以上		56-16	V 河川跡下層	土師器 小皿	8.6		2.1	「て」の字状口縁
55-27	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	15.8		4.8 以上		56-17	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.2		1.6	
55-28	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	13.9		4.8 以上		56-18	V 河川跡下層	土師器 皿	10.5		1.8	
55-29	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	15.5		4.7 以上		56-19	V 河川跡下層	土師器 小皿	10.2		1.7	
55-30	河川跡下層 暗灰黒色土	瓦器 碗	15.7		4.6 以上		56-20	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.5		1.6	
55-31	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	14.5		4.9 以上	格子状暗文	56-21	V 河川跡下層	土師器 小皿	10.1		1.4	
55-32	河川跡下層 暗灰黒色土	瓦器 碗	15.45		4.5 以上		56-22	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.8		1.4	
55-33	河川跡下層 暗灰黒色土	瓦器 碗	14.3		5.1 以上	格子状暗文	56-23	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.3		1.6	
55-34	河川跡下層 暗灰黒色粘質土	瓦器 碗	12.7		5.2 以上	格子状暗文	56-24	V 河川跡下層	土師器 小皿	9.8		1.6	
55-35	河川跡下層 暗灰黒色土	土師器 皿	13.8		2.75		56-25	V 河川跡下層	土師器 小皿	10.3		1.8	
56-1	V 河川跡下層	瓦器 台付皿	10.2	5.2	3.0	連結輪状埴文	56-26	V 河川跡下層	糠殻式鉄鏡	全長 8.4 以上	全巾 4.7 以上	刃部巾 0.9	刃部厚さ 0.4 柄部5.45×0.4
56-2	V 河川跡下層	瓦器 台付皿	9.4	4.2	2.6	格子状暗文	56-27	V 河川跡下層	須恵器 片口鉢	28.1		9.0 以上	内面ハケ目
56-3	V 河川跡下層	瓦器 皿	9.0		2.2	平行暗文	56-28	V 河川跡下層	瓦器 土釜	21.4		最大径 29.2 以上	
56-4	V 河川跡下層	瓦器 皿	9.2		2.35	格子状暗文	56-29	V 河川跡下層	瓦器 土釜	23.4		最大径 30.6 以上	
56-5	V 河川跡下層	瓦器 台付皿	9.8	4.3	2.9	平行暗文	56-30	V 河川跡下層	土師器 土釜	22.0		最大径 27.0 以上	
56-6	V 河川跡下層	瓦器 皿	10.1		2.3		56-31	V 河川跡下層	土師器 土釜	24.0		最大径 30.9 以上	
56-7	V 河川跡下層	瓦器 皿	9.5		2.15		56-32	V 河川跡下層	土師器 土釜	23.8		最大径 28.4 以上	口縁部に内孔

表10 植田遺跡出土遺物法量表③

図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁径	底径	器高					口縁径	底径	器高	
58-1	N-SE 遺構面直上	瓦器 椀	15.3	4.5	5.6	平行略文	58-26	II 遺構面直上	瓦器 皿	8.0		1.8	
58-2	V-SE 遺構面直上	瓦器 椀	14.0	4.3	4.9	大和型	58-27	V-NW 床土・遺構面直上	土師器 小皿	8.5		1.3	
58-3	N-SE 遺構面直上	瓦器 椀	13.2		3.7 以上		58-28	V-SE 遺構面直上一括	土師器 小皿	7.6		1.4	
58-4	V-SE 遺構面直上一括	瓦器 椀	13.3		3.3		58-29	V-SE 遺構面直上一括	土師器 小皿	7.4		1.2	
58-5	V-SE 遺構面直上一括	瓦器 椀	13.8	2.1	3.4		58-30	V-SE 遺構面直上一括	土師器 小皿	9.1		1.4	
58-6	V-SE 遺構面直上一括	瓦器 椀	13.0		3.5 以上	縹線状略文	58-31	I-NE 遺構面直上	磁器 椀	11.8		3.0	
58-7	V-SE 遺構面直上	瓦器 椀	13.0		2.9 以上		58-32	IV 遺構面直上	土師器 土釜	21.9	最大径 28.6	5.4 以上	
58-8	V-SE 遺構面直上一括	瓦器 椀	13.7		3.1 以上		58-33	IV 遺構面直上	瓦器 土釜	25.6	最大径 32.5	6.2 以上	
58-9	V-SE 遺構面直上一括	瓦器 椀	13.8		2.6 以上		58-34	V-NW 床土・遺構面直上	瓦器 土釜	26.3	最大径 30.6	3.5 以上	
58-10	IV 遺構面直上	瓦器 椀	14.1		3.5 以上		58-35	V-NW 床土・遺構面直上	砥石	長 4.2 以上	巾 3.6	厚さ 1.9	
58-11	V-NE・SE 東野内一括	瓦器 椀	15.0	5.2	5.4		58-36	V-NE・SE 東野内一括	瓦器 椀	13.6	2.4	3.7	
58-12	V-NE・SE 東野内一括	瓦器 椀	13.8	4.0	5.2	大和型	58-37	V-NE・SE 東野内一括	瓦器 椀	13.7	3.8	3.7	
58-13	V-NE・SE 東野内一括	瓦器 椀	14.8		3.8 以上	大和型	58-38	V-NE・SE 東野内一括	瓦器 椀	13.1	2.7	3.8	
58-14	V-NE・SE 東野内一括	瓦器 椀	11.7		2.8 以上		58-39	V-NE・SE 東野内一括	土師器 鉢	28.0		5.5 以上	
58-15	V-NE・SE 東野内一括	土師器 小皿	8.0		1.15		58-40	V-NE・SE 東野内一括	瓦器 土釜	18.8		3.8 以上	
58-16	V-SE 遺構面直上一括	瓦器 椀	13.0	3.0	3.3		58-41	V-NE・SE 東野内一括	縄紋土器 深鉢	厚み 0.35		6.9 以上	
58-17	V-SE 遺構面直上一括	瓦器 椀	12.5		3.55		58-42	V-NE・SE 東野内一括	縄紋土器 深鉢	厚み 0.8		5.3 以上	依期 緑帯文土器
58-18	II 遺構面上面	瓦器 皿	9.0		1.9	縹線状略文	59-1	III-SE 包含層一括	瓦器 椀	15.3	6.7	5.4	
58-19	V-SE 床土・遺構面直上	土師器 椀	9.9		2.6		59-2	IV 床土~包含層	瓦器 椀	14.8	4.25	5.5	平行略文
58-20	V-SE 遺構面直上一括	土師器 小皿	8.7		2.0		59-3	V-NE 包含層	瓦器 椀	14.1	4.8	5.1	大和型
58-21	V-SE 遺構面直上一括	土師器 小皿	8.0		1.25		59-4	V-NE 包含層	瓦器 椀	15.1		4.0 以上	大和型
58-22	V-NE 遺構面上面	磁器 皿	9.6	4.5	1.9		59-5	V-NE 包含層	瓦器 椀	14.8		3.9 以上	大和型
58-23	II 遺構面上面	瓦器 椀	14.9		3.7 以上		59-6	V-NE 包含層	瓦器 椀	15.3		3.0 以上	大和型
58-24	V-SE 遺構面直上一括	瓦器 椀	13.8		2.65 以上		59-7	III-西平 包含層	瓦器 椀	16.4	4.2	4.25	
58-25	IV 遺構面直上	瓦器 椀	8.9		2.1		59-8	III-西平 包含層	瓦器 椀	15.1	3.7	3.7	縹線状略文

表11 植田遺跡出土遺物量算表⑩

図面 番号	出土遺物 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺物 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁径	底部径	器高					口縁径	底部径	器高	
59-9	V-NE 包含層	瓦器 碗	13.3	3.25	3.4		59-34	III-SE 包含層一拵	土師器 小皿	9.6		1.2	「て」の字状口縁
59-10	V-NE 包含層	瓦器 碗	12.5	2.6	3.4	腰縁状縮文	59-35	III-SE 包含層一拵	土師器 小皿	10.7		2.1	「て」の字状口縁
59-11	III-SE 包含層一拵	瓦器 碗	12.6	2.6	3.2		59-36	III-SE 包含層一拵	土師器 小皿	8.8		1.4	「て」の字状口縁
59-12	I-NE 下層包含層	瓦器 碗	12.7	2.8	3.3		59-37	V-NR 包含層	土師器 小皿	8.0		1.8	
59-13	V-SW 包含層	瓦器 碗	13.4		3.2		59-38	V-NE 包含層	土師器 小皿	7.7		1.7	
59-14	V-NE 包含層	瓦器 碗	12.2	2.8	3.1		59-39	V-NE 包含層	土師器 小皿	9.4		1.9	赤7底
59-15	V-NE 包含層	瓦器 碗	11.3	2.4	3.1		59-40	V-NE 包含層	土師器 小皿	8.5		1.7	
59-16	V-NE 包含層	瓦器 碗	10.0		3.3	大和型	59-41	I-NE 下層包含層	土師器 小皿	11.0		1.7 以上	
59-17	V-NE 包含層	瓦器 碗	10.2		3.55		59-42	I-NE 下層包含層	土師器 小皿	8.0		1.6 以上	
59-18	V-SW 包含層	瓦器 碗	13.6	2.9	3.2	腰縁状縮文	59-43	III-SW 包含層	土師器 小皿	8.6		1.5	
59-19	III-SE 包含層一拵	瓦器 碗	11.9	3.0	2.9		59-44	I-NE 下層包含層	土師器 小皿	7.5		1.45	
59-20	V-NE 包含層	瓦器 碗	11.8		3.2	腰縁状縮文	59-45	V-畦畔 包含層	土師器 小皿	8.0		1.35	
59-21	V-NE 包含層	瓦器 碗	12.0		3.3		59-46	I-NE 下層包含層	土師器 小皿	9.9		1.8 以上	
59-22	V-NE 包含層	瓦器 碗	13.6		3.4 以上		59-47	III-SE 包含層一拵	土師器 小皿	10.0		1.9	
59-23	I 包含層畦畔	瓦器 碗	13.9		3.0 以上		59-48	I-NE 下層包含層	土師器 小皿	8.3		1.6 以上	
59-24	I-NE 下層包含層	瓦器 碗	12.7		3.1 以上		59-49	V-NE 包含層	土師器 小皿	7.8		1.4	
59-25	III-NW 包含層	瓦器 碗	11.8	3.6	2.8		59-50	V-NW 包含層	小皿	7.8		1.25	
59-26	V-NW 包含層	瓦器 碗	12.7		3.2		59-51	I-NE 下層包含層	土師器 小皿	7.6		1.3	
59-27	I-NE 下層包含層	瓦器 碗	12.2		3.6 以上		59-52	III-SE 包含層一拵	土師器 台付杯	11.9	8.0	5.3	紀伊系
59-28	V-NE 包含層一拵	瓦器 碗	11.4		3.0 以上		59-53	III-SE 包含層一拵	土師器 杯	15.1		3.1	
59-29	V-NE 包含層	瓦器 碗	11.0		2.5		59-54	I-NE 下層包含層	須恵器 壺	8.0		7.0 以上	
59-30	V-NE 包含層一拵	瓦器 碗	11.0		3.25		59-55	III-西半 包含層	白磁 碗	15.4		5.2 以上	
59-31	V-NE 包含層	瓦器 碗	11.9		4.0	大和型	59-56	I-NE 下層包含層	白磁 碗	17.9		3.0 以上	
59-32	III-SE 包含層一拵	土師器 小皿	8.8		1.3	「て」の字状口縁	59-57	I-NW 下層包含層	白磁 碗	13.8		1.7 以上	
59-33	III-SE 包含層一拵	土師器 小皿	9.2		1.4	「て」の字状口縁	59-58	V-NE 包含層	白磁 碗	5.45		1.7 以上	

表12 植田遺跡出土遺物量表④

図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考	図面 番号	出土遺構 及び 層位	種別 及び 器種	法量(cm)			備考
			口縁部径	底径	器高					口縁部径	底径	器高	
59-59	V-N E 包含層	白磁 碗		5.8	2.5 以上		60-15	I-NW 下層包含層	土師器 土釜	25.2	最大径 30.4	6.5 以上	
59-60	V-N E 包含層	青磁 碗	17.0		4.5 以上	外面蓮弁文	60-16	I-NW 下層包含層	土師器 土釜	20.0	最大径 26.4	5.5 以上	
59-61	V-N E 包含層	青磁 碗	15.3		3.0 以上	外面蓮弁文	60-17	III-S E 包含層一部	瓦器 土釜	17.6	最大径 24.2	5.8 以上	
59-62	V-N E 包含層	青磁 碗	13.5		2.2	外面蓮弁文	60-18	I-N E 下層包含層	土師器 甕	20.2		6.0 以上	
59-63	V-N E 包含層	青磁 碗	16.1		4.2 以上	内面刺花文							(上林)
59-64	I-N E 下層包含層	青磁 碗	15.2		2.9 以上	内面刺花文							
59-65	I-NW 下層包含層	青磁 碗	16.8		2.9 以上	内面刺花文							
59-66	I-N E 下層包含層	青磁 碗	19.0		3.5 以上	内面刺花文							
59-67	III-西平 包含層	青磁 碗	16.2		3.7 以上	内面刺花文							
59-68	III-SW 包含層	青磁 碗		5.9	2.3 以上								
59-69	V 側溝内	青磁 碗		4.9	2.0 以上								
60-1	V-N E 包含層	漆 大甕	38.2		6.2 以上								
60-2	III-SW 包含層	須恵器 鉢	29.2		7.2 以上	捏鉢							
60-3	I 側溝埋戻時	須恵器 鉢	28.6		8.5 以上	捏鉢							
60-4	I-NW 下層包含層	土師器 甕	26.8		5.1 以上								
60-5	III-西平 包含層	瓦器 土釜	30.2	最大径 32.5	5.9 以上								
60-6	I-NW 下層包含層	土師器 土釜	23.0	最大径 29.8	8.2 以上								
60-7	V-N E 包含層	瓦器 土釜	26.2	最大径 33.2	5.2 以上								
60-8	III-西平 包含層	土師器 土釜	26.6	最大径 35.0	5.0 以上								
60-9	I-N E 包含層上層	土師器 土釜	27.0	最大径 37.2	8.4 以上								
60-10	III-西平 包含層	土師器 土釜	31.2	最大径 38.8	8.4 以上								
60-11	III-SW 包含層	瓦器 土釜	21.4	最大径 31.0	5.9 以上								
60-12	IV 床土一包含層	土師器 土釜	21.2	最大径 30.5	5.5 以上								
60-13	V-N E 包含層	瓦器 土釜	19.2	最大径 27.3	5.9 以上								
60-14	V-N E 包含層	土師器 土釜	21.2	最大径 28.0	6.7 以上								

## 第5節 松山山城遺跡の調査

### 第1項 はじめに

ゴルフ場建設予定地の南端部では、81年度に実施された分布調査において、北に向かって伸びる2丘陵上に山城跡の存在が指摘されていた<sup>①</sup>が、その実態については全く不明であった。試掘調査の結果、この2丘陵のうち東側の丘陵から14世紀代の遺構・遺物を発見し、蜂ヶ尾遺跡と命名している。松山山城遺跡は、この蜂ヶ尾遺跡の谷を挟んだ北東に位置するもので、調査地内で最高所となる山塊に立地している。試掘調査では、尾根の鞍部を分断する堀割状遺構や丘陵斜面をカットした加工面、ピット群などが検出されたことにより、中世山城として本調査対象としたものである。

本調査は、遺構の確認されたトレンチをつなぐように、山塊全域を調査対象とした。調査区は尾根の稜線を中心に設定し、必要に応じてサブトレンチを設け、丘陵の斜面部分にも調査区を拡張した。文中における地区名は、堀割状遺構を発見した鞍部から山塊最高所を縦断する部分を主尾根、主尾根のほぼ中央部から南西方向に伸びる、カット遺構が存在し、比較的広い平坦面を有する尾根を支尾根A、最も南端部に位置し、ピット群が検出された、南西に伸びる短い尾根を支尾根Bと呼称している。

調査面積は5,617㎡で、今回調査を実施した遺跡の中では最大の調査面積となった。

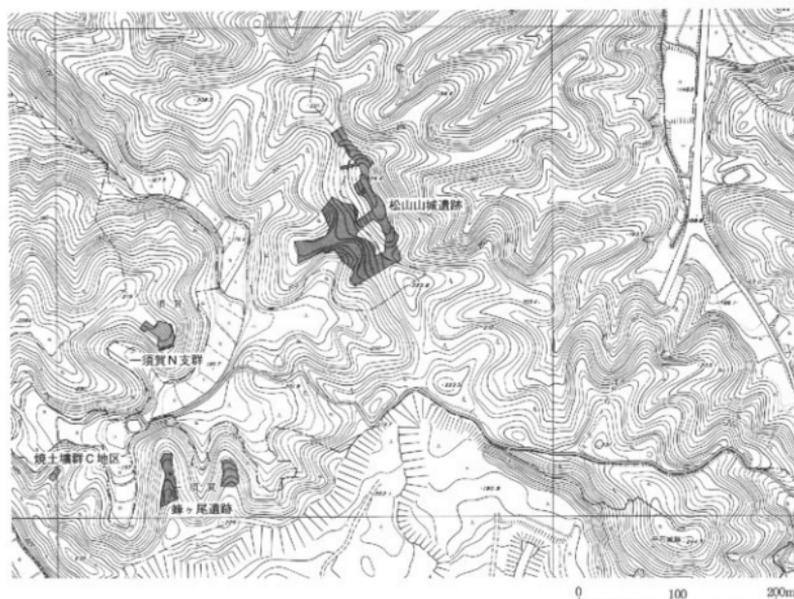
### 第2項 遺跡の立地

松山山城遺跡の最高所は標高約226mに達し、ゴルフ場事業地内では最高所となっており、周辺の眺望は極めて良好である。東には町道畑平石線が足元に望まれるが、中世には現在の太子町域と河内町大字平石をつなぐ谷筋を通るこの道は、平石峠を抜け大和盆地へ、あるいは南北朝期、楠木氏の本拠地であった千早赤阪村に至る交通の要衝である。北方約900mには山あいを縫って時期的にも並行する植田遺跡がかすかに望まれ、西には遠く羽曳野丘陵や石川の流れる低地が一望される。地形的には、主尾根の東西両サイドは切り立った急傾斜であり、眺望、地形の両面から戦略的拠点としては十分な条件を備えていると言えるだろう。

遺跡の南東約450mには、府指定史跡・平石城跡が位置している。平石城跡は標高244.5mの南東に向かって伸びる丘陵先端に立地し、東、西、南を谷に囲まれており、東側の谷底を走る町道畑平石線との比高差が約80mと、防衛的には尾根筋である北西部以外は理想的な立地にある。平石城<sup>②</sup>は付近に本拠を置いた平岩(平石)氏の城であったと言われ、南北朝期には河内国南部の重要な城となったと言う。延文(正平)5年(1360)には、北朝方の楠木勢討伐軍によって攻め入れられ、落城したとする記事が文献に見え



第66図 松山山城遺跡地区割図(約1/1500)



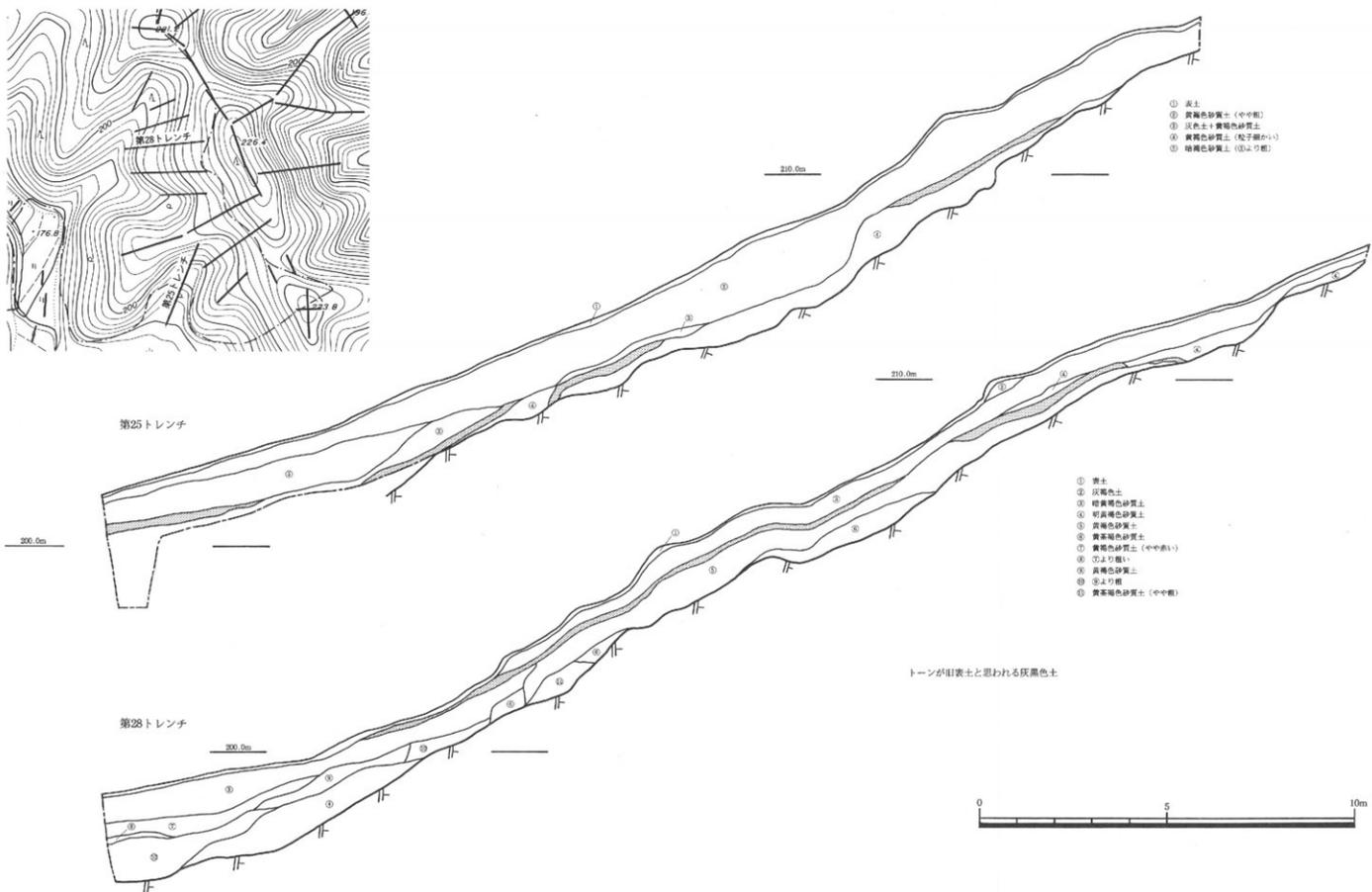
第67図 松山山城遺跡調査区位置図(1/5,000)

る。松山山城遺跡および蜂ヶ尾遺跡と平石城跡が、どのような関係にあったのかについては現状からはよく知れないが、平石城の防御上、北西の尾根づたいに位置する前2遺跡は地形から見て重要な位置を占めることは言うまでもないであろう。

また植田遺跡との関係も見逃せない。今次の試掘調査において発見された植田遺跡は14世紀代を中心とした集落遺跡であるが、14世紀の末頃に焼失によって終焉を迎えたものと考えられ、防御的に優れた立地を示すこと、建物基礎に使用されたと考えられる凝灰岩切石や輸入陶磁、鉄鐵の出土など、相当の権力基盤を有した武装集団の居館であると考えられる。植田遺跡から尾根づたいに立地する松山山城は、平地の居館と戦闘時の山城という関係にあったとも推定される。

### 第3項 基本層序

尾根上では覆土の堆積は薄く、10cm程度の厚さの表土(腐植土)直下から地山が検出されている。試掘調査時には、主尾根斜面部分の数ヶ所にトレンチを設定したが、斜面では1~3m以上の厚い堆積が見られる。堆積土の大半は、花崗岩風化土の流失による堆積と見られるが、中間部分に灰黒色を呈する有機層の薄い堆積が認められ、一定期間安定した地形を有したものと推定される。これが山城の造成と如何なる関係にあるのかについては、今回の調査で明らかにできなかったが、この有機層の前後から山城と並行する時期の遺物の出土があり、少なくとも土塁や掘割などの人工的造成施設が当初存在していたにしろ、かなりの確立で既に崩壊している可能性が強いものと判断されるであろう。



第68図 松山山城遺跡試掘トレンチ断面図(1/100)

#### 第4項 遺構

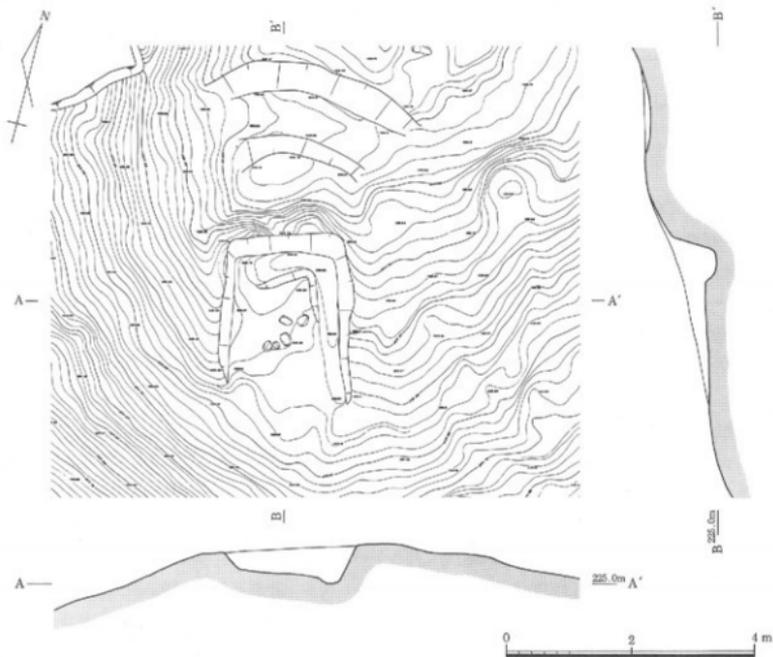
松山山城遺跡からは、山城以前の遺構として古墳1基と火葬墓2基が、また中世山城に伴う遺構としては主尾根北端部の堀割状遺構、支尾根Aのカット遺構、支尾根Bの建物跡およびピット群が検出された。

##### (1) 山城以前の遺構

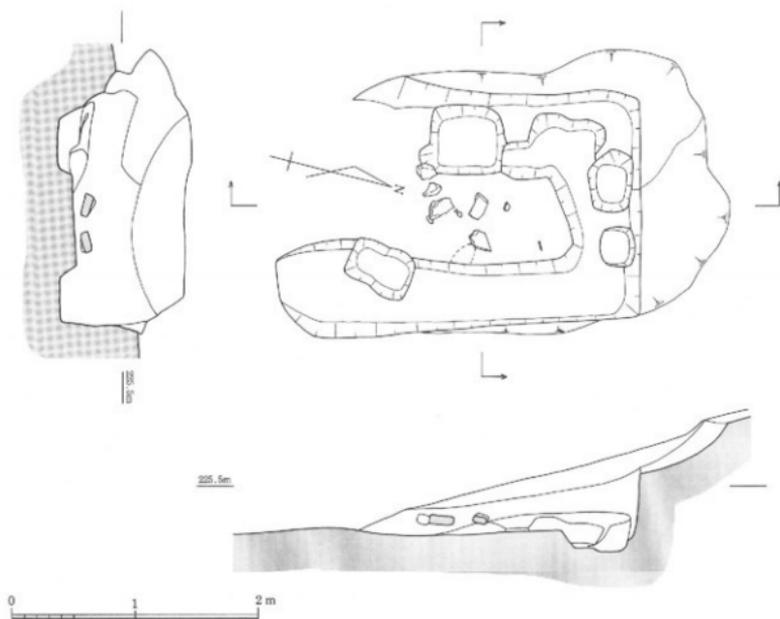
##### 松山山城古墳(第69図、第70図)

主尾根から支尾根Aが派生する基幹部分に位置するこの古墳は、調査区内最高所にあたるピークの南向き斜面に立地している。

墳丘は後背部にあたる斜面上部を堀割によって画することによって築造されているが、ほとんど削平され崩壊が著しく、盛土は完全に失われており、当初の高さなどは不明である。後背部をカットした堀割はかろうじて残存しており、規模は幅約1.5m、深さ約0.25mで、現存する延長は約3mである。堀割内部には花崗岩風化土の堆積が認められたが、堀割の埋土と覆土の土質はほとんど同一で、分層することは不可能であった。墳丘規模は堀割の位置から復元すれば、径6~10m程度の小規模な円墳とみられる。



第69図 松山山城古墳墳丘実測図(1/80)



第70図 松山山城古墳主体部実測図(1/40)

石室石材は完全に抜き取られており、石室の構造については不明であるが、石材の抜き取り痕の位置や全体の規模から見て、今回調査された一須賀古墳群N支群に見られるような無袖の小規模な石室と考えられる。奥壁と東壁部分に、石室の破壊時に伴うものと見られる斜めに掘り込んだ擾乱が認められるにもかかわらず、墓壇は幅約1.9m、最大長約2.9m、奥壁部分での床面までの深さ約0.5mと、比較的良好な残存状況であった。石室は南に開口し、主軸は奥壁で東へ約15°振っている。抜き取り痕から基底部分石材は奥壁部分で2石、側壁で4石ないしは5石以上と考えられ、また石室の内法は幅約0.7mとみられるが、全長は残存長2.4mで当初の規模は不明である。

墓壇埋土および床面からの遺物の出土は極めて少量で、古墳に伴うものとしては、鉄釘が2点(第78図5・6)と須恵器杯(凶化不能)の小片1点があったのみで、その他に瓦器片が2点(第78図1)出土している。また人頭大の花崗岩の板石数点が出土したが、その他の遺物と同様に現位置を保っておらず、石室材の破片とも考えられるが、棺床として使用された石材である可能性もある。瓦器は床面から数cm浮いた状態で出土しているが、石室の再利用に伴うものか、それとも石室破壊に関係したものなのかは判然としないが、所属時期は山城と近似したものであり、山城の施設として石室が利用された可能性も考えられるであろう。いずれにしろ、中世段階で石室が開口していたことは間違いない。またこの他、主体部から南約6mの調査区端部において、須恵器杯身3点(第78図2～4)が表土内から出土しており、周辺に関連する遺構が認められずこの古墳に伴ったものと考えられる。

## 主尾根／火葬墓SK-1

(第71図、第72図)

主尾根の中央部分、松山山城古墳の東側約9mから検出された火葬墓である。墓域は、丘陵ピークを下った東向きの斜面に穿たれており、径約30cm、深さ約12cmの円形を呈する。

蔵骨器には土師器甕(第78図7)を用いており、その周囲には木炭を充填している。埋納に際しては、墓域に蔵骨器を据えた後、隙間に木炭を充填したようで、蔵骨器底部にまで木炭は回り込んでいない。

遺構は表土直下で検出されており、上部は既に旧状を損なっていると考えられ、土師器甕の口縁部も3分の1程度が残るのみで、大半を欠いている。

発見時、蓋は認められなかったが、当初は何らかの蓋を有していたものと考えられる。蔵骨器内部には立木の根が回り込んでおり、骨片は全く残っておらず、副葬遺物などもなかった。

## 支尾根A／火葬墓SK-2 (図版62)

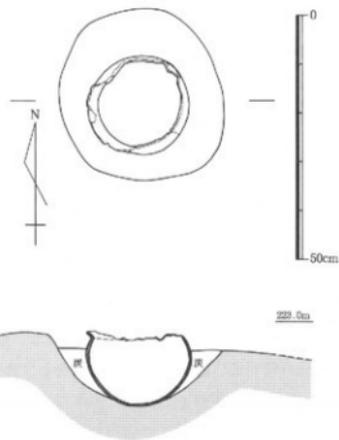
支尾根A平坦面の先端、南肩部から検出された火葬墓である。発見位置は遺構面より数十cm浮いたような状態で、元の位置は検出時より斜面上方に位置したものと考えられるが、斜面肩部の崩壊に伴って下方にずれ落ちた状態になって検出されたものと考えられる。したがって蔵骨器を納めた墓域の輪郭も検出できず、蔵骨器そのものも倒壊した状態で発見されたため、厳密な埋葬状態を知ることはできなかった。

蔵骨器(第80図 42・43)は、いわゆる薬壺形の土師器で細片となって出土している。体部はほとんど復元できたが、両耳は意識的に打ち欠いたものであるのか発見できなかった。蓋は宝珠形つまみを付したものである。土師器片と共に灰や若干の骨片も出土しているが、副葬遺物などは出土しなかった。

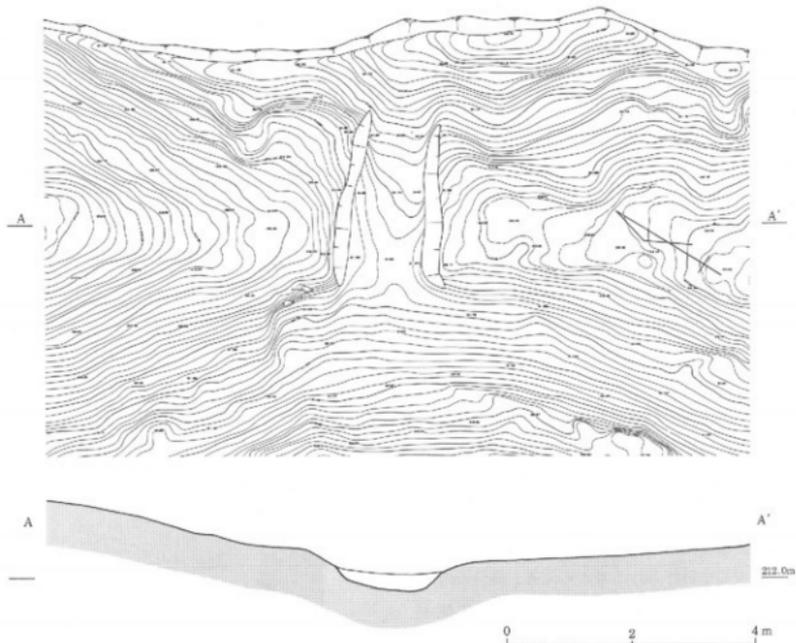
これによって今次の調査では、松山山城遺跡内の2基と後述する試掘時に調査した1基、計3基の火葬墓が発見されたことになる。



第71図 火葬墓SK-1位置図(1/200)



第72図 火葬墓SK-1実測図(1/10)



第73図 主尾根北端部堀割S D-3実測図(1/80)

## (2) 中世山城に伴う遺構

### 主尾根北端部／堀割状遺構S D-3(第73図)

主尾根の調査区北端部から検出された、鞍部を分断するためのものと考えられる堀割状の遺構である。調査区北側には、尾根続きに標高約221mのピークがあり、主尾根とそのピーク部分とを分断するための施設と考えられる。

遺構は現状で幅約1.7m、深さ約0.25m、延長約2.9mである。遺構面が花崗岩風化土であるため土砂の流出が著しく、遺構の残存状況は決して良好なものではないと思われる。推論の域は出ないが、山城造営当初は現状よりさらに深く堅牢なものであったと考えられ、土塁状の施設を付していた可能性もあろう。遺物は全く出土していない。

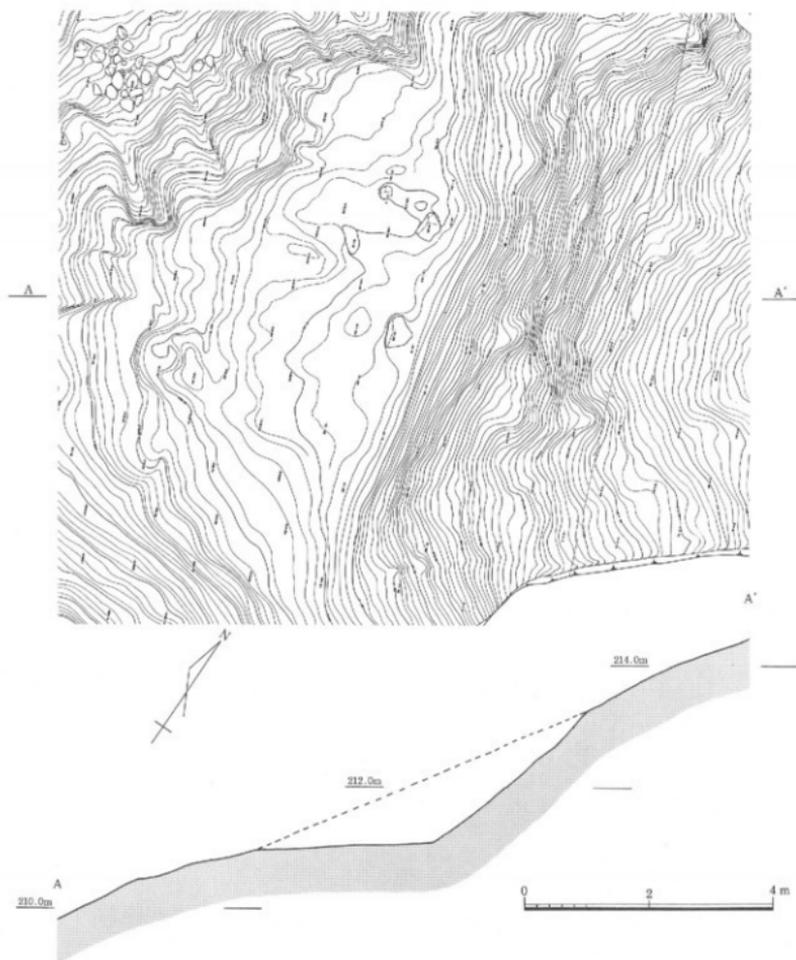
### 支尾根A／カット遺構S X-4(第74図)

主尾根中央部から西に向かって伸びる支尾根Aの斜面裾部分を、基底部での幅約8.5mにわたって、人為的にカットした遺構である。支尾根Aの斜面勾配は水平に対して約23°とかなりの急斜面であるが、カット部分ではさらに約45°となっている。

カット面の下部は、最大幅約8m、奥行き約3.5mの面積約20m<sup>2</sup>ほどの平坦面となっている。この平

坦面には、人頭大の石材が数個散乱した状態で検出されているが、これらの石材の用途は不明である。調査区内からこのような石材が検出されることは稀で、建物など何らかの山城に関連した施設に伴うものとも考えられる。

同様に支尾根Aの平坦面にも、数ヶ所に集中して石材の散布が認められた。これらの石材も建物に伴うものである可能性があるが、原位置を保っているとは考え難く、ピットなども存在しないので、どのような建物が存在したのかは明確にし得なかった。

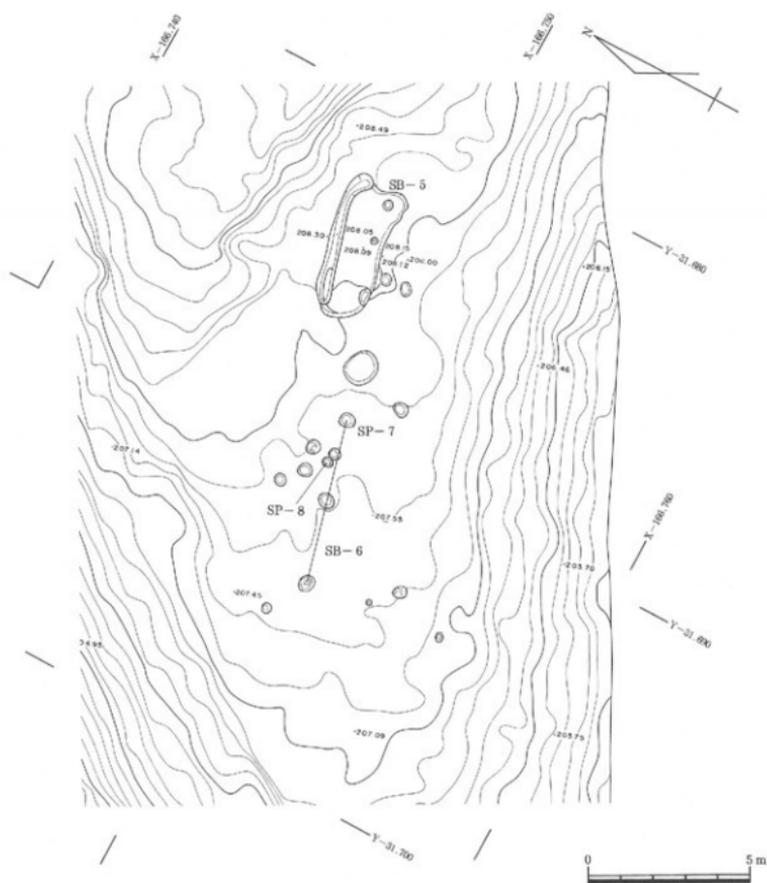


第74図 カット遺構 S X-4 実測図(1/80)

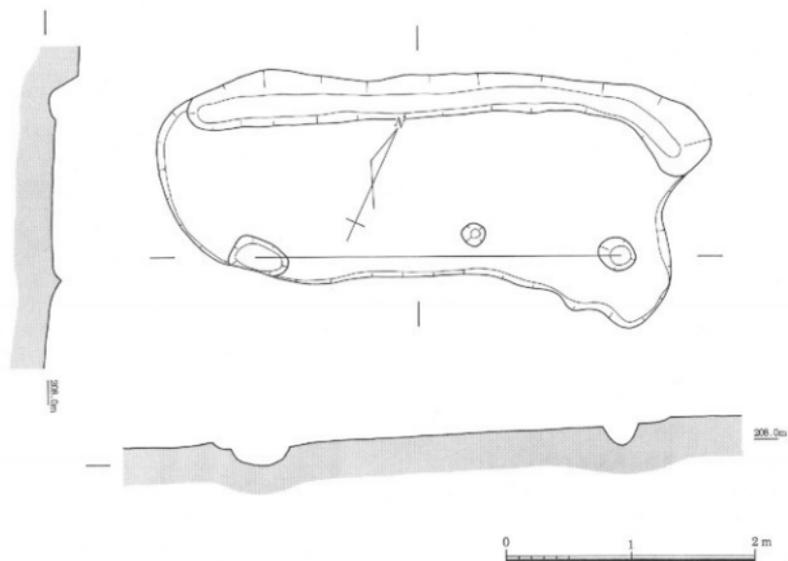
支尾根B／ピット群(第75図、第76図、第77図)

支尾根B先端の平坦面は、支尾根Aの平坦面に比し面積は狭いものの、ピット群を検出している。遺構内からも遺物も少なく、大規模な建物はなかったが、2棟の片屋根建物とも呼ぶべき遺構を検出した。

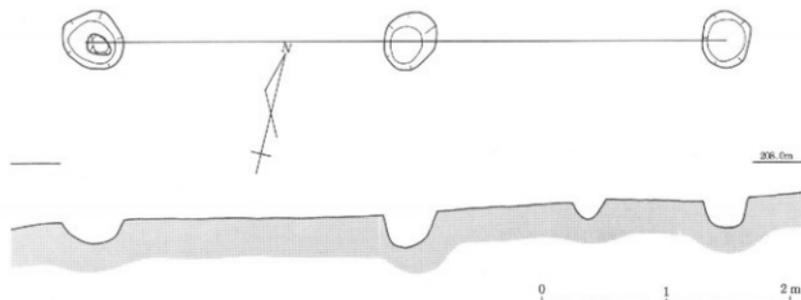
SB-5は、浅い皿状の土坑底に溝とピットを伴う遺構である。土坑は不整形な長円形を呈するもので、長さ約4.2m、幅約1.7m、深さ約0.1mの規模を有し、底部はほぼ平らである。東端部に3基のピットが並び、丘陵斜面上方にあたる反対側の西端部に、排水溝と見られる幅約38cm、深さ約5cmの溝が走る。ピットは直線上には並ばず、中心のピットは小さいため、補助的な柱とも思われる。両サイドの柱



第75図 支尾根B遺構配置図(1/150)



第76図 支尾根B/SB-5実測図(1/40)



第77図 支尾根B/SB-6実測図(1/40)

の心々距離は約2.8mである。土坑内からは細片の遺物が若干出土したのみで、埋土には焼土や炭が混入していたが、床面が焼けたような状況は看取されなかった。この遺構は3本の柱を立て、溝に向かって板材を斜めに渡した片屋根を有する簡易な建物と考えられ、片屋根建物と命名した。

SB-6は、3基のピットが1列並ぶのみの建物遺構である。SB-5のように土坑や溝などは伴わないが、柵列とも考え難く、先のSB-5と同種の片屋根建物と思われる。柱間寸法は約2.6mで、建物全長は約5.2mである。

### 第5項 出土遺物

遺物の出土量はコンテナ約3箱で、山地の調査のため調査面積に比して少量であった。遺物の出土は大まかに分別して、松山山城古墳、支尾根Aカット遺構下部、支尾根A平坦面、支尾根B平坦面から出土しており、主尾根上や斜面部分からの出土はほとんど皆無であった。この項では地区及び遺構毎に、遺物を概観することとする。

#### 松山山城古墳出土遺物

(第78図 1～6)

主体部出土の遺物は鉄釘2点と須恵器杯片1点、盗掘等に伴うものとして瓦器があるのみで特に古墳の時期を確定し得る遺物の出土は見られなかった。これらはいずれも、若干床面から浮いた位置から出土したものである。

主体部出土の須恵器は、図化し得なかったが、墳丘の南側の調査区端部から、この古墳に伴うものと考えられる須恵器杯身3点が出土している。これらの須恵器は3点とも径13cm程度の、底部ヘラ切り未調整のもので、7世紀中葉に属するものと考えられる。

5の鉄釘は頭部を欠くものの、先端部から8.5cmが残存していた。6は頭部のみ残片で、頭部は正方形を呈する。断面形は方形である。

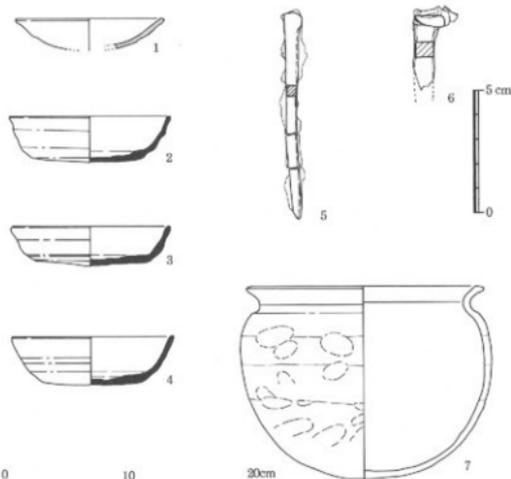
瓦器は残りは決して良いものではないが、尾上編年Ⅳ期前半<sup>㊦</sup>の範疇に収まるものと考えられ、山城の年代とそれほど大過ないものである。

#### 火葬墓SK-1 出土遺物 (第78図 7)

支尾根の松山山城古墳の東側から検出された、火葬墓の蔵骨器に利用された土師器甕である。甕は口径19.3cmで口縁部が短く、外に向かって開くもので、体部はほぼ円形を呈し、体部最大径は上半部にある。体部外面には指頭圧痕が多数認められ、内面はヘラケズリによって仕上げられている。この種の土師器は北岡遺跡出土資料によって編年が成されて<sup>㊦</sup>おり、9世紀中葉から後半に属するものと考えられる。

#### 火葬墓SK-2 (第80図 42・43)

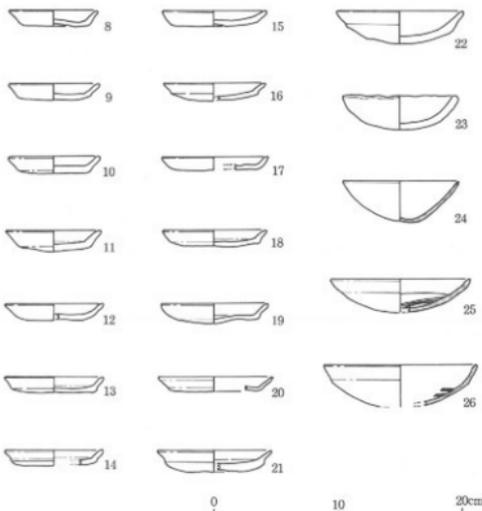
支尾根Aの平坦面肩部から検出した、火葬墓SK-2の蔵骨器である。いわゆる菜壺形の土師器で、身は口径15cm、体部径26.3cm、器高19.45cmで、高さ1.2cmの高台が付く。口縁部は短く上方へ立ち上がり、丸く仕上げられている。体部に付く耳は先端部を欠いているが、破片は見えず、状況から埋葬



第78図 出土遺物(古墳、火葬墓)(1/4、1/2)

時に意識的に欠かれたものとも考えられる。蓋は低い宝珠形のつまみを付すので、器高5.1cm、径20cmを測る。端部は外に開くもので、肩の屈曲部の稜はかなりにぶいものである。この種の蔵骨器は須恵器のものが良く見られるが、その年代を確定するのは困難である。

須恵器葉壺形蔵骨器では、器総高に対する胴部最大径位置から口縁部上端までの高さの比率（胴高指数）と、器総高に対する胴部最大径の比率（径高指数）の変化から、おおまかな年代推定が成されている<sup>3)</sup>。この手法を援用すれば、本資料は胴高指数14.4、径高指数73.6となり、8世紀前半の年代が付与される。



第79図 カット面下部出土遺物(1/4)

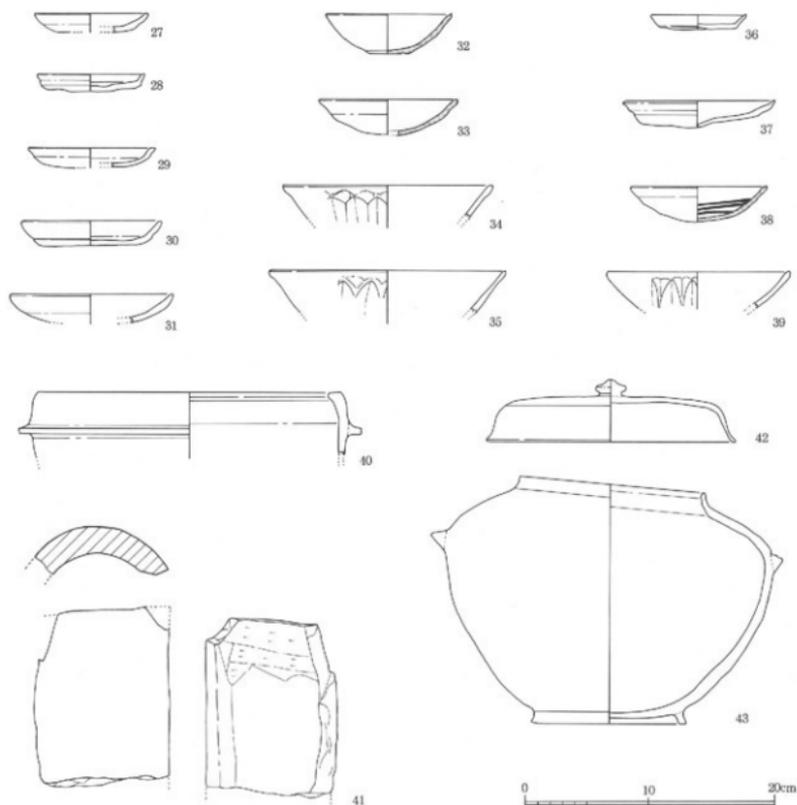
#### カット遺構 S X-4

(第79図8~26・第80図41)

支根Aに位置するカット遺構 S X-4 下部の平坦面から出土した遺物は、大半が土師器小皿であり、一部瓦器が認められる。土師器小皿は口縁部の形状から、口縁部と底部にヨコナデによる段を有し、口縁部が外反する形態のものと、単純に丸く仕上げられるものの、大まかに2タイプに分類される。23は手づくねの土師器で、丸い底部に口縁部が未調整である。器壁は厚く、かなりにぶい作りの印象がある。瓦器は3点が図化できたが、うち24は大和型、25・26は和泉型である。大和型の24は、小型のいわゆるコップ型とか湯呑型と称されるもので、口径が小さく、体部が深い。口縁部内面には沈線が巡り、高台は粘土をなで付けただけである。見込みの暗文は観察不能であった。和泉型の25・26は、小ぶりな浅い体部を有し、見込み部には粗略なラセン状暗文を施していることは共通するが、25に比して26は器壁も薄く、焼成も堅緻である点が異なる。41の瓦はこれら土器類に混じて1点のみ出土したものであり、瓦葺き建物の存在を想定させる量ではない。

#### 支根A / 平坦面 (第80図27~35・40)

支根Aの平坦面からは、明確な遺構は検出されなかったが、表土内から若干の遺物が出土している。遺物には土師器小皿、瓦器碗、青磁碗、土師器土釜などが見られる。青磁碗は、植田遺跡からも比較的少量に出土していることと併せて興味深い。山城という遺跡の性格を考えた場合、異質な印象を受ける。瓦器碗は小片であるが先記のカット遺構 S X-4 と同様、大和型と和泉型の双方が認められ、型的にも類似したものである。土師器土釜は「大和H<sub>2</sub>型」に分類されるもので、瓦器だけでなく土釜にも大和からの土器搬入が認められる。



第80図 出土遺物(その他) (1/4)

支尾根B／遺構 (第80図 36～39)

支尾根Bからの出土遺物で図示したものは、いずれも遺構からの出土である。ここでも青磁碗が認められるなど、総合的に他地区と共通した様相を呈する。SB-5出土の36は径7.6cmの小型の土師器小皿で、平らな底部と口縁部とは明確な段を有し、端部は自然に丸くおさまられる。同じくSB-5の39は、口径14.7cm、残存高3.0cmを測る青磁碗の小片である。釉色はやや暗い印象の淡緑色で器面も粗く、仕上げはあまり良質ではない。外面には蓮弁文が施され、口縁端部は肥厚する。37はSP-7出土で、比較的大型の土師皿である。成型はかなり歪で、据わりが悪く、口縁部の形状も悪い。口縁端部には2度のヨコナデを施しており、調整時の段が明瞭に残る。器壁外面の大半と内面2分の1程度に黒斑が残る。38はSP-8出土の和泉型瓦器碗で完形で出土した。器面への炭素の吸着が悪く、全体的に白っぽい色調を呈する。高台は付されず、内面見込み部のミガキも、かろうじてラセン状であることが看取される。

## 第6項 小結

本遺跡の調査では、7世紀代に属する新規古墳の発見、奈良から平安期に至る火葬墓の発見、14世紀後半に属する中世山城の発見の大きく3点の成果があった。最後に本調査における成果とその問題点、今後の展望について簡単にまとめておきたい。

### (1) 一須賀古墳群における松山山城古墳の位置付け

松山山城古墳は7世紀中葉前後の築造にかかるものと考えられ、後述する一須賀N支群の古墳と共に、一須賀古墳群においては比較的新しい時期の資料として、貴重な成果が得られた。一須賀古墳群中において、この時期の築造にかかるものはそれほど顕著には認められるものではない。築造時期や石室の構造などからみて、N支群の南東に位置するP支群との関係が注目されるところであるが、N支群が無袖の小型化したタイプの石室であることから、時期的にはP支群と比べ、より後出するものであると考えられる。一須賀古墳群の群構造については、その分布状況から最北端のI群、中央部のII群、丘陵頂上部のIII群に分類されているが、大半の古墳は北あるいは北西方向に伸びる丘陵上に占地しており、明らかに北方を意識していると考えられるのに対し、N支群とP支群が正反対の南向き斜面に築造されている点で、別のグループを考える必要がある。P支群の南側一帯は、土砂採取によってまったく旧状を残していないが、従来この一帯にも古墳が存在していたという指摘もあり、山塊の北側一帯に分布する一須賀古墳群と南側のN・P支群や既に消失してしまったと考えられるこれら古墳とは、全く異なる群として捉えられたほうがより明解であろう。N・P支群の南側の谷には、終末期のアカハゲ・塚廻り古墳が位置するほか、加納古墳群が所在し、これら古墳(群)との関係に注目する必要がある。

また本古墳は丘陵ピークの南斜面を利用し、後背部を周溝によって画することによって墳丘を構築するもので、N支群は東に伸びる丘陵の南斜面に立地し、いずれも終末期においてはごく一般的な在り方をしている。しかしN支群が4基前後の群を構成するのにに対し、本古墳が単独で立地する点が大きく異なり、標高も本古墳の方がはるかに高い位置にある。これが何に起因するものか不明であるが、古墳単体の規模や内容を差し引いたとしても、両者に何らかの階層制、あるいは集団構造の相違を見いだすことも可能であるとも言えよう。

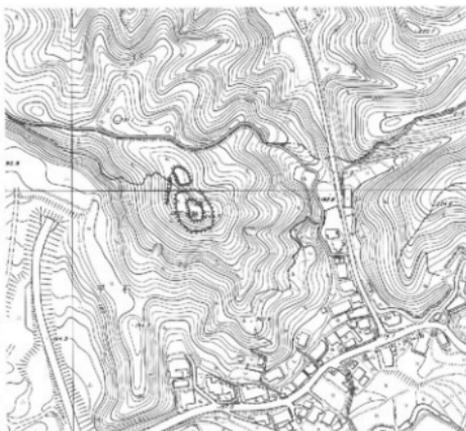
### (2) 山城施設における松山山城遺跡の性格

これまで河内地域における中世山城遺跡の調査は、現況地形による縄張り図の作成が主たるもので、発掘によって全体が調査された例はそれほど多くはなく、貴重な資料を得られた。

現在の河南町平石は、役行者の葛城二十八院の一として開かれたという香花寺(現在の高貴寺)や善成寺を初め、山岳仏教隆盛の頃には平石谷に字名の残る大門跡から奥には堂塔伽藍が点在していたと言う。平石城は鎌倉時代初期からこの平石を本拠地とし、善成寺の大増城であった平岩氏の城であったと言われ、左衛門尉平岩茂直の時に南北朝時代を迎え、現在の千早赤飯村一帯に本拠を置いた楠木氏と共に南朝方に与した。元弘の乱(1331)では楠木氏と共謀し、笠置城落城ののちは後醍醐天皇を平石城に迎えようとしたことが『平石城旧記』にある。また延元元年(1336)5月25日から同2年3月10日の合戦を記した南朝方岸和田治氏軍忠状(和田文書)には平石源次郎の名が見える。正平14年(1359)12月、足利義詮が河内国南部に軍を進めたときには、南朝軍の福塚・川辺・佐々良・当木・岩郡・橋本判官らに率いられた約500騎の軍兵が立て籠もった事が『太平記』巻34(新将軍南方進発事付軍勢狼藉事)にみえ、同・平石城軍の事は延文5年(正平15、1360)5月に将軍足利義詮が畠山国清に命じた河内攻めによって、平石城も平石谷の堂塔と共に焼失したと言う。

平石城跡は河南町平石の集落の西方、通称城ヶ塚、または鎮守山と呼ばれる標高244.5mの丘陵頂に位置する。頂部には約990㎡ほどの平坦地があり、この部分が平石城の主郭にあたる。城跡の東側を通る町道畑平石線は、太子町南部と河南町をつなぐ交通の要衝にあたり、また南側の平石の集落内を通る道路は平石峠に通じ、大和と河内を結ぶ交通路であり、軍事的に重要な位置にある。

中心部が未調査のため、築城時期など不明な点が少なくないが、立地から見て今回調査した中世山城の周辺施設と考えられる松山山城遺跡と蜂ヶ尾遺跡が、相互に密接な関係にあったと考えることは



第81図 平石城位置図(1/5,000)

さほど問題ないものとし、現状から想定されるこれら山城遺跡(群)について考えて見る。従来の表面調査で示された平石城跡の縄張り図は先の主郭部分のみで、主郭と副郭1の計2郭が認識されているに過ぎない。今回の調査で、この周辺に広範囲にわたって山城に関係する施設が拡大されていることが判明したわけがあるが、それらはいずれも大規模な曲輪などを伴うものではなく、極めて散漫な遺構分布を示している。建物跡を伴って集中的に遺構が検出されたのは、狭い平坦面から2棟の片屋根建物が検出された松山山城遺跡の支尾根B、竪穴建物1棟が検出された蜂ヶ尾遺跡I区のみで、松山山城遺跡の支尾根Aでは遺構は検出されなかったが、比較的広い平坦面を有し、当初は何らかの施設が存在した可能性が考えられる程度である。これらはいずれも丘陵の高所に位置するものでなく、防衛的に見てそれほど有効でないと言える比較的低い尾根の突端部に立地する。軍事的要素を重視するなら、最も有効と思われる松山山城遺跡の丘陵頂からは建物は検出されず、建物が存在したと想定されるような平坦面の造成すらも確認できなかった。これらの状況からは、松山山城遺跡と蜂ヶ尾遺跡が戦闘的色彩の強い施設として機能したと考えるには否定的な側面が強い。すなわち戦闘的な城としての平石城跡の中心部分に対して、位置的にも離れたこれら遺構が非戦闘員の逃げ場のな場として理解できるのではないだろうか。蜂ヶ尾遺跡の竪穴建物が最も敵の侵入を受けやすい尾根側に何ら防衛的な施設を付していないと思われ、むしろ松山山城遺跡と同様、位置的に目立たない谷奥部の低丘陵上に占地することもそういう観点からは理解できよう。近年の城郭研究で、横山勝栄氏の研究を先駆とする「村の城」論をきっかけとし、同様の視点に立ち民衆の側から山城を論じた「山小屋」論争が展開されている。そうした中で曲輪内部における竪穴建物の集中的分布を緊急時における民衆の避難小屋として位置付ける考え、あるいは本来的に避難小屋は城外に存在するものとする考えなどが示されている。本遺跡例は現状から考えた場合、戦闘的な城の内部に民衆の避難小屋としての施設が取り込まれることなく、立地上区別されて営まれたものと考えられる。また出土遺物から見た松山山城遺跡の存続年代は14世紀後半に当たり、先に見た文献上の平石城末期の時期とほぼ整合するものである。平石城の築城年代はよく知れないが、松山山城遺跡や蜂ヶ尾遺跡からは古い時期の遺物は確認できず、南北朝末期の動乱時に主郭の補助目的に造営された

のではないと思われる。

次に本遺跡と共に今回調査が実施された植田遺跡との関係であるが、同遺跡は自然地形を利用した防壁上有効な立地にあり、一般集落と考えるには異常なほどの中国産青白磁や搬入土器、鉄鎌の出土、あるいは凝灰岩切石を使用した建物の存在など、付近に勢力を張った地方領主の居館と考えられ、14世紀後半に何らかの原因で焼失したことは南北朝末期の動乱と全く無関係であるとは考えにくい。植田遺跡は松山山城遺跡から北方約900mの丘陵裾に立地しており、平地の居住域と有事の際の山城という有機的な関係にあったと考えることは、状況的にそれほど無理はないであろう。しかし若干の疑問がない訳ではない。遺物の上から松山山城遺跡と蜂ヶ尾遺跡からは、大和型土器の出土がかなり認められたにもかかわらず、植田遺跡からは14世紀に属する大和型の遺物の出土はほとんど認められないことである。ここでは平石氏が南北朝当時、太子町南部とどのような関係にあったのかを明らかにできなかったが、今後両地域間の関係を考える中で文献資料の検討も含め、総合的な視点で考えてみたいと思う。

以上、松山山城遺跡と蜂ヶ尾遺跡は、14世紀後半を中心とした時期の民衆の城障りのための施設と考えられることを述べた。これまで山城全域が発掘調査によって実態把握されることは少なかったが、近年の大規模な開発によって徐々にではあるが、その全体像が明らかになりつつある。南河内地域は南朝方の楠木氏の勢力基盤として重要な拠点であった。本遺跡は南河内地域における南北朝末期の山城施設を考える場合の、重要な一資料となるものであろう。

(池田)

- ①山本彰 『一須賀古墳群分布調査概要』 大阪府教育委員会 1982
- ②平石城の概要は、以下の文献に拠る。
- a 『河南町誌』 河南町 1968
- b 『日本歴史地名大系28 大阪府の地名II』 平凡社 1986
- c 『日本城郭大系 第12巻 大阪・兵庫』 新人物往来社 1981
- ③尾上実 「南河内の瓦器概観」 『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』 1983
- ④上田睦 「北河内遺跡出土平安時代土器について」 『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅷ』 藤井寺市教育委員会 1993
- ⑤黒崎直 「近畿における8・9世紀の墳墓」 『研究論集Ⅵ』 奈良国立文化財研究所 1980
- ⑥菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」 『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』 同朋社出版 1983
- ⑦山本彰ほか 『一須賀古墳群P支群発掘調査報告書』 河南町教育委員会 1983
- ⑧上野勝巳 「一須賀古墳群分布調査」 『古代学研究』 50 1966
- ⑨前掲文献⑦
- ⑩前掲文献②-c を参考に作成
- ⑪横山勝栄 「新潟北部の中世の小型城郭について—中世城郭研究基礎資料—」 『昭和63年度研究紀要』 新潟県東蒲原郡三川 村立三川中学校 1988
- ⑫a 笹本正治 「戦国時代の山小屋」 『信濃』 36巻7号 1984
- b 小穴芳美 「山小屋は逃避小屋か—笹本正治氏の「戦国時代の山小屋」を読んで—」 『信濃』 36巻10号 1984

表13 松山山城遺跡遺物観察表① 土器

遺物番号	出土遺構及び層位	種別	器種	容量(単位:cc)	調整、特徴など	胎土	焼成	色調	備考
1	松山山城古墳主体部 床面	瓦器	碗	口径10.0、残存器高 2.4	口縁端部:ココナデ ラセン状縦文	調整	良	黒灰色	
2	松山山城古墳南側	須臾器	酒杯・身	口径12.9、器高 3.8	底部へラ切り未調整、内外面回 転ナデ、1/3残存	細砂粒を 若干含む	良好堅緻	暗灰色	
3	〃	須臾器	酒杯・身	口径13.0、器高 3.4	底部へラ切り未調整、内面回 転ナデ、内面底部不整方向ナデ	細砂粒を 若干含む	良好堅緻	青灰色	
4	〃	須臾器	酒杯・身	口径13.0、器高 4.0	底部へラ切り未調整、外周から 内面底部回転ナデ、内面底部不 整方向ナデ	細砂粒を 若干含む	良好堅緻	暗青灰色	

表14 松山山城遺跡遺物観察表② 土器

遺物番号	出土遺構及び層位	種別	器種	法量(単位:cm)	調整、特徴など	胎土	焼成	色調	備考
7	大井基SK-1	土師器	罍	口径19.3、器高15.8 体部最大径20.35	口縁部ヨコナデ、体部外面に指頭圧痕、3ヶ所に整合痕	石英小片混入	良好	暗赤褐色	
8	カット遺構SX-4	土師器	小皿	口径7.2、器高1.05	端部ヨコナデ	細砂粒を含む	良	暗赤褐色	
9	〃	土師器	小皿	口径7.4、器高1.4	端部ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	茶褐色	
10	〃	土師器	小皿	口径7.4、器高1.3	端部ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	淡灰褐色	
11	〃	土師器	小皿	口径7.8、器高1.7	端部ヨコナデ	細砂粒を多く含む	良	淡灰褐色	
12	〃	土師器	小皿	口径8.0、器高1.4		細砂粒を若干含む	良	茶褐色	
13	〃	土師器	小皿	口径8.0、器高1.4	外面端部ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	赤褐色	
14	〃	土師器	小皿	口径8.0、器高1.3	端部ヨコナデ	細砂粒を含む	良	暗赤褐色	
15	〃	土師器	小皿	口径8.3、器高1.3	端部ヨコナデ	細砂粒を含む	良	暗赤褐色	
16	〃	土師器	小皿	口径8.2、器高1.4	端部ヨコナデ、口縁部外反	細砂粒を多く含む	良	暗赤褐色	
17	〃	土師器	小皿	口径8.5、器高1.1	端部ヨコナデ?	細砂粒を若干含む	良	乳褐色	
18	〃	土師器	小皿	口径8.4、器高1.4	端部ヨコナデ	細砂粒を多く含む	良	淡赤褐色	
19	〃	土師器	小皿	口径8.6、器高1.6	端部ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	淡灰褐色	
20	〃	土師器	小皿	口径9.2、器高1.2	端部ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	明赤褐色	
21	〃	土師器	小皿	口径9.3、器高1.8	外面端部ヨコナデ、底部磨盤が深い	細砂粒を若干含む	良	茶褐色	
22	〃	土師器	小皿	口径10.4、器高2.7	端部外面ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	乳赤褐色	
23	〃	土師器	碗	口径9.4、器高2.8	手づくね、内面不整方向ナデ 口縁部不整形	細砂粒を多く含む	良	淡乳褐色	
24	〃	瓦器	碗	口径9.6、器高3.3	大和型、内面端部に広い沈積 高台はナデ付けるのみ	細砂粒を若干含む	やや不良	暗灰白色	
25	〃	瓦器	碗	口径11.2、器高2.7	和泉型、端部ヨコナデ、ラセン 状輪文	細砂粒を若干含む	やや不良	灰褐色	
26	〃	瓦器	碗	口径12.4、残存器高3.4	和泉型、端部ヨコナデ、ラセン 状輪文	細砂粒を含む	良	明灰色	
27	支尾根A平面	土師器	小皿	口径9.2、器高1.5	端部ヨコナデ	細砂粒多量を含む	良	茶褐色	
28	〃	土師器	小皿	口径8.5、器高1.5	端部ヨコナデ、外面底部に指頭 圧痕	細砂粒を若干含む	良	茶褐色	
29	〃	土師器	小皿	口径10.2、器高1.6	端部外面ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	茶褐色	
30	〃	土師器	小皿	口径11.3、器高1.9	端部ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	赤褐色	
31	〃	土師器	小皿	口径13.2、残存器高2.3	端部ヨコナデ	細砂粒を若干含む	良	茶褐色	
32	〃	瓦器	碗	口径10.0、器高3.3	大和型、磨減のため調整不明、 高台ナデ付け	褐色	不良	灰黒色	
33	〃	瓦器	碗	口径11.2、残存器高2.9	和泉型、端部外面ヨコナデ?	細砂粒を若干含む	良	明灰色	
34	〃	青磁	碗	口径16.8、残存器高2.9	小片、葉弁文	褐色	良好堅硬	淡緑色	
35	〃	青磁	碗	口径9.5、残存器高3.5	小片、葉弁文	褐色	良好堅硬	淡緑色	
36	SB-5	土師器	小皿	口径7.6、器高1.2	端部ヨコナデ	細砂粒を多く含む 小石を多く含む	良	淡赤褐色	
37	SP-7	土師器	小皿	口径12.2、器高2.2	外面端部ヨコナデ	細砂粒を若干含む	やや不良	暗赤褐色 灰黒色	
38	SP-8	瓦器	碗	口径11.0、器高3.0	外面端部ヨコナデ、ラセン状輪 文、高台形、灰素混着不良	褐色	不良	淡灰褐色	
39	SB-5	青磁	碗	口径14.7、器高3.0	葉弁文	褐色	良好堅硬	淡緑色	
40	支尾根A平面	土師器	土釜	口径24.2、残存器高5.3	鉢から内面端部ヨコナデ、内面 下部不定方向ナデ、口縁部 を内側に折り曲げる、大和型	細砂粒を含む	良	乳白色	
41	カット遺構SX-4	瓦	丸瓦	残存幅10.8、残存長14.6	内面端部へラズリ、春日原外 遺構方向のナデ	褐色	良	灰黒色	
42	大井基SK-2	土師器	葉形壺身	口径50.0、器高5.1 つまみ径1.35	磨減のため調整不明	細砂粒を含む	やや良	明褐色	
43	〃	土師器	葉形壺身	口径15.0、器高19.45 高台径12.5、高台高1.2 体部最大径25.3	端部ヨコナデ、高台部ヨコナデ 両耳を打ち欠く?	細砂粒を若干含む	やや良	明褐色	

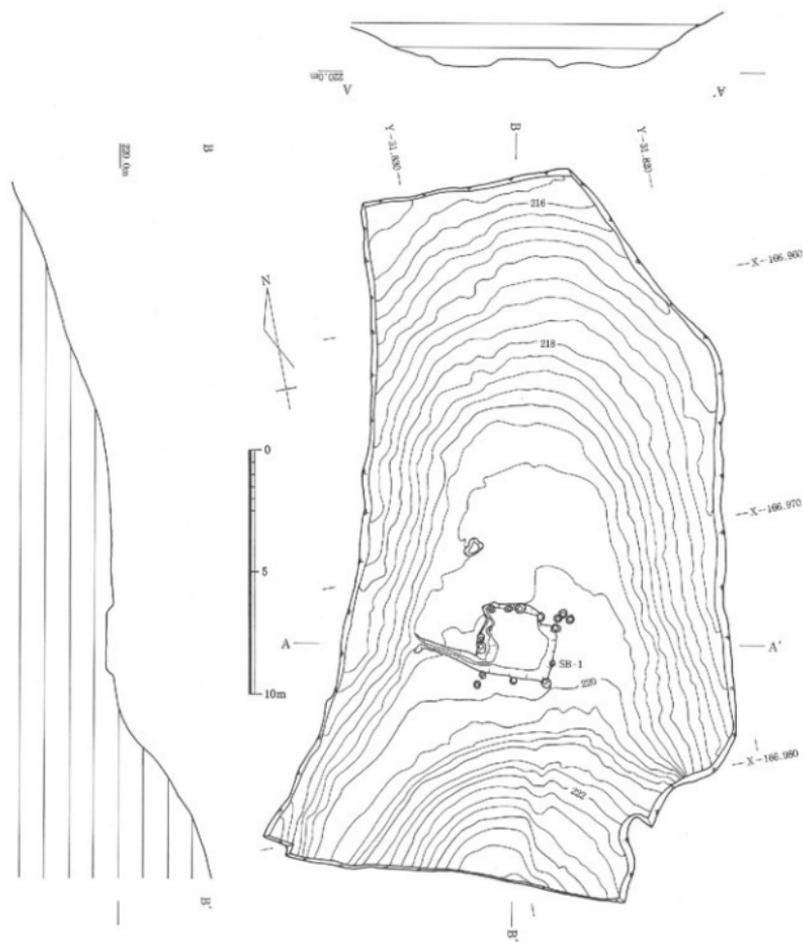
表15 松山山城遺跡遺物観察表③ 鉄釘

遺物番号	出土遺構及び層位	種別	法量(単位:cm)		頭部の形態	木目の状態	備考
			全長(残存長)	断面(縦×横)			
5	松山山城古墳主体部	鉄釘	(8.6)	0.4×0.4	—	—	頭部欠損
6	〃	〃	(3.05)	0.75×0.6	方形	—	

## 第6節 蜂ケ尾遺跡の調査

### 第1項 はじめに

蜂ケ尾遺跡は、以前から山城の可能性があると認識されていたところで、試掘調査によって遺構が確認され、付近の小字名をとって蜂ケ尾遺跡と命名した。本調査は平成6年7月末に始まり、同年10月に終了した。調査面積はⅠ・Ⅱ区を合わせて1,400㎡である。



第82図 Ⅰ区全体図(1/200)

## 第2項 遺跡の立地

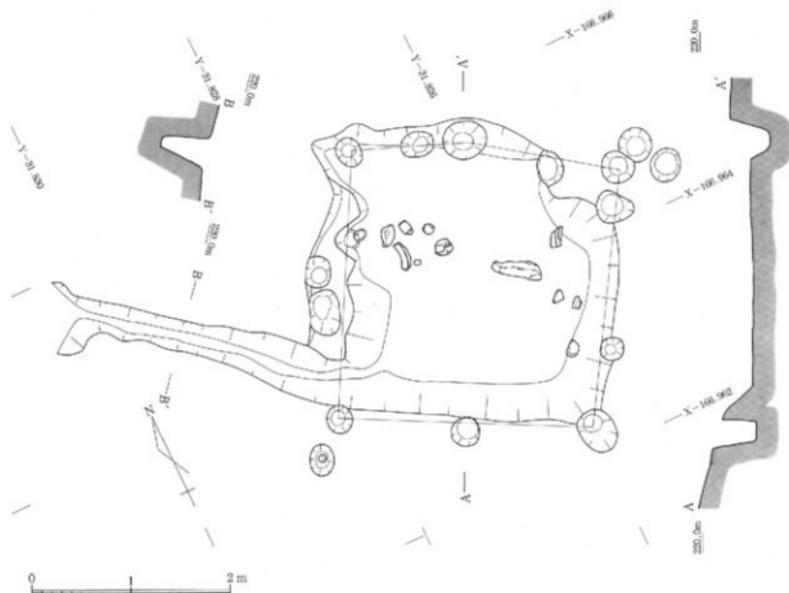
太子カントリー倶楽部事業地の南西端にあり、府指定史跡平石城跡(標高244.5m)の西方約500mに位置する。平石城跡から西にのびる尾根から北に向かって派生する2つの尾根上に遺跡は立地する。北側は入りくんだ谷になっており、眺望はよくない。北約150mに一須賀古墳群N支群が、北東250mに松山山城遺跡が存在する(第67図)。東側の尾根がⅠ区、西側がⅡ区である。

## 第3項 Ⅰ区の調査

**遺構** 北に向かってのびる尾根の中央、やや基部よりの部分を削平して幅8m、長さ12mの平坦面を造成している。この平坦面の基部よりに竪穴建物をつくっている(第82図)。平坦面の標高は220m、基部の標高は229mを測る。

竪穴建物(第83図)は、平面形はややいびつであるが、一辺3mの正方形に地山を約35cm掘り窪めている。竪穴の周囲には北壁に沿って3本、南壁に沿って3本、計6本の柱を配している。南側の柱は等間隔で柱心もほぼ通るが、北側は等間隔ではなく柱心も通らない。また、北側の柱は壁ぎわにあるのに対し、南側は竪穴の外側である。壁溝や炉はみられない。南西隅から西側の谷に向かって排水溝がつけられている。排水溝は長さ3m、幅30~50cmで、断面逆台形を呈し、深さ50cmを測る。建物南側は急な造成斜面となっている。

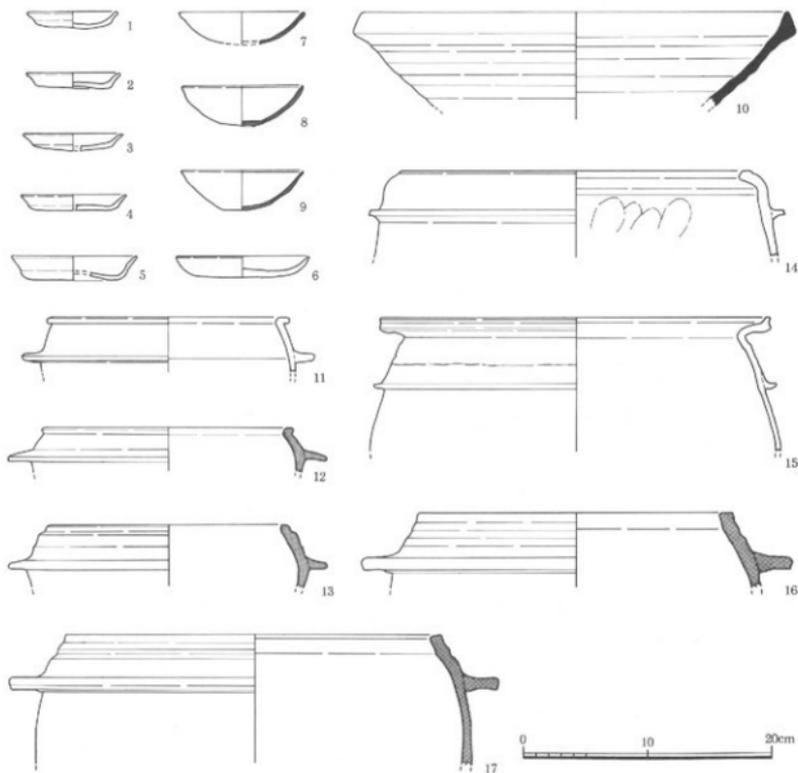
建物の内部は黄褐色の砂で埋まっており、この埋土は分層できなかったので一気に埋まったようである。床面からやや浮いた状態で遺物が出土している。



第83図 竪穴建物SB-1(1/50)

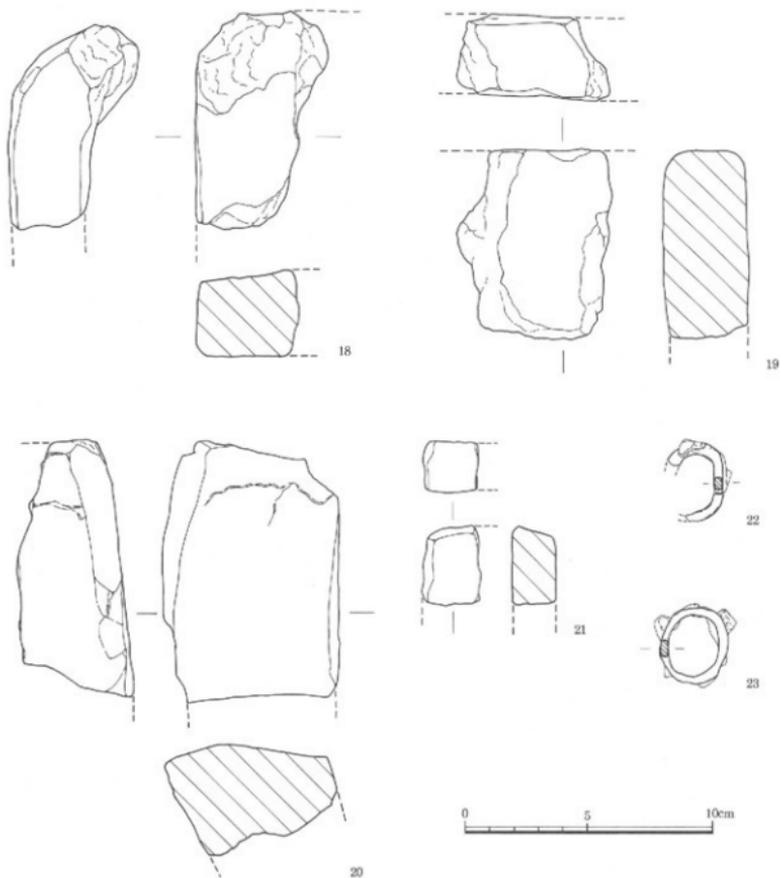
遺物(第84・85図) 上層からはほとんど遺物は出土しておらず、ここに示すのはすべて堅穴建物から出土したものである。建物からはコンテナ2箱程度の量の遺物が、前述したようにすべて床面から浮いた状態で出土している。図化できたのは23点である。

土師器皿(第84図、1～6)。1～5はいずれも口縁部を強くヨコナデし、外反ぎみの口縁をもつ。口縁端部はまるくおさめる。口縁部と底部の境目には明確な段がある。口径8cm前後で、器高1.5cm未満のもの(1～4)と、口径が10cmを越え、器高も1.5cmと深い、やや大型のもの(5)がある。6は口縁部外面にヨコナデを施すが、全体的に調整は丁寧でなく器壁も厚い。底部外面は未調整で粘土の継目痕が残り、切り込み円板技法を用いて成形した可能性がある。瓦器碗(第84図、7～9)は、和泉型のもの(7)と大和型(8・9)がある。7は口径10cm強、器高は3cm弱と縮小化がかなりすすんでいる。8・9はいずれも口径10cm、器高3.4cmとほぼ同形同大であるが、8には形骸化した高台が付くが、9には高

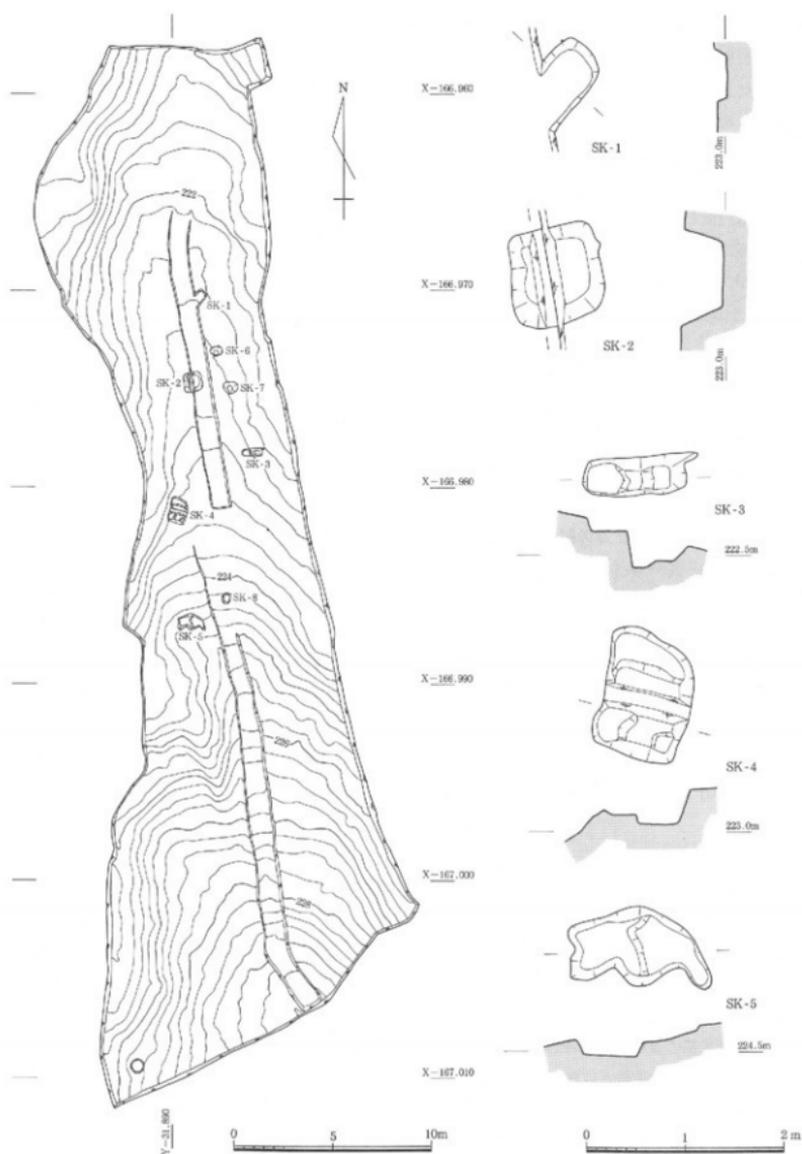


第84図 蜂ヶ尾遺跡Ⅰ区出土遺物①(1/4)

台がない。9の外面には重ね焼きの痕跡が認められる。7は尾上編年のⅣ-4、8・9は近江編年のⅢ-Eに相当する。土釜(第84図、11~17)は、土師質のもの(11・14・15)と瓦質のもの(12・13・16・17)がある。11は「く」の字に外反する口縁部をもち、肩部に水平に鈔をめぐらす。口縁内外面ともヨコナデを施す。14は内湾する口縁部をもち口縁端部はまるくおさめているが、上面を若干くぼめている。肩部には突出度の低い鈔をめぐらす。調整は内外面ともヨコナデであるが、肩部の内面に指頭圧痕を残す。15は「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上方に折り返し、外面に凹線がめぐる。肩部に突出度の低い鈔をもつ。胴部の径は鈔の径を上回る。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はナデ、外面は



第85図 蜂ヶ尾遺跡Ⅰ区出土遺物②(1/2)



第86図 蜂ヶ尾遺跡II区遺構図(1/250、1/50)

削った後にナデを施している。14、15はいわゆる大和型の土釜である。12は内傾する口縁をもち端部は外側にまるくおさめている。肩部に下降する銚をもつ。13・16・17は内傾する口縁で肩部に水平に銚をもつ。口縁部外面には強いナデによる段がめぐり、端部は平坦面をつくっている。内面は削った後、端部付近にヨコナデを施している。17の体部外面は横方向のケズリを施している。10は東播系須恵器の捏鉢で、口縁部は外反せず、端部は三角形状を呈し、上端部はまるくおさめる。端部外面から体部への変換点にかけて自然釉がかかり重ね焼きしている状況が窺える。森田編年のⅢ-2に相当する。18・19は凝灰岩の石材である。淡黄灰色を呈し、5～20mmの礫を含む。厚さ3cmで、18は先端部分が屈曲している。18は内面が、19は両面とも焼けている。本来の形状は不明で、用途もわからない。22・23は長径32mm、短径26mmの楕円形の鉄製品である。輪の幅は6mm、厚みは3mmを測る。刀の鞘金具のような形をしているが、小型のために鞘金具とは考えにくい。用途は不明である。その他、使用痕のある砥石(20・21)が出土している。

#### 第4項 II区の調査

I区の西隣の尾根に位置する。I区のように尾根を人為的に改変してはいなかったが、調査区の中程から北側で8基の土坑が検出された。

**遺構(第86回)** SK-1は90cm以上×55cmの隅丸長方形の土坑で、深さは10cmを測る。壁は焼けているが底までは焼けていない。SK-2は一辺1mの隅丸方形の土坑で、深さは40cmを測る。SK-1と同じく壁が焼けている。土器の細片が1片出土している。SK-3は100×40cmの隅丸長方形の土坑で、底は3段になっている。最深部の深さは40cmを測る。SK-4は125×90cmのややいびつな隅丸長方形の土坑で、底は2段に掘り窪められ、深さ35cmを測る。SK-5はSK-1・2と同じく壁が焼けた土坑である。不整形で、底も2段に掘りくぼめられている。規模は140×80cm、深さ20cmを測る。SK-6は65×50cmの楕円形で、深さ45cmを測る。底は20cmとすばまっている。炭混じりの土で埋まっており、土器片が1点出土している。SK-7は70×55cmの楕円形で、深さは45cmを測る。SK-7とはほぼ同形であるが埋上に炭は混じらない。SK-8は径45cmの円形で深さは30cmを測る。

**遺物** SK-2・6から土器が出土しているが図化し得なかった。いずれも外面に細かいハケメが施され、内面は削っている。古墳時代から奈良時代の甕の体部と考えられる。

#### 第5項 小結

I区では尾根の人為的な改変と、この改変によって生み出された平坦面に堅穴建物が確認された。堅穴建物の上層構造は不明であるが、いずれにせよ簡単な構造であったと考えられる。建物出土の遺物は若干の時期幅がみられるが、廃絶時期は14世紀中頃と考えられる。1360年に落城したとされる平石城との関連が考えられるが、造成した急斜面を背面にするなど戦闘的な遺構とは考えにくい。非戦闘員の緊急避難小屋的なものであろうか。

II区では8基の土坑が検出され、2基の土坑から古墳時代から奈良時代と考えられる土器が出土しているが、この時期の遺構とは決しがたい。焼土坑については別項でも報告しているが、今回の調査では、5ヶ所の調査区で計17基が確認されている。いずれも、壁は赤く焼けているが底は焼けていない。埋土に炭を含むなど共通性は多いが、ここで出土土器の他、焼土坑群A地区のI基から中世の土器片が、B地区の表土から古墳時代の須恵器片が出土しているだけで、時期や性格には不明な点が多い。(赤井)

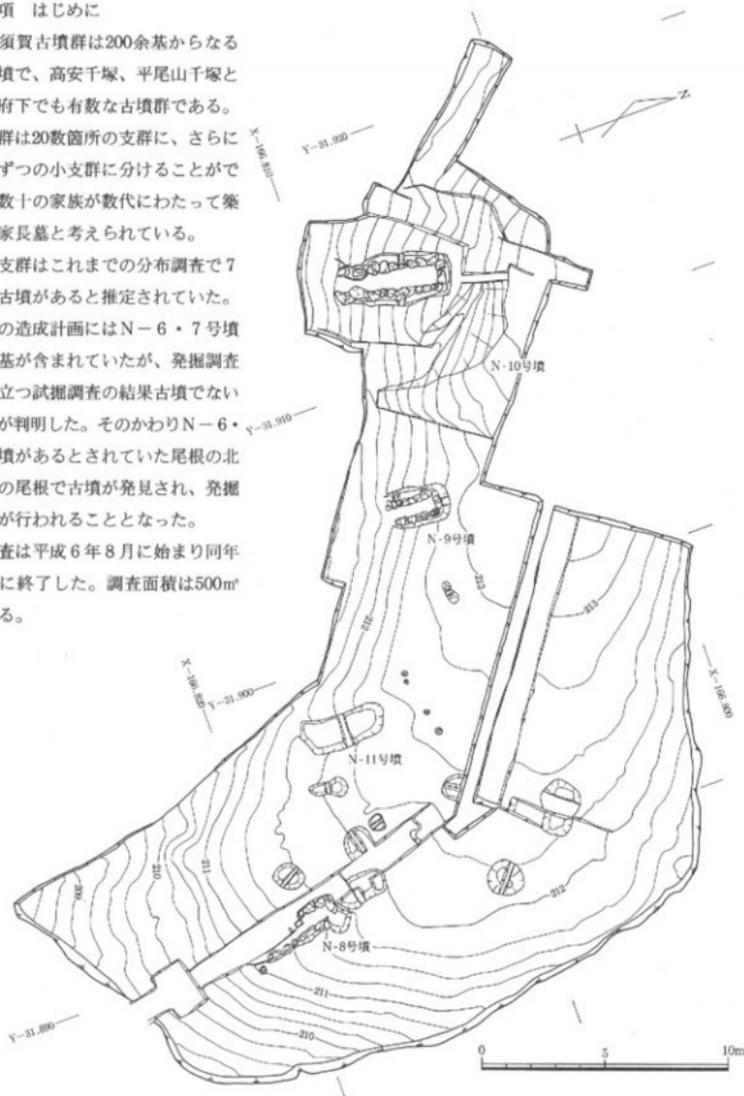
## 第7節 一須賀古墳群N支群の調査

### 第1項 はじめに

一須賀古墳群は200余基からなる群集墳で、高安千塚、平尾山千塚と並ぶ府下でも有数の古墳群である。古墳群は20数箇所の支群に、さらに数基ずつの小支群に分けることができ、数十の家族が数代にわたって築いた家長墓と考えられている。

N支群はこれまでの分布調査で7基の古墳があると推定されていた。今回の造成計画にはN-6・7号墳の2基が含まれていたが、発掘調査に先立つ試掘調査の結果古墳でないことが判明した。そのかわりN-6・7号墳があるとされていた尾根の北東隣の尾根で古墳が発見され、発掘調査が行われることとなった。

調査は平成6年8月に始まり同年11月に終了した。調査面積は500㎡である。



第87図 一須賀古墳群調査区全体図(1/200)

N支群は古墳群の最南端にあたり、今回の調査区は南東から南方向へ屈曲するようにのびる尾根の中央部に位置する(第67・87図)。古墳は、稜線上ではなく稜線から一段下がった南斜面に4基が並んで営まれており、発見順にN-8~11号墳と命名した。N支群の谷をはさんで南200m、蜂ヶ尾遺跡が存在する尾根の主尾根には、やはり稜線から南に一段下がったところにP支群が存在する。P支群は7世紀中葉から後半に築かれた一群で、7世紀前葉に他の支群の造営が終わるのに対し、7世紀中葉から造営を開始することや、他の支群が北にのびる尾根上に築かれているが、南向きの斜面に築かれるなど、時期や立地を異にする。また、P支群の南200mのところには金象嵌竜文太刀、緑釉陶棺片が出土した塚廻り古墳、漆塗籠棺片が出土したアカハゲ古墳が存在する。どちらも切石の石室をもつ著名な終末期古墳である。以上の点から、現在ではアカハゲ古墳、塚廻り古墳と同じく、平石古墳群の範疇でP支群は捉えられている。このことは後述するN支群の4基の古墳を評価する上で示唆的である。

## 第2項 N-8号墳

N-8号墳は試掘調査で発見された古墳で、4基の中では最も尾根の先端寄り、南へと屈曲した部分の南斜面に位置する。

**墳丘** 後世の削平により墳丘はまったく残っていなかった。また、周溝もなかったため墳形、規模ともに確定することはできなかった。しかし、石室規模や10号墳が円墳であることから直径5m程度の円墳であったと推測される。

**主体部(第88図)** 8号墳の主体部は花崗岩の自然石を積んだ無袖の横穴式石室である。石室主軸は西に11°振っている。後世の擾乱のため、残りが悪く奥壁ははろうじて2段、側壁は奥壁から1m位までの1段が残っているだけである。左側壁の奥1石は抜き取られている、また奥壁2段目の石材は右側壁方向に動かされているようである。左側壁部分では石材の抜き取り穴が検出できた。

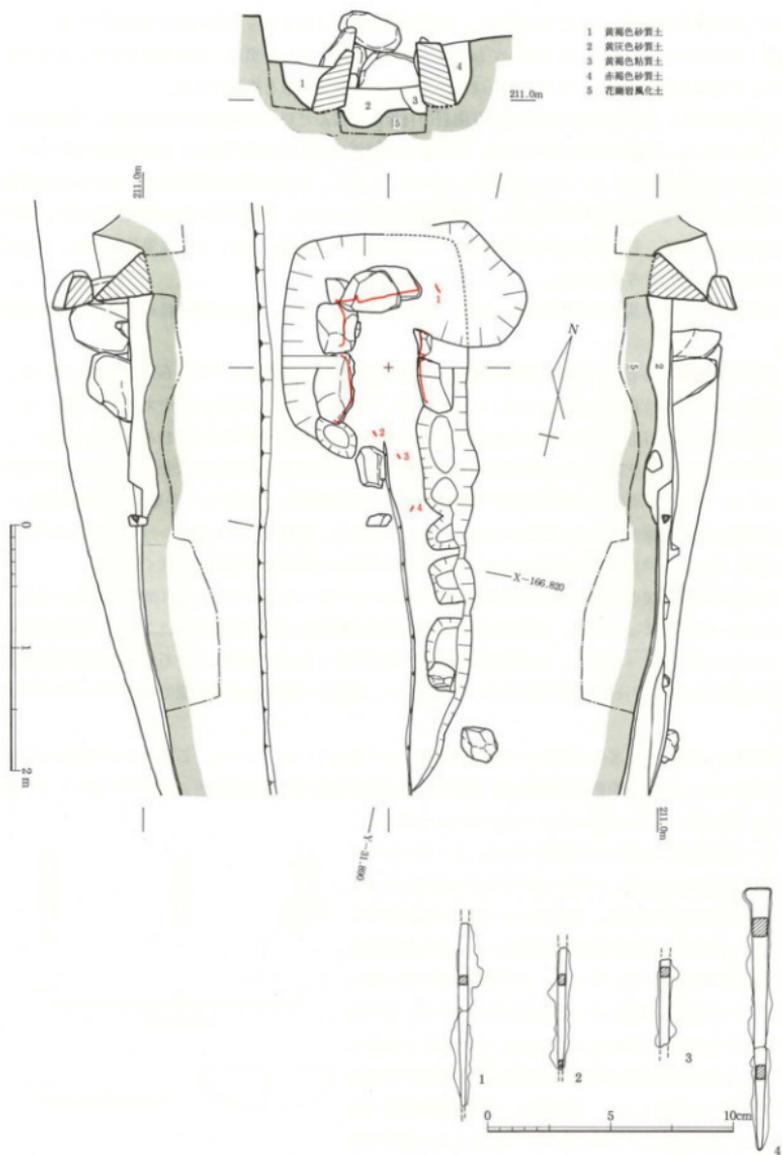
現状で確認できる石室規模は長さ約1m、幅約60cm、高さは約60cmである。石材抜き取り穴から、本来の石室全長は3.2mに復元できる。また、高さは80cm程度のものであったと推測される。

両側壁とも1段目は細長い石材を長辺が縦方向になるように平積みし、1段目の高さが40~50cmになるようにしている。左側壁1段目は8石に復元できる。奥壁は50cm程度の石材を左側壁寄りに平積みし、さらに右側壁寄りに細長い石材を縦方向に置いている。1段目の石材は奥壁、側壁ともに地上部分の高さが30~50cmであるのに対し、地下部分は30~40cmと深い根入れを行っている。石材抜き取り穴のレベルをみると、側壁1段目の据え付けレベルは揃えていたようである。

石室床面に3個の石が置かれている。下部は地山を掘り窪めて置いているため、転落した石材ではなく当初から床面に据えられたものである。しかし、奥壁寄りの1石のみ上面のレベルが10cm高い上、配置も不規則であるため若干の疑問は残るが、棺台の可能性が考えられる。棺台だとすれば、埋葬された棺の長さは1.8mに復元できる。

**遺物(第88図)** 前述したように、石室内は擾乱を受けており石室内床面付近から3本、左側壁の奥壁寄りにある擾乱坑底から1本、計4本の鉄釘が原位置からかなり動かされた状態で出土しただけである。

1~3はいずれも頭部及び先端部を欠失しており、断面形はいずれも方形であるが、全体の形状、法量を復元することはできない。また、木質も残っていなかった。4のみ完形で残っていた。全長は10.7cmで折り曲げによって頭部を形作っている。断面は方形で、断面の法量は頭部付近は7×7mm、中程からやや先で6×4mmを測る。この釘も木質が残っていなかったため棺材の厚さは不明である。



第88图 N-8号填石室·床面出土文物实测图(1/40、1/2)

### 第3項 N-9号墳

N-8号墳の北西17mのところに位置し、尾根の稜線から1段下がった南斜面に築かれている。

**墳丘** この古墳も墳丘はまったく残っておらず、周溝もなかったため墳形、規模を確定することはできない。8号墳と同手法をもってするならば直径4～5m程度の円墳と推測できる。

**主体部(第90図)** 主体部は南に開口する花崗岩の自然石を積んだ無袖の横穴式石室である。主軸は東に5°振っている。奥壁は2段目から上が、左側壁は奥壁寄りの3石と羨門部の1石が失われていたが、右側壁は比較的残りがよく、2段目まで残っていた。しかし、石室前面は傾斜地になっているため右側壁が完全に残っているかは不明である。石室規模は全長2m以上、奥壁付近の幅は不明であるが、羨門付近で50cmを測る。石室幅は奥壁付近ではやや広くなるようである。また、高さは現状で50cm、本来は70～80cmであったと考えられる。

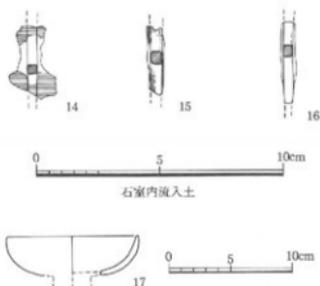
石室構築のための墓壇は幅約1.6m、長さ2.1m以上を測る。また、深さは奥壁付近の現状で90cmを測る。

石室の構築順であるが、最初に墓壇を掘削した後、まず奥壁の石を置きそれから側壁を積んでいる。両側壁とも1段目は石材を平積みせず、小口積みにしている。また、1段目は形や大きさも不揃いで、右側壁の奥から2石目などは2段分の高さがある。2段目の石材は隙間にはめ込むようにして置き、この段階で一旦レベルを揃えている様相が窺える。奥壁は1段目に上部が三角形を呈する石材を平積みしている。2段目はやはり三角形の石材で隙間を埋めるように置き、やはりレベルを揃えたのであろう。左右側壁2段目上面のレベルは床面から約40cmと一致するが、奥壁2段目上面のレベルはそれより10cm以上高くなる。1段目石材の据え付けのための掘り込みは10cm程度と8号墳ほど深くはない。

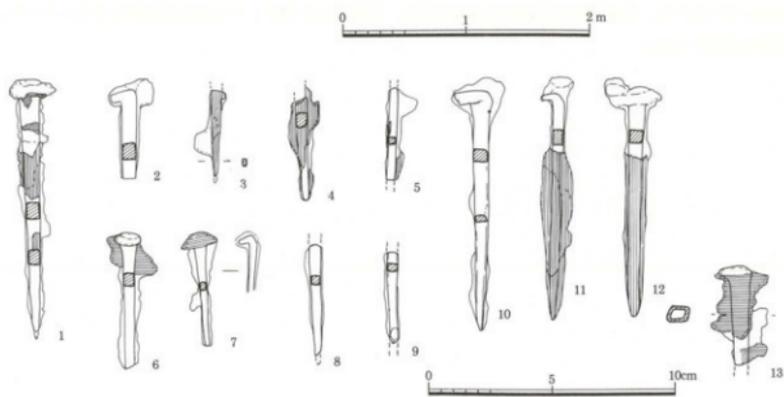
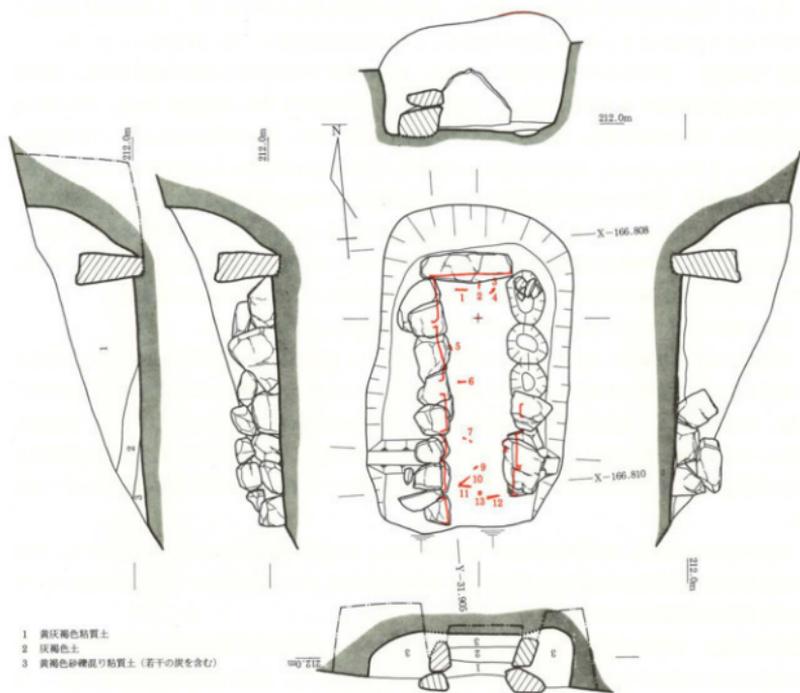
石室内の堆積状況を観察すると石室入口付近では入口に向かって上がっていく2層の堆積土があり、その上は一気に埋まっている。このことから石室の天井や側壁の石材が抜き取られたのは、石室が開口してからしばらくたった後で、その際に石室内が一気に埋まった様相が窺える。石材の抜き取りは盗掘が目的ではなく単に石材の入手が目的だったのだろう。後述する遺物の遺存状態の良さはこのためである。

**遺物(第89・90図)** 4基の古墳の中では最も遺物がよく残っていた。しかし、石室内からは鉄釘しか出土していない。床面の鉄釘は左側壁の1段目の石材が抜き取られた付近を除き、壁寄りでは出土しているため、原位置からさほど動かされてはいないようである。

1～13が床面から出土した鉄釘である。1・10～12の4本が完形で残っていた。いずれも折り曲げて頭部を作っており、断面は方形である。長さは9.3～10.5cmとほぼ等しい。また、頭から2.5cmまでは横方向の、そこから先は縦方向の木質が残っている。2・6・7・13も頭部が残っているが、すべて折り曲げによって頭部を作っている。他に石室内からは流入土下層から3本の鉄釘(14～16)が出土している。釘の出土状況や木質の遺存状況から復元できる木棺の法量は長さ約1.7m、幅約40cm、棺材の厚みは2.5cmである。17は石室の1m南の斜面から出土した土師器高杯の杯部である。口径は10.4cm、深さは3.2cmを測る。



第89図 N-9号墳出土遺物実測図(1/2、1/4)



第90図 N-9号墳石室・床面出土遺物実測図 (1/40、1/2)

#### 第4項 N-10号墳

もっとも尾根の基部寄りに位置する古墳で、9号墳と同様に稜線から1段下がった南斜面に9号墳と平行するように築かれている。4基の中ではもっとも石室規模が大きく、唯一周溝をもっている。

**墳丘(第91図)** 墳丘はすべて削平されていたが、石室背後に半円形に巡る周溝が検出できた。高さは不明であるが直径約6mの円墳であった。周溝の幅は石室の背後で1.9m、横で約1.5mを、また深さは背後で80cm、横で30cmを測る。溝底のレベルは背後がもっとも高く、奥壁2段目上面と同レベルであり、横に向かって下がっている。両者の比高は1mを測る。背後付近の周溝中から土師器杯が出土している。

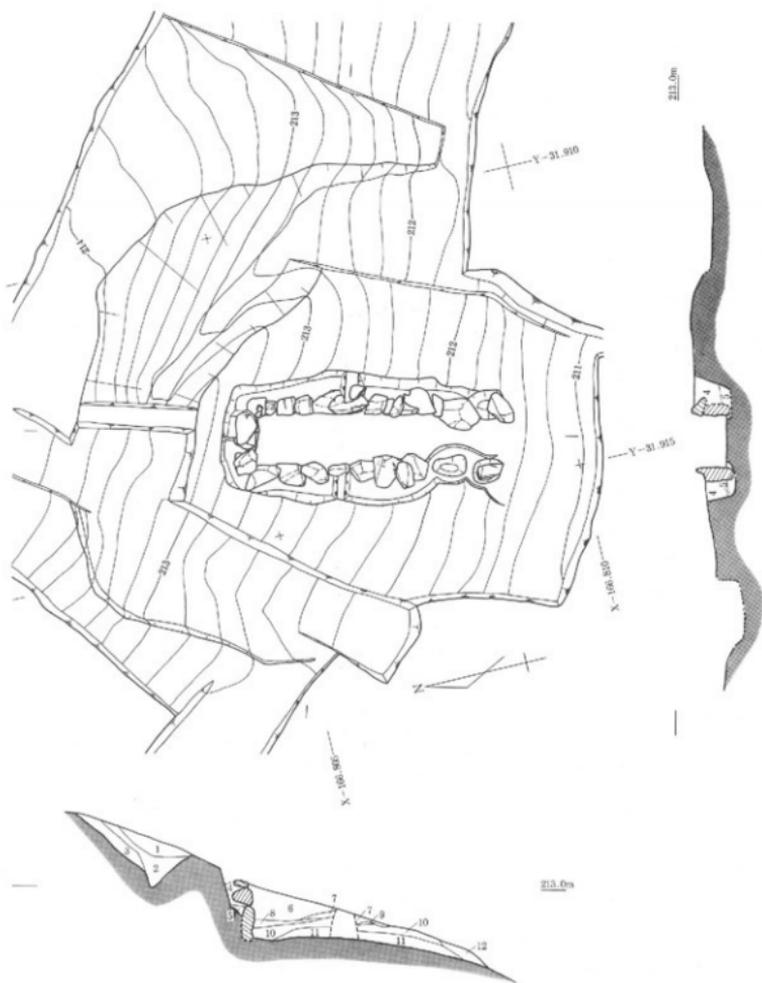
**主体部(第92図)** 10号墳の主体部は花崗岩の自然石で積まれた無軸の横穴式石室である。南に開口し、石室主軸は東に15°振っている。4基の中では石室の残りがもっともよく、天井石は失われているが、奥壁はほぼ完全に、側壁1段目も羨門付近の石は動かされているが全長を推定できる程度に残っている。石室全長は3.45m、幅は奥壁付近で95cm、中央部で80cmを測る。また、高さは95cmを測る。

墓壇は幅約2m、長さ4.5mの隅丸長方形で、深さは奥壁付近で1.1mを測る。

両側壁の1段目は細長い石材の長軸方向を縦に平積みし、上面のレベルが床面から50~60cmになるよう揃えている。左側壁は右側壁より細長い石材を多用しているため、右側壁1段目が8石からなるのに対し、11石からなる。奥壁は1段目に高さが55cmで、幅45cmと35cmの2石を平積みしている。1段目上面のレベルは側壁と揃えている。さらにその上に高さの低い石を2~3段小口積みしている。側壁の上部は左側壁側で2段目1石が残っているだけなので詳細はわからないが、3段に積み重ねられていたようである。

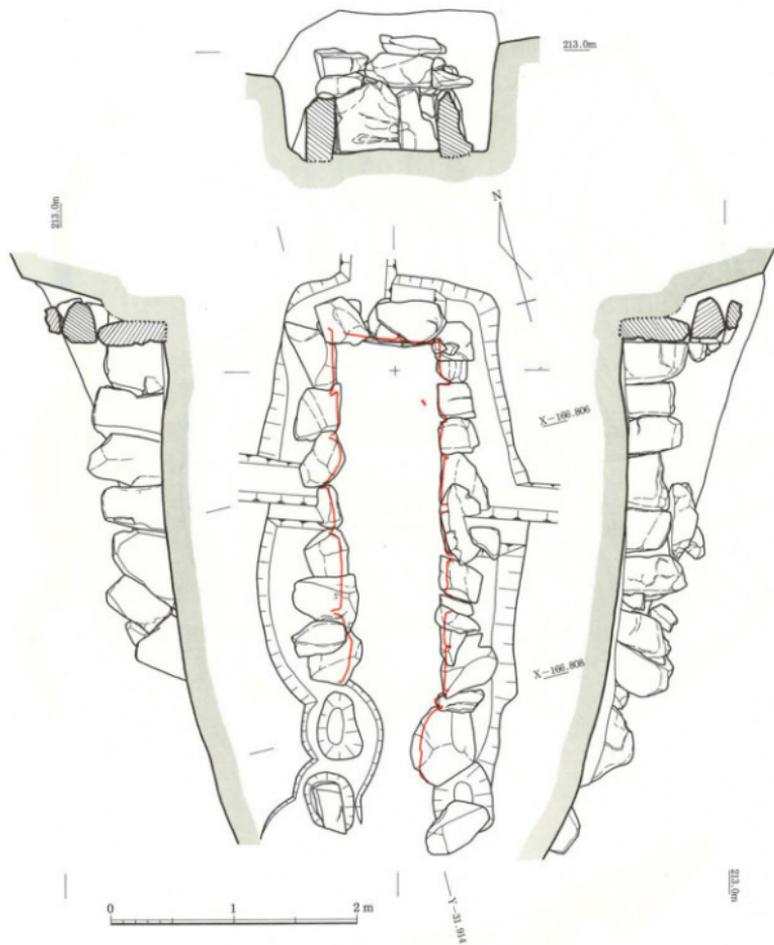
石室床面のレベルは、奥半分では水平であるのに対し、手前側は羨門に向かって下降していく。石材や抜き取り穴の残り具合から後世の擾乱によるものとは考えにくい。築造当初からのものであろう。中央部と羨門部の比高は60cmを測る。

**遺物(第92図)** 石室の埋土は水平の堆積層が数層みられるため、古くに石室天井石は持ち去られ、床面も荒らされたのであろう。このため石室がよく残っているのに対し、遺物の残り具合は非常に悪い。石室内からは床面付近で鉄釘が1本出土しただけである(第92図)。断面は方形であるが、頭部と先端部を欠失しているため、全長や頭部の形状は不明である。周溝内から出土した土師器杯は細片であったため、図化できなかった。



- |              |                    |
|--------------|--------------------|
| 1 暗灰褐色土      | 7 緑黄状色土            |
| 2 灰褐色粘質土     | 8 黄褐色土(6よりやや明るい)   |
| 3 黄褐色砂礫混り土   | 9 黒色土              |
| 4 黄褐色砂礫混り粘質土 | 10 暗黄状色粘質土(しまりが良い) |
| 5 黄褐色粘質土     | 11 暗黄褐色土           |
| 6 黄褐色土       | 12 暗黄褐色土           |

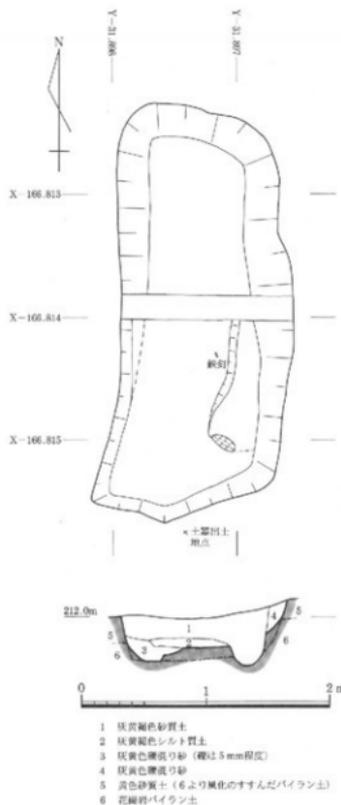
第91図 N-10号墳横丘図(1/80)



第92図 N-10号墳石室・床面出土遺物実測図(1/40、1/2)

## 第5項 N-11号墳

11号墳は8・9号墳のほぼ中間に位置する。検出当初は土坑としていたが、中から鉄釘が出土したことや、8～11号墳が等間隔に並び、それぞれ同じ方向を向くことから、石材がすべて抜き取られた古墳の墓壇と考えられる。



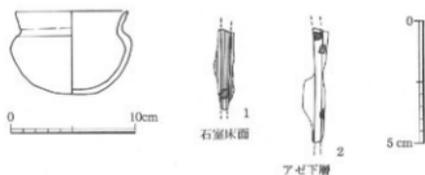
第93図 N-11号墳(1/40)

墳丘 8・9号墳とおなじく墳丘はまったく残っておらず、周溝もなかったため墳形、規模は不明であるが、他の3基を例にとるなら直径4～5mの円墳であったと考えられる。

主体部(第93図) 石材はすべて抜き取られているが、他の3基同様南向に開口する無袖の横穴式石室であったと考えられる。

墓壇の規模は幅1.4m、長さ3.2m、深さは50cmを測る。墓壇規模を参考にあえてするなら、石室全長は2.5m程度と推測される。

遺物(第94図) 石室床面から1本、堆積土下層から1本、計2本の鉄釘が出土している(1・2)。いずれも頭部及び先端部を欠失しており、断面形が方形を呈すること以外、頭部の形状、全長は不明である。なお、2本ともに縦方向の木質が遺存している。3は土師器の壺で、墓壇のすぐ南で口縁部を下に伏せた状態で出土した(第93図・図版76)。口縁部径8.7cm、器高6cmで、口縁部外面から頸部にかけてヨコナデを施す。口縁部はとがり気味である。7世紀前半のものと考えられる。



第94図 N-11号墳出土遺物実測図(1/2, 1/4)

## 第6項 小結

今回調査したN-8～11号墳の調査結果についてまとめると次のようになる。①南東から南へと屈曲してのびる尾根上に築かれている。②稜線から1段下った南斜面にはほぼ等間隔に並び、軸も揃えている。③いずれも無袖の横穴式石室を内部主体とし、大きさから1体埋葬と考えられる。④築造時期は明確にし得なかったが、石室構造や付近出土の土器から7世紀前半あるいは中頃に相次いで築かれたと考えられる。以上が、今回明らかになったN支群の内容である。この内容をもとに一須賀古墳群におけるN支群の位置付けを考えてみよう。

一須賀古墳群のほとんどの支群は北西あるいは北にのびる尾根上に築かれている。この点からN支群の古墳は立地を異にするといえよう。また、他の支群の造墓活動が6世紀後半にピークを迎え7世紀前葉で終息するのに対し、N支群では7世紀前半あるいは中頃からの開始と支群の形成時期も異にする。

立地や築造時期を異にする支群にP支群がある。P支群は平石城跡から西にのびる尾根から南に派生する尾根上、ちょうど蜂ヶ尾遺跡のすぐ南側に位置する。現在2～4号墳の3基が確認されており、3号墳が発掘調査、2・4号墳が測量調査されている。4号墳の詳細は不明であるが、2号墳は背後にコの字形の周溝をめぐらす方墳で、花崗岩の切石を用いた無袖の横穴式石室を内部主体とする。4号墳はLの字形に周溝をめぐらす方墳で、内部主体には花崗岩の切石による両袖の横穴式石室をもつ。両者とも石室には漆喰が使用されている。墳丘・石室の形態から3号墳は7世紀第3四半期、2号墳は7世紀第4四半期の築造時期が考えられている。P支群の報告書では、他の支群と立地を異にする、アカハゲ古墳、塚廻り古墳などの同時期の古墳を含む平石古墳群と同一の造営主体による築造と考えるほうが妥当という点から一須賀古墳群として包括すべきではないとしている。この考えに立ち、現在ではP支群は平石古墳群の一部として捉えられている。

N支群とP支群を比較した場合、南方に伸びる尾根上という点では同じであるが、P支群のように独立した地形上にあるとはいえない。築造時期も他の支群の造営終了から空白期間においてP支群の造営が開始するのに対し、N支群はP支群に先行して築かれ、時期的な隔絶性も希薄である。また、N支群は円墳、P支群は方墳と墳形も異にする。以上の点から、平石古墳群のなかでN支群→P支群という変遷を考えることもできるが、N-1～5号墳の内容が不明な現状では一須賀古墳群の中で新しい時期まで造営がづく一支群とせざるを得ない。この点に関しては今後詳細な検討を加える必要があるだろう。

さて、N-8～11号墳の関係であるが、ほぼ等間隔に並び、軸も揃えることから4基の古墳には密接な関係が想起できる。また、各古墳の築造時期は確定できなかったが、石室の形態もよく似たもので短期間の内に相次いで築かれたと考えられる。4基の古墳はおそらく墓道も共有するのであろう。4基の古墳が4代にわたって築かれたのではなく、2基ずつ2代で、あるいは4基がほぼ同時に築かれたと想定できる。さらに想像たくましくするなら夫婦で2代あるいは2組の夫婦とも考えることができる。N支群と同様にあり方をものとして平尾山古墳群雁多尾畑第49支群をあげることができる。雁多尾畑第49支群は終末期に属する10基の古墳からなる支群で規模、主軸の揃え方、周溝の共有状況などから2基一組と捉えられるものが幾組もある。両者は終末期群集墳のあり方を考える上で興味深い資料といえよう。

N支群の調査区では、4基の古墳以外に数基の土坑が検出された。大きさは50cm程度のものから2mを越すものまでまちまちであるが、いずれも円形あるいは楕円形を呈し、埋土は黒褐色の粘質土である。遺物が出土していないため、古墳より後のものであること以外、時期や性格は不明である。なお、8号墳付近の包含層から寛永通寶が2枚出土している(第95図)。(赤井)



第95図 N支群出土銭貨拓本(1/1)

参考文献 河南町教育委員会 『一須賀古墳群P支群発掘調査報告書』 1983年

柏原市教育委員会 『平尾山古墳群雁多尾畑第49支群発掘調査概要報告書』 1989年

## 第8節 その他の遺跡の調査

### 第1項 東丘陵の火葬墓



第97図 遺構配置図(1/100)



第96図 調査区位置図(1/5000)

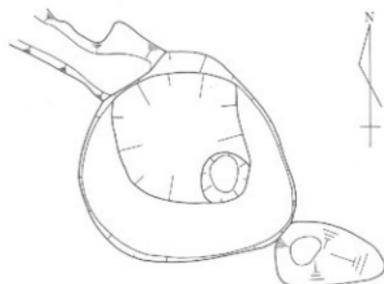
はじめに

本火葬墓は、事業地内の最も東端に位置する丘陵上から、試掘調査において発見されたものである。発見時、周辺にも同様な火葬墓が集中して築かれている可能性が考えられたため、試掘トレンチを拡幅したが、当初確認の1基のみしか発見されず、単独立地であった。調査面積が狭少であるので、そのまま引き続いて本調査を実施した。調査面積は約200㎡である。

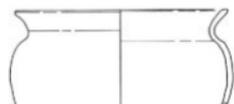
#### 遺跡の立地(第96・97図)

火葬墓は、松山山城遺跡から東に向けて伸びる丘陵が、北に方向を変える屈曲部付近に立地する。東に伸びてきた丘陵は、ちょうど火葬墓の位置する地点で標高が最も低くなり、丘陵の屈曲点部分でピークを形成している。このピークの足下には太子町から河南町に抜ける広域農道の走る谷が南北に伸び、東の山腹には磐船神社が望まれ、眺望は極めて良好な立地である。

検出面は表土(腐植土)直下の地山で、覆土の堆積は10cm程度と非常に薄い。地山は黄褐色を呈する粒子の粗い花崗岩バイラン土である。



第98図 火葬墓実測図(1/20)



第99図 火葬墓出土土師器(1/4)

#### 火葬墓の構造と出土遺物(第98・99図)

火葬墓は径約80～90cmの不整形円形を呈し、深さは約45cmの規模を有する。周辺は立木の根によって、一部攪乱を受けている。土坑の底部は3段になっており、浅く皿状に1段目が掘り込まれ、スリ鉢状に2段目が掘られている。3段目は直径約20cm程度で、底部の形状は丸い。この3段目部分に後述する蔵骨器の土師器甕が納置されたものと考えられる。

2段目の下場から下部には、木炭が充填されていたが、遺物や骨片などは

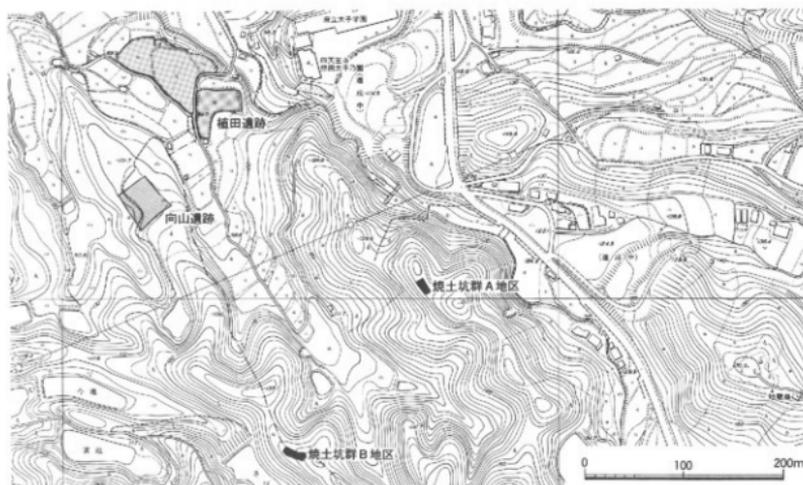
全く出土しなかった。上部には暗灰褐色土の堆積が認められ、その上面付近から蔵骨器と考えられる土師器の甕1点が出土している。甕は破片が散乱した状態で発見されており、体部下半の破片が不足し、完全に復元するのは不可能であった。上層の暗灰褐色土は、表土とほとんど区別つかない土質であり、攪乱による可能性が強いものであった。したがって、蔵骨器であろうこの土師器甕も、攪乱によって破砕されたものと考えられ、埋葬当時の状況は知り得なかった。

土師器甕は、径約17cm、残存器高約8cmを測る。体部下半部の破片も数点認められたが、接合はできなかった。口縁部はやや外反気味に立ち上がるもので、端部はやや外方につまみ上げられ、内面には明瞭な段を有する。体部の肩部から口縁部内外面にかけては、ヨコナデで仕上げられているが、体部内面は器壁の摩滅が著しく、調整は不明である。体部外面はユビオサエによる指頭痕らしき凹凸が認められるが、不整方向のナデによってナデ消されている。焼成はおおむね良好で、胎土は稠密である。色調は暗赤褐色を呈する。

#### 小結

今回の調査において発見された火葬墓は、この東丘陵の例と松山山城遺跡から発見された2例の計3基となっている。いずれも群を形成することなく、単独の立地であった。时期的には松山山城遺跡のピーク付近から検出されたSK-1とほぼ同時期の9世紀中葉前後に属するものと考えられる。これらの火葬墓が、このような山中に築かれた背景がいかなるものであったのか定かではないが、展望が開ける東方には磐船神社や高貴寺が位置するなど、地域的にはこれらとの関係も推察されよう。(池田)

## 第2項 焼土坑群A・B・C地区



第100図 焼土坑群A・B地区位置図(1/5000)

### はじめに

今回の調査では、前節までに報告した6遺跡の他に、3ヶ所で焼土坑数基がまとめて確認されている。いずれも試掘調査の時点では炉跡としていたものであるが、後述のとおり炉とは考えにくいため、ここでは焼土坑(群)として取り扱う。焼土坑群A地区・B地区・C地区は、それぞれ試掘調査時に炉跡B・炉跡C・蜂ヶ尾遺跡第三区としていたものである。

### 焼土坑群A地区(第100・102図)

向山遺跡の東、ゴルフ場用地の東北端には北西に伸びる尾根がある。この尾根の先端付近の鞍部に焼土坑A地区は位置する。

焼土坑は尾根の中央、鞍部の底付近で5基検出された。1番北にあるSK-1は100×70cmの長円形で深さ25cmを測る。SK-1から約3m離れてSK-2～5は数十cmの間隔で並んでいる。いずれも平面形は隅丸長方形を呈し、SK-2は95×65cmで、深さ10cm、SK-3は80×65cmで、深さ20cm、SK-4は100×65cmで、深さ20cm、SK-5は95×90cmで、深さ20cmを測る。

5基の土坑はほぼ同規模で、いずれも壁は熱を受け赤変しているが、底までは焼けていない。内部は炭混じりの土で埋まっているという共通点をもつ。遺物はSK-2から中世のものと考えられる土器片が出土しているだけで、周辺からも遺物の出土はない。

### 焼土坑群B地区(第100・101図)

A地区から谷をはさんで西にある尾根上に位置する。北300mのところ、この尾根から派生する小尾根の先端付近に向山遺跡がある。

B地区では5基の焼土坑が検出された。SK-1・2は平面形は隅丸長方形を呈する。規模はそれぞれ105×90cm、深さ21cm、105×80cm、深さ35cmを測る。A地区で検出された焼土坑とほぼ同規模のものである。SK-3・4・6はやや規模が大きく、SK-3は長辺165cm、短辺は130cm以上を測る隅丸長方形あるいは方形で、深さは35cmを測る。SK-4は170cm以上×90cm、深さ50cmの長円形である。SK-6は長辺140cm、短辺は90cm以上の隅丸長方形で、深さは35cmを測る。いずれもA地区のものと同じく壁は熱を受け赤変するが底は焼けていない。埋土には炭を含む。

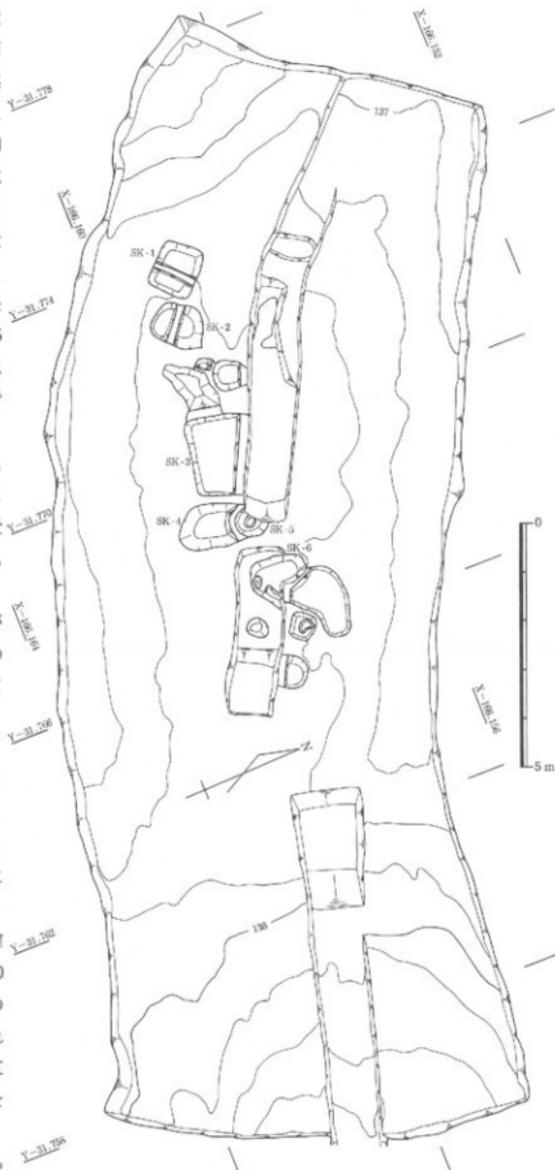
遺物は古墳時代の須恵器片が1点包含層から出土しているのみで、遺構から遺物は出土していない。

#### 焼土坑群C地区(第67・103図)

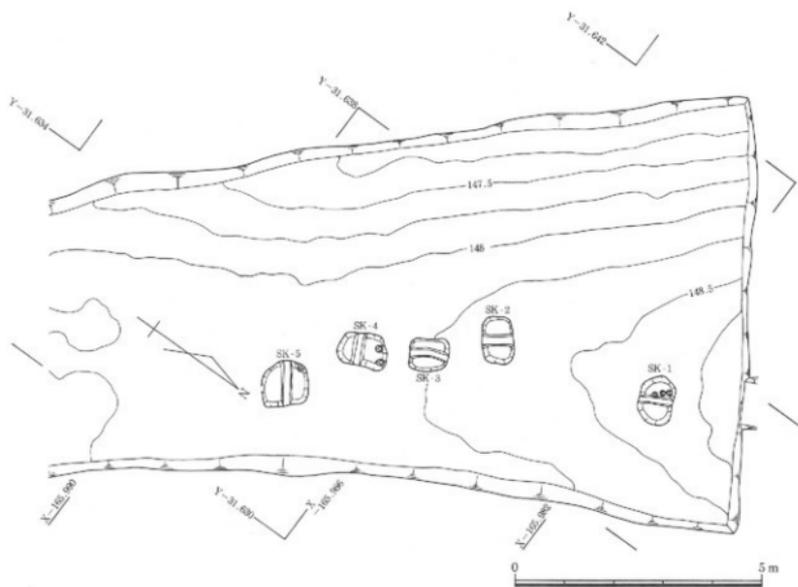
開発区域の南西端にあたり、蜂ヶ尾遺跡第II区の西100m、北東に向かってのびる尾根上に位置する。

C地区では2基の焼土坑が確認できた。SK-1は100×70cmの、SK-2は105×65cmの隅丸長方形で、深さはそれぞれ35cm、50cmを測る。A・B地区のものと同じく、壁のみが熱を受け赤変し、埋土に炭を含む。

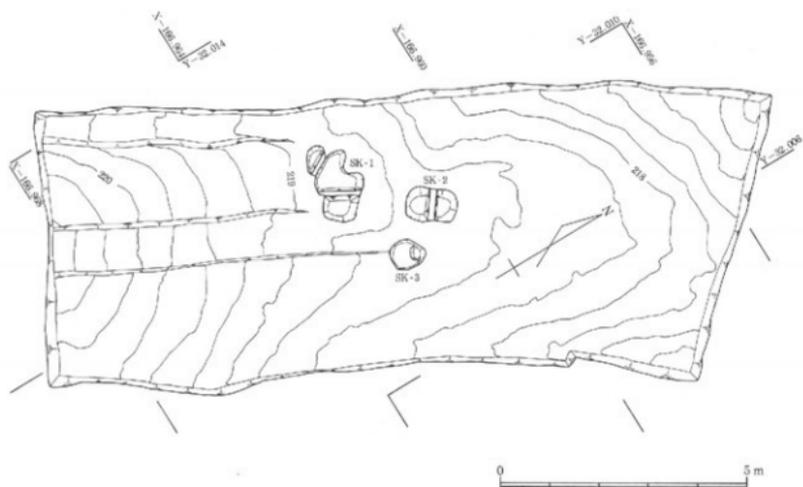
遺物は、遺構からも周辺からも出土していない。



第101図 焼土坑群B地区(1/100)



第102图 烧土坑群A地区(1/100)



第103图 烧土坑群C地区(1/100)

表16 焼土坑一覧表

地区名	遺構名	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	備考
蜂ヶ尾遺跡Ⅱ区	SK-1	90以上×55	10	隅丸長方形	長辺規模不明
	SK-2	100×100	40	隅丸方形	
	SK-5	140×80	20	不整形	
尺堂遺跡Ⅱ区	SK-4	85×70	25	隅丸長方形	
	SK-5	95×75	15	隅丸長方形	
焼土坑群A地区	SK-1	100×70	25	長円形	
	SK-2	95×65	10	隅丸長方形	
	SK-3	80×65	20	隅丸長方形	
	SK-4	100×65	20	隅丸長方形	
	SK-5	95×90	20	隅丸方形	
焼土坑群B地区	SK-1	105×90	21	隅丸長方形	
	SK-2	105×80	35	隅丸長方形	
	SK-3	165×130以上	35	隅丸方形?	短辺規模不明
	SK-4	170以上×90	50	長円形	長辺規模不明
	SK-6	140×90以上	35	隅丸長方形	短辺規模不明
焼土坑群C地区	SK-1	100×70	35	隅丸長方形	
	SK-2	105×65	50	隅丸長方形	

### 小結

焼土坑は焼土坑A・B・C地区を含めて5地区から17基検出されている(表16)。17基の焼土坑には共通要素が多く、すべてを含めて焼土坑のまとめとした。

焼土坑(群)にみられる共通要素をまとめると次のようになる。①立地的には尾根の稜線上に2から5基が並ぶようにある。しかし、中ほどあるいは鞍部と最高所には設けられてはいない。②規模はB地区のSK-3・4が長辺165cm以上と大きい、その他のものは長辺が100cm前後で短辺が70~80cm前後、あるいはこれよりひとまわり大きいものがほとんどである。③平面形は不整形や長円形のものがあがるがほとんどが隅丸長方形である。④壁が赤変するほど熱を受けており、埋土に炭を含む。

焼土坑は以上の共通要素をもち、2ないし数基がまとまってあることから、同時代に同目的で造られたと考えることができよう。その性格であるが、試掘調査時点では鍛冶炉と考えていたが、土坑以外に何らの遺構もなく鍛冶道具や金屑などの遺物も出土しておらずとは考えがたい。熱を受け赤変するのは壁面のみで底面まで及んでおらず、当初から天井が架けられていなかったと考えられるため、狼煙台の可能性もあるが、付近の最高所ではなく眺望の点からも疑問が残る。したがって、現状では性格は不明とせざるを得ない。時期についてもA地区のSK-2から中世の土器片が、蜂ヶ尾遺跡Ⅱ区のSK-2から古代の土器片が、B地区の包含層から古墳時代の須恵器片が出土しているが、いずれも遺構の時期を決しがたいものがある。

焼土坑は、他の遺跡でも散見されるが、時期や性格が明らかになっているものは少ない。そのすべてが同時代で同目的のものであるとはいえないが、今後の類例の増加に期待したい。(赤井)

## 第Ⅳ章 まとめ

今回調査したゴルフ場の開発計画は、特に考古学関係者の間では著名であった一須賀古墳群の隣接地ということで、文化財保護の見地から長い期間を費やして慎重な協議が重ねられたのであった。しかし平成5年3月には、関係各局の手続きも終わり開発許可が出されるに至ったので、発掘調査に着手することになったのである。調査にあたっては、まず造成予定地の全域に延長5kmに及ぶ試掘トレンチを掘削し、本調査を行なう範囲を確定した。

試掘調査で特筆されることは、従来一須賀古墳群U・V・X支群としてプロットされていたものはすべて古墳ではないことが確認されたことである。同時に、U・V支群に近く立地条件が似ており、同様の経過で分布図に掲載されたW支群も、古墳である可能性は限りなく低いことがわかった。代わりに終末期古墳や奈良・平安時代の火葬墓、中世の集落や山城などが検出され、10遺跡合計19,300㎡の調査を実施した。

ゴルフ場造成予定地の丘陵の北縁は磯長谷に向けていくつかの舌状丘陵が突出し、その上に尺堂遺跡、向山遺跡、植田遺跡が立地している。造成予定地南部は急峻な尾根が複雑に連なり、その尾根上に松山山城遺跡、蜂ヶ尾遺跡、一須賀古墳群N支群が立地する。この10遺跡の調査成果は前章で記述した通りであるが、以下、時代順に整理してまとめにかえたい。

旧石器時代から古墳時代前半については、今回の調査ではほとんど資料を得られなかった。植田遺跡の包含層出土のサヌカイト破片には旧石器の可能性もあるものもあるが、その時期の遺構はない。古墳時代になると尺堂・向山遺跡などで少量の遺物が出土したが、明確な遺構はなかった。尺堂遺跡の埴輪片や向山遺跡の須恵器などの存在を考えると、予定地北縁部に古墳時代の何らかの遺構が存在していたことは考えられるが、その内容を明らかにすることはできない。

6世紀中頃から7世紀前半にかけて一須賀古墳群では、200余基の古墳が造営された。そのうちの80基余りが調査され、金銅製の冠や耳飾り、銀製釵子、ミニチュア炊飯具などが出土し、渡来系の集団の墳墓と考えられている。7世紀中頃までには一須賀古墳群の造営は、ほぼ終息する。その東限は現在の風土記の丘と、その北に伸びる古墳が密集する3つの尾根の範囲に限られ、ゴルフ場造成地には及ばないことがわかった。

一須賀古墳群における造墓活動がほぼ終息するころ、終末期古墳が群の東南部に造られることが、一須賀古墳群P支群の調査で知られていた。今回、一須賀古墳群N支群で4基、松山山城遺跡で1基の終末期古墳を調査し、この地における終末期古墳の数を増やした。これらは行政上は一須賀古墳群の中に含まれているが、塚廻り古墳やアカハゲ古墳などが存在する平石の谷に近接する尾根の南斜面に造られており、一須賀古墳群の造墓集団が引き続き造営したのかどうか、検討を要する。

これらの終末期古墳が造られた7世紀代には、磯長谷には推古陵古墳や二子塚古墳などの大王陵クラス古墳が造られた。これらの大古墳に太井川をはさんで向かい合う尺堂遺跡第1区では、7～8世紀の集落が営まれた。円面硯の存在などが特殊な集落であった可能性を窺わせる面もあるが、地滑りの影響により遺構の保存状態が悪く、集落の構成や性格は明らかにすることはできなかった。しかし、終末期の大王陵に平行する時期に成立した集落として注目に値する。

終末期古墳が営まれた一須賀古墳群の東南部一帯は、その後も引き続き墳墓の地として利用されていて、8～9世紀には火葬墓が造られた。松山山城遺跡の支根Aに8世紀の、松山山城古墳の東斜面に

9世紀の火葬墓が検出された。また、松山山城遺跡から北に続く尾根上にも試掘調査時に1基を検出、都合3基を調査した。これらの火葬墓の立地は極めて散発的で、尾根筋や稜線から下がった斜面に単独で造られるという特徴をもつ。

その後、10世紀から12世紀前半に至るまでの顕著な遺構は発見されなかった。しかし、向山遺跡の包含層から11世紀前後のものと考えられる黒色土器の破片が出土しており、ゴルフ場用地の北縁部の開発がこの時期頃始まったことを窺わせる。また、植田遺跡のI区には12世紀代に小規模な建物群が出現するが、短期間しか続かなかつたようだ。

14世紀前半には館と山城が出現する。植田遺跡は廃絶後木田が造成されたため、集落中心部分は削平されてその本来の姿は失われているが、II区には凝灰岩切石の建築部材を用いた広大な建物が中央部に聳えていた可能性が大きい。その立地は周囲を谷や斜面で囲まれた防御を意識したもので、遺物をもて輸入陶磁器や国産陶磁器の多さ、鉄鎌や石鍋の存在など一般農村集落とは考えられず、在地の有力者が構えた居館の跡と考えられる。その終焉は、調査地各所で検出された焼けた建築部材が物語るとおり、南北朝の動乱のなか戦火によって焼け落ちたと考えてもそれほど無理ではあるまい。

植田遺跡と前後する時期に松山山城と蜂ヶ尾遺跡があり、平石城の補助的施設と考えられる遺構を検出した。平石城は、鎌倉時代初期から平石の地を本拠とし、南北朝期には千早赤阪を本拠とする楠木氏とともに南朝方に与した平石氏の城で、築城時期は不明であるが延文5年(1360)落城したことが知られている。現在、主廊と副廊1が残っており、主廊の一部が大府府の史跡に指定されている。松山山城遺跡と蜂ヶ尾遺跡で検出された遺構は、堀切や尾根基部のカット、片屋根建物、堅穴建物などで、広い範囲に極めて散漫に分布している。建物は簡易で小規模なもので、外部から目立たない谷の奥の低い丘陵に立地しており、非戦闘員の避難小屋と考えられた。

植田遺跡と松山山城遺跡・蜂ヶ尾遺跡はともに14世紀中頃～後半に廃絶しており、松山山城遺跡から尾根伝いに約900m北方に植田遺跡が存在するという位置関係にある。両者は平時の居館、有事の山城という有機的關係にあったと思われる。南北朝期、南河内は主要な戦場のひとつであった。今回の調査成果は、今後南河内における南北朝期の歴史を考えるにあたって無視できない資料と評価できよう。

以上が今回の調査のあらましである。なお各遺跡の調査が終了するごとにその取り扱いについて保存協議を行なったが、特に遺構の保存状況が良好であった植田遺跡と一須賀古墳群N支群の一部は事業者の協力により保存されることとなったことを付記する。(岩崎)



写真4 N支群保存整備状況

# 報告書抄録(1)

ふりがな	たいしかんとりーくらぶけんせつにともなううえだいせきほはくつちょうさほうこくしょ							
書名	太子カントリー倶楽部建設に伴う積田遺跡ほか発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山本彰・岩崎二郎・上林史郎・赤井毅彦・池田貴則							
編集機関	一須賀古墳群発掘調査委員会(大阪府教育委員会・河内町教育委員会・太子町教育委員会)							
所在地	大阪府教育委員会	大阪府南河内郡河内町大字白木1359番地の6	2006-941-0351					
	河内町教育委員会	大阪府南河内郡河内町大字山田88番地	200721-93-2500		200721-98-0300			
発行年月日	1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しーどろーがわ 尺堂遺跡	第I区	大阪府南河内郡太子町 大字葉室	27381	34° 30' 18"	135° 38' 55"	1994.5 ～ 1994.8	4,100 1,550	ゴルフ場建設
	第II区	大阪府南河内郡太子町 大字葉室	27381	34° 30' 18"	135° 39' 9"	1994.5 ～ 1994.8	1,425	
おこやまのせき 向山遺跡		大阪府南河内郡太子町 大字葉室	27381	34° 30' 18"	135° 39' 9"	1993.11 ～ 1994.3	4,000	
うらぶだ 榎田遺跡		大阪府南河内郡太子町 大字畑	27381	34° 30' 16"	135° 39' 10"	1993.11 ～ 1994.3	4,000	
まつやまのせき 松山山城遺跡		大阪府南河内郡太子町 大字葉室・畑	27381	34° 29' 48"	135° 39' 17"	1994.3 ～ 1994.5	5,617	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
しーどろーがわ 尺堂遺跡	第I区	集落遺跡	飛鳥～奈良時代	ビット・溝・土 壇墓?	土師器・須恵器			
	第II区	その他	奈良時代 ?	甕土坑・土坑 溜池遺構	須恵器・瓦			
おこやまのせき 向山遺跡	集落遺跡	平安時代～中世	ビット・溝	黒色土器・土師器・青磁・ 瓦器				
うらぶだ 榎田遺跡	集落遺跡	縄文～中世	擬立柱建物・井 戸・集石遺構・ 自然流路・溝・ 土坑	縄文土器・石帯・瓦器・ 土師器・青磁・白磁・鉄 鍬・凝灰岩切石				
まつやまのせき 松山山城遺跡	古墳・火葬墓 中世山城	古墳～中世	古墳・火葬墓・ 建物・カット遺 構・塙削	須恵器・鉄釘・土師器・ 瓦器・青磁				

## 報告書抄録(2)

ふりがな	たいしかんとりーくらぶけんせつにともなううえだいせきほかはくつちょうさほうこくしょ							
書名	太子カントリー倶楽部建設に伴う稲田遺跡ほか発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山本彰・岩崎二郎・上林史郎・赤井毅彦・池田貴則							
編集機関	一須賀古墳群発掘調査委員会(大阪府教育委員会・河内町教育委員会・太子町教育委員会)							
所在地	大阪府教育委員会 大阪市中央区大手前2丁目		☎06-941-0351					
	河内町教育委員会 大阪府南河内郡河内町大字白木1359番地の6		☎0721-93-2500					
	太子町教育委員会 大阪府南河内郡太子町大字山田88番地		☎0721-98-0300					
発行年月日	1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
種ヶ尾遺跡	大阪府南河内郡河内町 大字一須賀	27382		34° 29' 40"	135° 39' 10"	1994.7 ～ 1994.10	1,400	ゴルフ場建設
一須賀古墳群 N支群	大阪府南河内郡河内町 大字一須賀	27382		34° 29' 45"	135° 39' 09"	1994.8 ～ 1994.11	500	#
東丘陵 火葬墓	大阪府南河内郡太子町 大字畑	27381		34° 29' 53"	135° 39' 23"	1993.8	200	#
焼土坑群 A地区 # B # # C #	大阪府南河内郡太子町 山田・畑、河内町一須賀	27381 27382		34°30'11" 34°30'06" 34°29'40"	135°39'20" 135°39'15" 135°39'05"	1994.9 ～ 1994.10	200 200 100	# #
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
種ヶ尾遺跡	中世山城 ?	中世 ?	竪穴建物 焼土坑	瓦器・土師器・須恵器・ 砥石				
一須賀古墳群 N支群	古墳	古墳時代	古墳(4基)	鉄釘・土師器・鏡貨				
東丘陵 火葬墓	火葬墓	平安時代	火葬墓	土師器				
焼土坑群 A地区 # B # # C #	?	?	焼土坑群					